

第二章 考古学上からみた芦屋

第一節 無土器時代の芦屋

日本の旧石器

大陸と地続きであつた洪積世の時代にも、日本列島の地域には、人類や動物が生育していたことは化石人骨と各種の動物化石によつて認定されている。芦屋市内でもナウマン象の化石が発見されていることは前章に記した。人類の化石は、すべてが単独発見であるため、どのような生活の場をもち、どのような道具をつかい、どのような生活をしていたかということになると明らかではない。しかし洪積世の時代に使用された石器の各種が全国から検出され、この時代の生活の一端をうかがうことができる。

昭和二十四年に群馬県岩宿遺跡いわせきくが発見され、明らかに洪積世の土層の中に包含されている石器が確認されたことから、この時代の研究がはじめられた。それ以来、今日までに、全国で百か所以上の旧石器文化の遺跡が発見され、日本では最古の文化と考えられていた縄文文化じようもんぶんのまえに、まだ土器をもたず石器だけを使用した時代のあつることが明らかにされた。

この旧石器文化は、無土器むどき・先土器・プレ縄文などの名で呼ばれている。

この時代に属する主要な石器は、ハンド・アックス（握槌形の石器）、スクレーパー（切出し形の石器）、ポイ

ント（尖頭器・石尖形の石器）、ブレイド（ナイフ形の刃器）、細石器（小形の刃器を組合せて多目的に使う）などの種類に大別されている。

芦屋市出土の旧石器

この旧石器時代に属すると推定される石器が、いわぞの岩園町や朝日ヶ丘町から発見されて

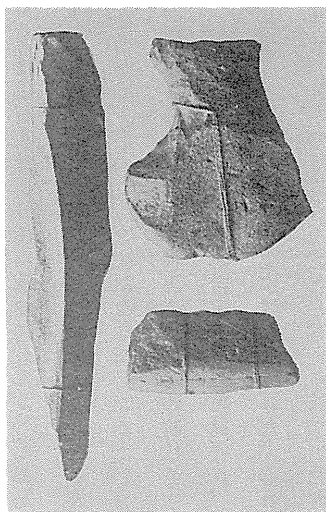


図40 岩ヶ平出土の石器

いる（芦屋市文化財調査報告第四集・昭和四十一年）。

岩園町岩ヶ平出土の石器は紅野芳雄著の『考古小録』所収の図版に見られるもので、戦災で失われ、写真によつて判別するほかないが、縦長の剥片はくせん石器的な石器である（図40の左）。出土状況などは不明であるが、縄文時代の石鏃とともに採集されたものであることが一括撮影されていることによつて知られるから、岩ヶ平地区には縄

文時代の遺跡と、それ以前の旧石器が眠っている可能性を考慮することができる。

朝日ヶ丘出土のブレイド

朝日ヶ丘町の旧石器と認定される遺物は、昭和三十九年の朝日ヶ丘縄文遺跡の発

掘調査の過程で発見された。計画道路の工事ははじまって、多量の縄文前期の遺物が発見されたため、緊急調査をおこなったが、調査に先立って採取された遺物のなかに、ナイフ型ブレイドと認定される石器が若干存在した。発掘調査を行なった範囲内では、縄文前期の住居址床面、そして表土下二メートルの地山じやままで調査したが、縄文以前の地山層じやまからは旧石器の検出はできなかった。道路工事は洪積層の地山面まで掘下げているので、その間

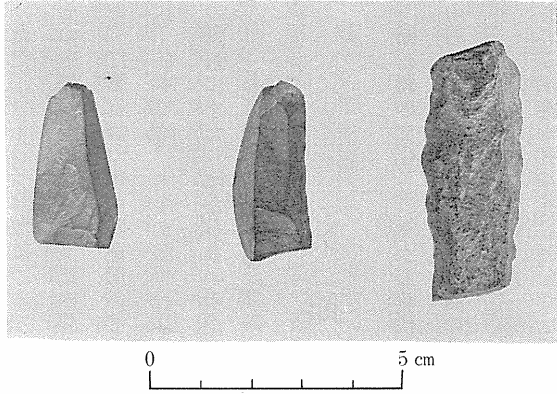


図41 朝日ヶ丘遺跡出土の旧石器

に、たまたま遺存していた旧石器がブルドーザーの刃先によって掘り上げられた可能性もあるのである。出土遺物には、このほかに細石器状の剥片石器も若干あるが、これらの旧石器と考えられる石器は、発掘調査をおこなった縄文前期の遺構内、および縄文文化の包含層中よりは一片も発見されていない。したがって、これらの石器は縄文時代のものではないことが明らかである。

このように確実な発掘調査による検出ではないにしても、芦屋市内の二か所以上の地域から洪積世時代の旧石器と認定される石器が若干ながらも検出されていることは、これらの石器を使用した人達が存在したことを示している。ナウマン象の化石とともに、旧石器の発見によって、洪積世以来、芦屋の地域には人類も動物も生活していたことを推測することができるのである（芦屋市文化財調査報告・朝日ヶ丘遺跡）。

芦屋周辺の旧石器

では、洪積世時代の芦屋市周辺の状況はどのようなであったか。

西方では、神戸市垂水付近や飾磨郡家島町や明石市西方で、ナイフ型ブレイドやポイントや細石器が発見されており、東方では西宮市苦楽園・同広田神社・吹田市岸部・高槻市塚原・藤井寺市国府をはじめ、北河内郡の各

地から、ナイフ型ブレイドやハンドアックスやスクレーパーやポイントなどの旧石器が発見されている。

このように、現在の日本列島が形成され、日本独特の文化といわれる縄文文化が発生する以前において、すでに芦屋市および周辺の洪積層台地には、人類のこした利器が旧石器として遺存しているのである。したがって、芦屋市の歴史・文化のあけぼのも、洪積世の時代からはじまっていると考えられている。

ただ、ヨーロッパでは、ネアンデルタール人が埋葬の風習をもっていたこと、クロマニヨン人が洞窟を掘り、その中に壁面（アルタミラの洞穴などが有名）をのこし、また女人裸像をのこすなどの精神生活をもっていたこと、打製石器や骨角器を用いて、狩猟・漁撈・採集などの生活をおこなっていたことなどが知られているのに対し、日本では、まだまだ旧石器とその使用者である化石人骨が結びつかないため、その生活状況については今後の資料にまたねばならないのが旧石器時代研究の現状である。

第二節 縄文式文化期の芦屋

新石器の文化 無土器時代の遺物が検出された岩宿遺跡の上層部から、無土器文化の石器とは異なった形式の石器が出土している。土層の堆積形成は、自然の状態からいえば、下の層が古く、上の層が新しい。すなわち、下層に属する遺物が古く、上層に包含される遺物が新しいという原則を示している。岩宿遺跡の上層から出土する各種多用の目的をもった石器は、いままでになかった土器を伴っていて、日本に新しい時代がはじまった

ことを示していた。そして、このような例は大分県の早水台遺跡そうすずだいなど、各地でもみられる現象である。この日本最初の「土器」を伴う時代を縄文式文化じようもんしき（縄文文化ともよぶ。以下この名称をもちいる。）の時代と呼んでいる。この土器は縄文式土器とよばれ、わが国の周辺、すなわち、中国大陸・朝鮮半島やその他の地域では、ほとんど発見されないので、日本列島成立後の、はじめての、かつ独特の文化遺産と考えられている。

縄文文化の時代は、土器形式の変遷を基準にして、早期そう（古・中・新ちゆうしん）・前期・中期・後期・晩期ばんの五時期に大別している。そして、この期間は紀元前八〇〇〇〜七〇〇〇年頃から紀元前三〇〇〇〜二〇〇〇年頃までという、数千年以上にわたる長い期間の文化期であり、考古学上では新石器時代の文化とよんでいる時期のことである。

縄文人の生活と文化

縄文早期の人々は洞穴どうけつや岩蔭いわかげにも住んだが、適当な土地に自らの住居もつくりはじめた時代である。かれらの住居は、地面に円形または方形の深さ五〇センチぐらいの穴を掘り、その上に中心柱ちゆうしじと極木たろぎを組合せた骨組をつくって、茅かやの屋根を葺いた竪穴式住居たてあなである。

この住居内に暖房用の炉ろが普及するようになるのは前期になってからであり、中期になると、床面ゆかめんに石を敷きつめた住居もみられるようになる。床の形は、はじめは方形や長方形のものが多く、やがて楕円形だえんや円形のものもつくられている。住居の規模も、地域によって一概に規定するわけにはいかないが、早期の七―八名用から、晩期の四―五名用の単位に変っていくのが多い。一般論として竪穴住居の規模が縮少していくことは、共同体の構成員の分化と集落の規模の拡大を示しているとも考えられている。東日本にとくに顕著にみられる縄文遺跡の集落は、水の便に恵まれた台地の縁辺えんぺんに立地することが多い。また、後期以降には低地へ進出してくる人

達もあつた。

縄文時代の集落のまわりには馬蹄形状を代表とする貝塚が形成されている場合が多い。貝塚は貝がらを主とする食物残滓の堆積で生活用具も含まれ、いわば当代人の「ハキダメ」といつてよい。旧住居址を貝塚にする場合もある。したがってこれを調査すると彼等が日常使用した、あらゆる石器・骨角器・土器・装飾品・食糧などが見出され、その生活をさぐることができる。しかし、貝塚という名の示すとおり、貝塚は主として魚貝類を主食とした、いわば海や川の資源を食糧とした人たちののこした遺跡である。したがって、反面では獲物を追って、つぎつぎと放浪的な生活をくり返し、移動をくり返していた「山の民」ともいふべき狩猟民も存在したはずである。じつは、理屈の上からは考えられる狩猟民については、かれらが遺構をのこす機会が少なかつたために不明の点が多く、西日本の縄文人は、あるいはそれに該当するのではないかと考えられるぐらいに、西日本には貝塚遺跡が少ないのである。

縄文文化期の標識とされ、この期の呼称ともなつた縄文武士器は、一般的には黒褐色で厚手であり、手造りで、幾何学的文様をもち、芸術的に高く評価されるもので、各期によつてその器形・文様に特色がみられ、生活文化の推移をうかがわせる。

早期の土器は深鉢形尖底土器が主で、これは焚き火の側の中に底をつきたてて使用したための器形とされている。同じ早期の中でも、「古」は隆線文や捺糸文の文様を、「中」は押型文の文様を、「新」は沈線や貝殻文や条痕文を付すというように一寸した文様の变化がみとめられる。

これが前期に入ると、屋内生活が普及したらしく、それに適した円筒形平底土器が出現する。土器の文様も、条文・捺糸圧痕文・櫛目文・竹管文・爪形文などと多様化してくる。

中期になると、土器は厚手で大型になり、甕などもつくられ、口縁部その他の部分に装飾がつけられ、把手や耳もつけられて、その上に、隆起文や渦巻文や爪形文や刻線文で文様をえがいて飾りたてるようになる。

後期には食生活に一寸した進歩がみられたのか、注口土器や片口土器や坏形土器のほか壺形土器もみられ、一般に薄手になって、文様も磨消縄文を代表とするようになる。

晩期になると、土器の様式・形式は、東北の亀ヶ岡式土器を代表とするように、いつそう分化複雑化し、皿や香炉型土器や鉢形土器がみられ、雲形文や羊歯状文で飾られたものから無文の土器まで出現するようになる。

石器には打製のものと磨製のものがあるが、打製のものが比較的多い。石材も黒耀石・チャート・サヌカイト・安山岩など種類は豊富である。採集具には石斧・石槍・石鏃・石錘などがあり、調理具には石ヒ・石皿・石棒・石臼などがある。そのほかに、石器加工のための砥石や石錐なども発見されている。とくに打製石斧は万能石器として竅穴住居を掘ったりするときにも使われたと考えられている。

石器と同じ利器として使われた道具に骨角器があり、釣針や針や銚や骨鏃も検出されている。木器類は比較的遺存例が少ないが、弓矢や木皿や木鉢はよく検出されている。

食糧となつたらしい堅果類には、クリ・ドングリ・シイなどがある。おそらく石皿ですりつぶして食糧にしたらしく、千葉県加曾利貝塚ではパン状になつた澱粉のかたまりが発見されている。貝類では、ハマグリ・アサリ

・アカニシ・シジミ・カワニナなどが多く、魚類では、クロダイ・スズキ・ボラ・フグ・コイ・ウグイ・ウナギなどが発見されている。海と川と湖沼の産物が食糧となっている。食用にされた動物には、イノシシとシカが多い。しかし手当り次第に濫獲したわけではなく、貝塚の骨からみると雌獣や幼獣の骨が少ないことが指摘されている。

毛皮や植物をあんだ衣類を身につけ、骨や貝や土や硬玉こうぎよくその他の石でつくった玉や、耳飾りや腕輪を飾り、木製の櫛くしを頭に飾ったのが縄文人の盛装であろう。

しかし、石材の「黒耀石」が長野県の和田峠や熊本県の阿蘇山から全国に分布していたり、新潟県の姫川産ひめがわの「硬玉」が全国に分布していたりする事実は、縄文時代に全国的な規模にわたる交易ルートこういさきが存在したことを示すものでもある。彼等の社会は共同生活の社会であり、集落内で、とくに大きな家、とくに立派な品物をもった家がないところからも、日本史上で、唯一の「貧富の差」も「身分の差」もない社会であったと推測されている。

縄文人の信仰とか宗教といったものについては具体的には分らない。しかし、土偶どわくや土面どめんや土版どばんをはじめ、環状列石じょうれつせきの遺構（秋田県の大湯町では径四八メートルと径四五メートルの二群の列石がある）まで残しているのも、何等かの信仰や宗教があつたことはひとめられる。それに、抜歯ばっしや研歯けんし（近辺では大阪府国府遺跡出土人骨に例がみられる）の風習がみられることは、何等かの禁忌きんぎ（タブー）や呪術じゆじゆつ的信仰によるものと推測されている。

墓制には屈葬くつそうや抱石葬ほうせきそうがみられる。死者の手足を折り曲げて、「つた」や「つる」でくくってしまい、その上に石を抱かせたり、顔に土器をかぶせたりして、葬る例が多い。したがって、死者が再び地上に現れないよう、

死霊を忌み嫌い恐れられた痕跡をみることはできるが、ていねいに葬る風習はまだ存在していないことが分るのである（近辺では大阪府国府や兵庫県高砂市日笠山にその例がみられる）。

このように数千年以上にわたる長い期間であったにもかかわらず、土器の形式面での変化はあったにしても、社会生活の進展にはみるべきものがないのが縄文時代の特色なのである。大陸の諸国と異なり、四面海に囲まれた自然の地形の上に、豊富な食糧資源にも恵まれていたため、大陸のように文化の発展と社会の進展をうながす必要がなかったのである。縄文文化時代の停滞性の原因は、この点にあると考えられている。

芦屋市からは、この縄文文化の早期にはじまる遺跡が発見されている。

朝日ヶ丘町の縄文遺跡

昭和三十九年二月、芦屋市

朝日ヶ丘町あさひおかの芦屋市北部土地区画整理事業第四工区第六四号線上、街路二号水路築造工事現場で遺跡が発見された。すなわち道路工事によって発見された遺跡である。

遺跡地は標高五〇メートルの六甲山塊が南方沖積平野ちゅうせきへいに傾斜して接続する山麓線突端部に当っており、区画路線の東西八三号線と南北六四号線の交わる地域から以南、六四号線上で四〇メートル平方の地域に限って遺物



図42 朝日ヶ丘縄文遺跡位置図

(×印 朝日ヶ丘遺跡 ○印 破壊された古墳 ●印 現存する古墳)

の散布がみとめられた。

調査は遺物の散布する六四号線上の限定地区を路線面に限って緊急調査をした。遺物散布地は南北三〇メートルの地域に限定されており、この地域外では破片すら発見できなかった。

調査地域をA・B・C・Dブロックに分けて土層と遺構の細密調査を行ったが、地山面は南方に緩傾斜しており、堆積土にかなりの差違がみとめられた。北方であるB地区では、表土下一・五メートルに遺物包含層と床面があり、その下は地山に連っているが、南方のD地区では、表土下二メートルで遺物包含層と床面になり、その下の地山に連っている。このように地山の傾斜によって包含層の深さが異なっていたが、遺物の層位は明確に把握することができた。

B地区では表土（耕土）・粘土層・砂質土・灰褐色粘土層（栗石多し）・褐色粘土層（須恵器・土師器包含・中世の耕土）・砂質土層・鉄分農耕土層（暑さ約一・五メートル）・遺物包含層（厚さ三〇センチ）・地山（人工的加工痕をのこした堅い床面をもつ砂質自然層）となっていた。

D地区では二メートルの深さで地山に達するが、表土（耕土）・茶褐色土層・灰色土層・灰白色粘土層・茶褐色土層・褐色砂質土（遺物包含層）・灰色砂質土（人工的ピット（小孔）の乱立する床面を構成・地山）となっている。このように堆積土層には変化があるが、A・B・C・D地区とも地山直上部に遺物包含層があり、打製石鏃・縄文前期土器を多量に包含する縄文前期の単純遺跡と認定された。

B地区の地山床面には三個体分の鉢形土器群が遺存し、小ピット群とともに生活址の一部と推定された。

包含層および地山面から検出された遺物はリング箱約三杯分であり、土器は条痕文・爪形文・縄文・刺突文の土器が多く、石器は打製石鏃が百数十本で、このほかに石匕・投弾・石斧・敲石・砥石・石槍などもあり、石材はサヌカイト・チャート・砂岩・安山岩・黒耀石・水晶・石英などであった。

調査面積からすれば遺物の出土量は比較的多く、なかでも石鏃と爪形文土器の量が多い。

《石器》

イ、石鏃——石鏃は破片を含めて百数十本出土しているが、材質はサヌカイト・チャート・黒耀石・安山岩などで、サヌカイトが大半を占めている。

石鏃の形式は大別すると七種類になる。(図43)

(1)は平基形式で円基のものもあるが比較的整形な打製である。これも細別すると三種に分れ、(1A)は整った三角形で稜線をもった安山岩質で重さは○・四五—○・九五グラムのもの(1B)は円基に近い基部をもちチャート製を含むもの、(1C)は刃部も円くなった重さ一・九—二・六グラムの柳葉形形式のものである。

(2)は凹基形式であるが、基部を扁平に近い状況に大きく削った形式のものである。これも二種類に細別でき、(2A)は安山岩質で基部を扁平に剥いだもの、(2B)は基部を小刻みに打ちかいたものである。

(3)は比較的形の整ったものが多く、凹基形式で、基部を小さく円形に削りこんだものである。これも三種に細別でき、(3A)はうすく扁平な形式のもの、(3B)は肉厚で先端の鋭いもの、(3C)は肉厚で整形

なものである。

(4)は比較的鋭利な細工を施こし整形されたもので、凹基形式であるが、基底部は鋭角になっている。これも五種類に細別でき、(4A)は比較的肉薄であり、(4B)は刃部があまり鋭くなく円やかな大形であり、(4C)は鋭い刃をもち精巧な打ち欠きで比較的細長く、(4D)は正三角形に近い辺を有し、(4E)は肉厚で不整形なものが多い。

(5)は比較的小形のものが多く、凹基形式で、基底部が大きく割かれている。これも五種類に細別される。(5A)はチャート製を含む鋭利な刃をもつもので鋏形の形状を呈しており、(5B)は小形のもので砂岩質のもが多く、(5C)は細く鋭い尾部を形成している。(5D)は鋏形に近い形状の小形のものであり、(5E)は肉厚のものである。

(6)は鋭い三角形を呈し、凹基形式で、基底部は釣鐘状の割りこみになっている。この形式も四種に細別されるが、フリント・チャート・黒耀石製のものが多い。(6A)は三方に突起を出したような形状を呈するもの、(6B)は正三角形に近い二辺をもつもので刃部は内反する傾向をもち、(6C)は刃部は内反する傾向をもつが尾部幅が比較的広く、(6D)は肉厚で不整形なものである。

(7)は凸基無茎式のものである。これも三種に細別でき、(7A)は安山岩質で細長く片面のみ打かき加工を施している。(7B)はやや卵形になるが両面加工を施こし茎部の一部に切り込みを残しているもの、(7C)は柳葉形と称する形式の肉厚のものである。

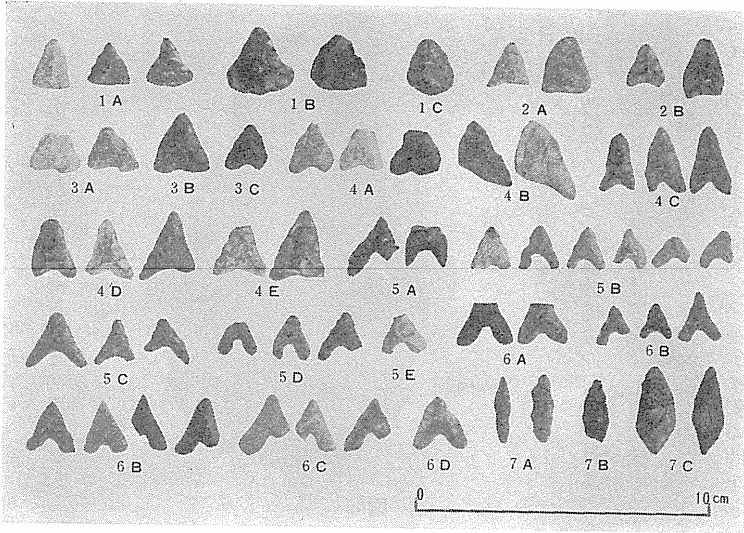


図43 朝日ヶ丘縄文遺跡出土石鏃の形式分類

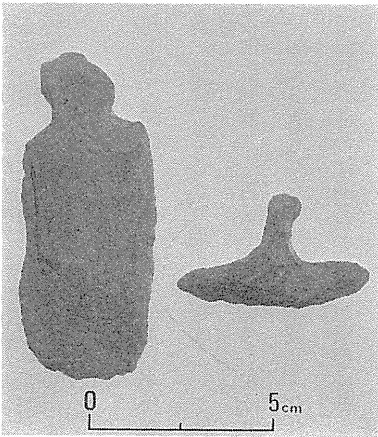


図44 石ヒの各種

このように石鏃は、その形式から七形式二五種類に分類されるが、早期の形式を伝えるものがかかりみられる。また前期爪形文土器には石鏃の伴出が多いことが知られているが、当遺跡もその例外ではない。石鏃の形式からみれば、近辺では京都市の北白川下層一式に先行するものである。

□、石ヒせきひ(図44)——石ヒは柄付横長の小形のもの・

柄付縦長の大型のもの・三角形形式のもの・卵形片面加工のものなど各種のものが検出されている。柄付縦長のものは生活址の床面に密着して検出されたものであり、同形式のものは近辺では箕面市から出土している。材質はサヌカイトが主である。

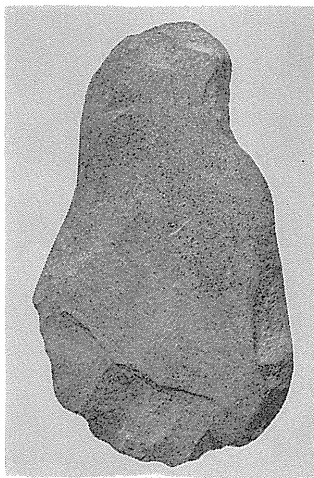


図45 石 斧

八、石斧——(図45) 安山岩製の小形の半磨製石斧が検出されている。粗製であるが、使用痕がよくのこされている。

二、その他の石器——打製石斧状のもの・大形石匕らしきものなど、加工痕をもったものや、未製品・剥片などが多量に出土しており、さらに砥石・敲石・磨製投弾・石槍片なども出土している。石材は細粒の花崗岩(半花崗岩)・水晶・石英・紅簾片岩・流紋岩(石英粗面岩)・チャートなどであ

り、チャートが最も多い。

《土 器》(図46・47)

完形品はなく、三个体分の復原可能片はあるが、これは条痕文をもった鉢形土器である。他は断片的なものばかりであるが、出土量が多い。土器文様では爪形文各種が最も多く、ついで条痕各種・縄文・刺突文・少數ながら押型文を代表とする早期的なものがみうけられる。縄文前期最古の形式と認定される土器のみである。

イ、刺突文——全面的に一センチ程の間をおいて、やや斜めに刺突文を付したものと、直角に近い位置から並

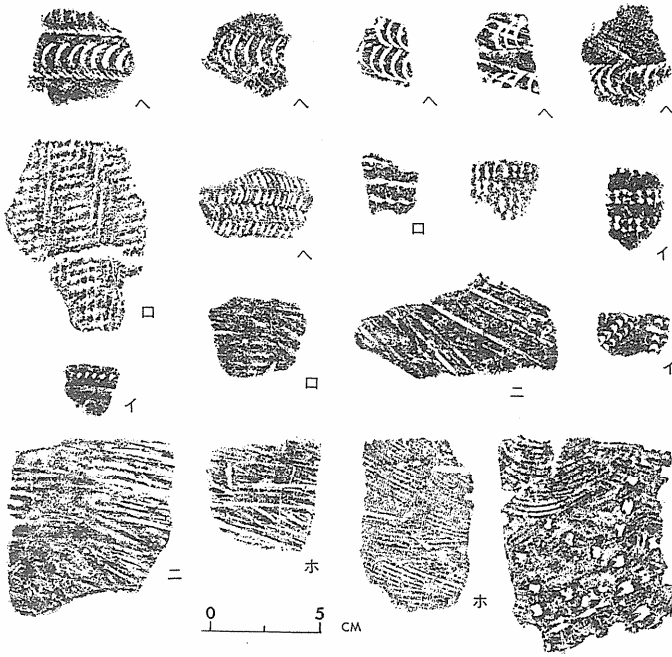


図46 朝日ヶ丘遺跡出土土器拓影

列して刺突文を施こしたものとがある。器形は口縁部を外反する深鉢形土器で口縁外面に施文している。

ク、縄文——やわらかくもろい質の土器に非常にうすく縄文を付したものである。底部は平底で大きいものと、上げ底状のものがある。

ハ、無文——内側には条痕のみとめられるものもあるが、ち密な精土で焼かれたものである。

ニ、粗い条痕文——内側にも条痕を付した比較的深い印刻をのこしたものと条痕のわずかな痕跡をのこす程度のものがある。

ホ、細い条痕文——細手の条痕を付したもので、土器も比較的薄手であり、条痕

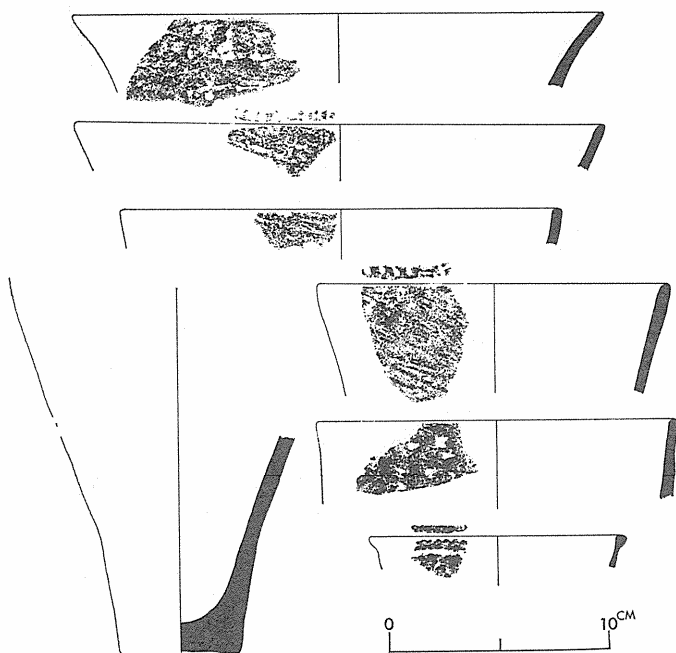


図47 朝日ヶ丘遺跡出土土器実測図

を強くとどめるものと、印刻の浅いものがある。

へ、爪形文——爪形文は一・五センチ幅で大きく並列されたものから一・二センチ幅で小刻みに木葉状に美しく並列されたものや、〇・四センチ幅で並列されたものなど各種で、文様としては最も多いものである。これらの爪形文は無文地に爪形・条痕地に爪形を施したものに分かれる。そのほか小刻みの爪形文であるが、ハイ貝などを用いた貝殻文を施したものの、半截竹管を用いた刺突連続文をもつものなどがある。

ト、底部——底部中央部がくり上ったものと平底のものがみうけられる。何れも鉢形土器と認定される。

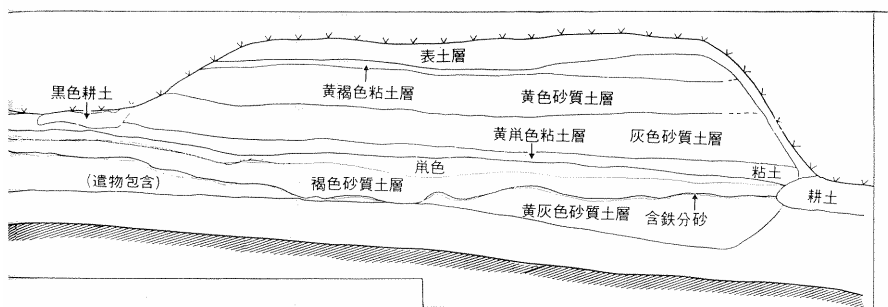
チ、口縁部——口縁内部内側に刻み目刺突文をもったもの、口辺部に並列する刺突文をもったもの、口辺部に貝殻施文による爪形文をもつもの、外反する口縁部をもつもの、口縁部外側に刻み目突帯をもつもの、口辺部に条痕文をもつものなどがみうけられる。

《土層と遺構》

遺物包含地域の土層は地区によつて少々差はあるが、灰黒色表土層・黄褐色粘土層・黄色砂層・灰白砂質土層・ネズミ色粘土質土層・ネズミ色土層・褐色砂質土層・茶色鉄含有砂質層・黄色砂質層（遺物包含層）という順になっている。包含層までは表土下一・八メートルが平均で、包含層の厚さも約五〇センチが普通である。石器類は包含層底部に比較的多く発見された。この包含層の下で、一部に人工的加工痕をもつピット群と床面が検出され、住居址遺構と認定された。床面は灰褐色砂質土層の上面に築かれ、この層は約四〇センチの厚さで、赤褐色粘土質土層に続いている。もちろん南に傾斜する丘陵突端部であるため、土層の厚さは各所でまちまちである。

床面は大体平坦に整地され、調査地域内でも一部で約三〇センチの切断面がみられ、約三〇センチの高さの平坦面を生活の場とし、周辺とは一段の高さを保っていたことが認定された。

これは地上上に堆積された灰褐色砂質土が西方に傾斜していたために生じたものかも知れないが、一応地山より一段高いベツト上に約三〇センチの深さの堅穴を掘り、床面を構成していたことが推定された。住居址と認定するには一部を露出させただけであるので、断定は今後にまちまちだが、おそらく隅丸方形的な遺構の一部と推定



遺 跡 土 層 実 測 図

される。

住居址様遺構内には深さ三〇センチ程度のピットも若干みられた。遺物は遺構の内外にわたって散布していた。なお、表土層中には鎌倉時代の遺物が若干散布しており、皇宋元宝や土製面子（花模様）などが採取されている。

周辺遺跡との関係

朝日ヶ丘縄文遺跡は、少量の早期遺物とともに縄文前期の遺物を多量に出土した。この縄文前期遺物は、近畿地方では最古のものとされていた北白川下層式よりも古いものである。それでは、芦屋市周辺の縄文遺跡はどのような状況であろうか。

縄文早期の遺跡は、現在では枚方市穂谷・北河内郡神宮寺にみられる程度で、大阪湾沿岸では、朝日ヶ丘遺跡以外には発見されていない。

前期になると、富田林市錦織・藤井寺市国府・八尾市恩智・京都市北白川小倉町・同一乗寺・箕面市瀬川・神戸市大歳山・高砂市日笠山などがあり、箕面市瀬川と神戸市大歳山がもっとも接近した遺跡である。

ところが、この後に問題がある。朝日ヶ丘遺跡は早期・前期の遺跡であるが、芦屋市内からは、これ以後の中期・後期・晩期の遺跡が発見さ

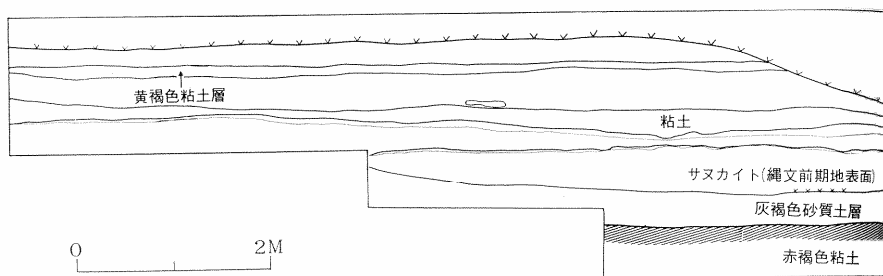


図48 朝日ヶ丘縄文

れていないし、土器を主とする遺物の発見もない。朝日ヶ丘の人達は何処の地へ去っていったのであろうか。

縄文中期の遺跡を追求しても、東は大津市滋賀里北、西は姫路市辻井にしか中期の遺跡はないのである。

後期になると、近辺には箕面市瀬川・神戸市元住吉山・同名倉町などの遺跡が検出されている。

また、晩期になると沖積平野にまで縄文人の進出がみられ、豊中市上野・池田市五月山・伊丹市小坂田・西宮市広田・尼崎市田能・同東園田・三田市内神・神戸市篠原町などに遺跡・遺物が発見されている。

これら中期以後の遺跡と朝日ヶ丘の人達との間にはどのような関係があるのだろうか。朝日ヶ丘自体、地表下二メートルという深さで発見された遺跡であることを考えると、かなり深い地中に縄文遺跡が埋没しているため、よほど偶然の機会でもないと遺跡の検出が困難であるという事情も、朝日ヶ丘縄文人の行方を追及することを困難にしている理由の一つとして考えられている。

このことに関連して、西宮市上ヶ原からは石鏃が、五ヶ山や越水から

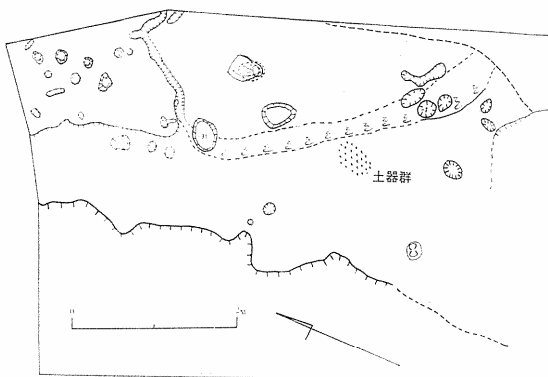


図49 朝日ヶ丘縄文遺跡遺構実測図



図50 朝日ヶ丘遺跡遺構

は石ヒが、^{めたて}愛宕山からは石斧が発見されている。宝塚市宝塚町からは石ヒが、神戸市神岡山からは環状石斧が、伊丹市中村からは石斧が発見されている。芦屋市内の笠ヶ塚や出芦屋からも石鏃や石ヒの発見を伝えている。何れも縄文土器を伴わない単独発見であるが、縄文時代の遺物が周辺各地から発見されているということは、包含

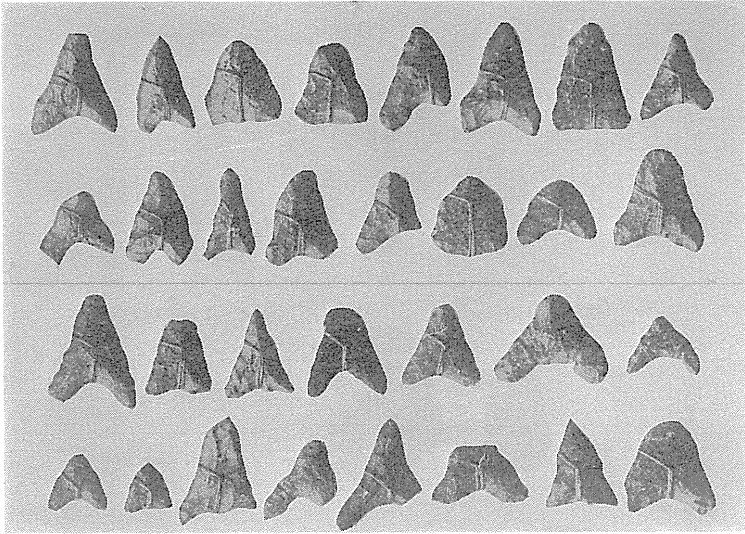


図51 紅野芳雄採集石器（「考古小録」所収写真）

層が深く、遺構が発見されにくいものであることを示している。

したがって、深い地中ではあろうが、まだまだ芦屋市内および周辺地域からは、縄文遺跡が発見される可能性が残されていると考えられている。

ともあれ、朝日ヶ丘縄文遺跡は、近畿地方の標的的遺跡として考古学上重視されている遺跡なのである。

その他の縄文時代の遺物

遺跡は確認できないが、

市域内で発見採集された石器のうちに縄文時代のものがあることが注意される。遺物は現存しないが「考古小録」によって知られる紅野芳雄氏の採集品には岩ヶ平^{いわひら}出土の石器類が多数を占めており、写真により検討してみると、平基形式・凹基形式の打製石鏃八二本のほか、小形半磨製石斧未製品らしきものなどがある。とくに岩ヶ平の集落の西方二〇〇―三〇〇メートルの地域から集中的に採集されたことが知られる。石鏃はチャート・サヌカイ

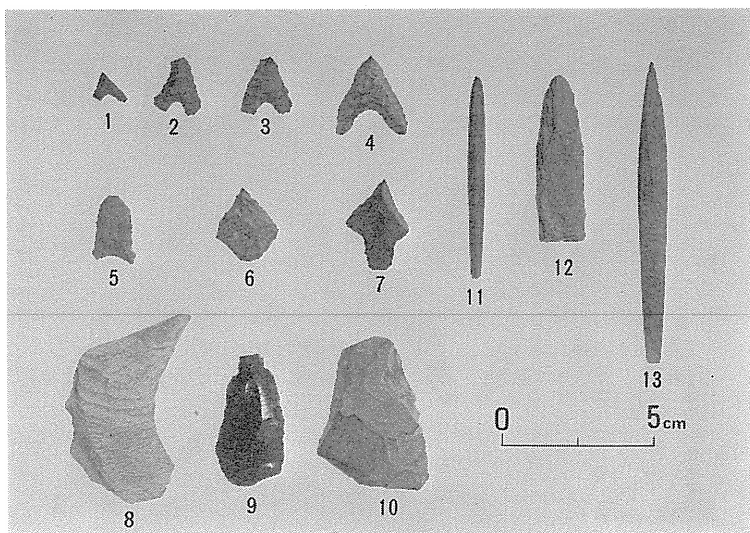


図52 吉岡 昭採集石器

1. 岩ヶ平 2.8.11.12.13. 笠ヶ塚南 3.4. 笠ヶ塚東 5. 芦屋神社北
6. 城山山麓 7.9.10 笠ヶ塚

・黒耀石・安山岩製であり、黒耀石製の石錐も採集されている。形式からみて、縄文時代前期と認定されるものが主である。

岩園町の朝比奈貞雄氏が採集された石鏃は、出土地が明瞭で現存している。凹基形式のものは松呂山・二本松・岩宮・長畔から、平基形式のものは藤左衛門・長畔・西谷・深谷地区から採集されたもので、何れも岩ヶ平地域である。断片的な発見ではあるが、これらの遺物からみて、岩ヶ平地区にも縄文遺跡の発見される可能性が推測される。

親王塚町の吉岡昭氏の採集品の中にも、岩ヶ平と岩ヶ平小学校北で採集された黒耀石製の凹基式石鏃がみられる。

さらに、吉岡氏採集品には、笠ヶ塚南からは石槍と黒耀石製の凹基式石鏃が、笠ヶ塚からは黒耀石製の柄付縦長石匕（小形）がみられる。ただ、岩ヶ平

・笠ヶ塚ともに石器のみの発見であり、土器が一片も採集されていないのが特色である。

第三節 弥生式文化期の芦屋

弥生式文化の時代

数千年以上の長い期間にわたって、狩猟、漁撈を中心とした「採集経済」の生活をおくっていた縄文文化の時代にも終末期がおとずれることになった。紀元前二〇〇年の頃にはじまる弥生式文化（弥生文化ともよぶ。以下この名称をもちいる。）の波及である。弥生文化は中国・朝鮮半島よりする高度の文化であり、停滞的な文化の世界を固持していた縄文人を驚かすに足る農耕社会の文化であった。

この弥生文化の時期は、紀元前二世紀の頃から紀元後三世紀の頃にかけての期間である。考古学では、この時代の土器の様式の変化を基準として、弥生時代を、前期（古・中・新）・中期（古・新）・後期の三期に大別している。

近畿地方では、前期の土器を第一様式（古・中・新）、中期の土器を第二様式・第三様式（古・新）・第四様式、後期の土器を第五様式と大別しているが、現在では後期の土器も、さらに細別分類することが可能となっている。

弥生文化の第一の特色は水稻農耕を生活の基盤としていることである。「江南」の地にはやくひらけた稲作の技術が、漢帝国膨張の余波をうけて波及してきたとする説が有力である。

第二の特色は、青銅器・鉄器という金属器が伝来されたことである。いままで石器しか知らなかった縄文人の世界に革命的な社会変革がはじまるわけである。

大陸では既に殷^{じん}の時代に「青銅器」の盛期をむかえ、周^{しゅう}の時代も、紀元前六―五世紀には「鉄器」が使用されている。四面海に囲まれた日本の地理的条件が、このような大陸文明の影響をうけることなく、大陸の政変に左右されることもなく、停滞的な原始社会を維持させていたのである。したがって、わが国では「石器」の段階から、いきなり「鉄器」の段階へ進展するという発展を見たのである。

しかし、金属器が全人口に行き渡るほど、多量に移入されたわけではない。大部分の人達は依然として石器を利器としていたのが実情であった。この点で、日本の弥生文化の時代は「金石併用期」とも呼ばれている。さらに、大陸からは織物の技術やガラス製品も伝えられている。

数千年の間、石器を利器とし、採集経済をおこなっていた縄文人が、弥生文化の波及によって、いきなり、農耕を営む社会生活に転化できたか、という点については多少の問題点はあるが、全国的に徐々に水稻農耕という定着生活の様式に移行していったようである。日本列島における人種の交替といったようなことはなかったと考えられている。

この新しい生活文化は弥生式土器とよばれる新しい様式の土器の製作使用によって特色づけられる。この土器は一般的に赤褐色の薄手土器で、回転盤の使用もみられ、縄文土器にくらべると文様はいちじるしく少なく簡素である。炊煮用^{しやうい}としての甕^か、貯蔵用としての壺^{つぼ}など、用途に応じた器形がみられるが、米を蒸^むした甑^{こしき}や、食物を

盛る高坏たかづきなど、縄文時代にみられなかった器形の土器も発生する。前期の土器は篋描くわがくき文を主とするが、中期の土器は見事な櫛目文くしめもんを描き、後期には無文むぶんが多くなる傾向をもっている。

石器には打製たせいと磨製ませいがあつて、縄文時代の石器の種類と大差ないが、縄文時代にはみられなかった石鎌いしがまとか石庖丁いぼうちやうという石器が出現する。また石鏃せきよくや石槍せきやうに大型化がみられるが、これは鋭利な金属器に対抗するためのものであつたと考えられている。鉄剣型石剣や銅剣型石剣に、しばし使用痕がみられるのも、これらは金属製の剣を模した実用の武器であつたからである。

鉄利器には鉄鏃てつよく・鉄鋏てつせん・鉄斧てつおの・鉄刀てつたう・ヤリガンナ・キサゲなどが見られ、青銅利器には銅劍けん・銅鉾ぼこ・銅戈か・銅鏃よくなどがみられ、前代の骨鏃ほよくもなお使用されている。

弥生文化の生活は低湿地における水稻農耕であるため、木器の遺存例は比較的多く、木鋏もせん・木鋤もき・堅杵たてぎね・木臼うす・椀わん・杓子しやくし・田下駄たげた・砧きねた・弓矢ゆみやをはじめ、櫛くしやカンザシまで出土している。

麻の一種であるカラムシの布を身にまとつたらしく、土・石・角製の紡錘車ぼうすいぐるまも出土している。また、勾玉まがたま・管玉くだ・小玉こたまなどが硬玉こうぎよく・碧玉へきぎよく・滑石かつせき・ガラスなどでつくられ、貝製・金具製の釧くしろなども装飾品として用いられた。西日本にとくに密集している弥生遺跡からは、大きな住居、立派な遺物や装飾品をのこす家、立派な墓地などがある。一般的に住居は堅穴式住居たてあなが多いが、平地式住居もあり、「ネズミ返し」の装置をほどこした高床式倉庫も発見されている。

硬玉や碧玉や青銅器や朱の分布をみても、全国的な規模で交易がなされていたことを推測することができる。墓制では、甕棺・壺棺・箱式棺・支石墓・木棺墓・方形周溝墓など各種の形式がみられ、縄文時代の屈葬や抜歯の風習にかわって伸展葬が行われるようになる。これは縄文時代に死者を忌み嫌い、恐れた風習から、死者をていねいに葬る風習への変化を示している。

青銅器の銅鏡や銅鐸なども宗教的・社会的・政治的意味をもった宝器と考えられ、農耕社会の出現にともなう呪術的司祭者の出現や農耕儀礼の発生も充分に考えられる社会が、弥生文化の社会なのである。

周辺の弥生前期遺跡

日本最古の弥生文化は北九州の遠賀川流域に開花したが、ほとんど同時に大阪湾沿岸にも弥生文化が波及している。これは多分、瀬戸内海を直航して伝来した海上からの文化と推定されている。そして西方では加古川流域・東方では庄下川流域・猪名川流域・淀川流域・大和川流域などの河道周辺部に前期の遺跡をみることができる。近畿の弥生文化は、大阪湾沿岸から各河道流域にそって上流へ波及したことを示している。

《上ノ島遺跡》

芦屋市近辺で最も著名な弥生前期遺跡は、尼崎市の上ノ島遺跡である。昭和三十四年から三十七年にかけて発掘調査をおこなった結果、畿内第一様式の中・新の土器を多量に出土し、弥生前期の単純遺跡であることが明らかにされ、大阪湾沿岸の弥生文化開花の鍵をにぎる遺跡として注目されている。

地域によって多少の相違はあるが、表土下一・五メートルで遺物包含層に達し、この包含層は厚いところでは

一・五メートルを測り、包含層の下底部からは住居址も検出されている。上ノ島検出の弥生前期住居址は、一辺約四・三メートルの隅丸方形の床面のまわりに高さ約四五センチの粘土を盛上げた壁をめぐらせた竪穴式住居の形式をとるもので、入口は幅一メートルで南西隅に設けられていた。床の中央に一本の中心柱孔があり、住居址内からは、種木材・棟木・桁・梁・木舞・屋根の杉皮などが発見されて、入母屋式に近い形式の屋根をもった住居であったらしい。現在までに五か所の住居址を部分的に検出しているが、部分調査の域を出ていないので、集落の規模は明らかではない。

建築用材とともに木器も多量に発見され、木鋏類各種・弓矢類・木椀・木鉢・木杓子のほか機織器具も出土している。

植物遺物も多く、イネ・フクベ・マクワウリ・クリ・ミクリ・モモ・ヤマモモ・サンショウ・オニバス・ヒメビン・オニヒシ・ゴキヅル・ヒルムシロ・コウホネ・エビズル・ムクロジュ・ジュズダマ・マルバオモダカ・カヤツリグサ・ウキヤガラ・カンガレイ・クログアイ・イヌガヤ・カシ・マツ・シダ類・スギのほかキク科の一種や珪化木や木炭も出土している。食糧となった動物質のものには、猪やハマグリ・アサリ・タニシなどがある。

石器は石庖丁・石鏃・石槍・砥石各種・敲石・石斧・扁平片刃石斧・石錐・軽石・石ヒ・戈状石器などが出土している。

土器は壺形・甕形・高坏形・鉢形・蓋形土器と甌に大別されるが、壺形土器には黒漆を塗布して木葉文を画いたもの、刺突文、平行沈線文・点列文・鋸齒文・刷子目文・突帯文各種・山形連続文・弧状文・竹管点列文など

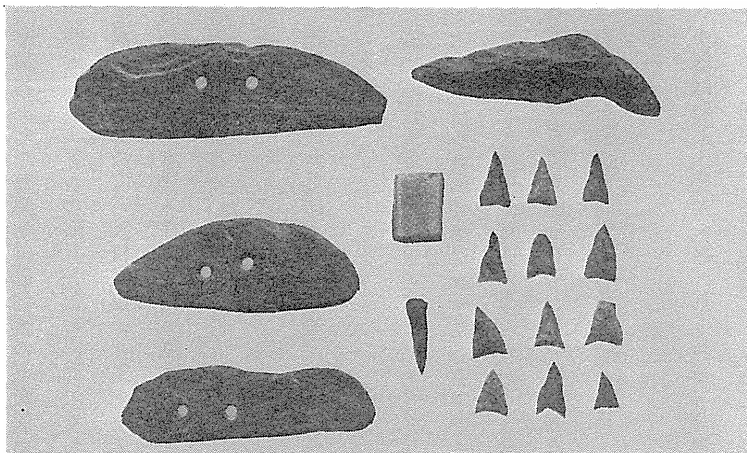


図53 弥生前期の石器(上ノ島遺跡出土) 左 石庖丁 右上 石戈状
 石器 中上 扁平片刃石斧 中下 石錐 右下 石鏃

の文様をもったものが多く、突帯文には^{おき}圧えた時の布目の痕跡を残すものもあり、土器底部に^{もみ}粗痕をのこすものも多い。

甕形土器は口縁部に刻み目または点列をもち、口辺部に一八条の篋^{くわ}画き平行沈線文をもつものと、一条の刻み目突帯をもつもの、胴部に山形連続文をもつもの、口縁部を山形状にきざみ・口辺部に一条の突帯をもつものなどが代表で、いずれも煮炊器として使われたことを示して^{すす}煤が厚く付着している。とくに、山形状の口縁部をもった土器は、縄文土器の系列に入る土器形式であり、突帯をもった土器とともに、弥生前期第一様式の「中」の段階に入って縄文土器の影響をうけた土器が発生することを示している。

高坏形土器と甑^{しき}は極めて少ない。蓋^{ふた}形土器は主として甕の蓋が多い。上ノ島遺跡では包含層を堆積の順序によって四層に分類することができたため、近畿地方の弥生前期第一様式の土器形式を細分類することが可能となった。

《田能遺跡の溝》

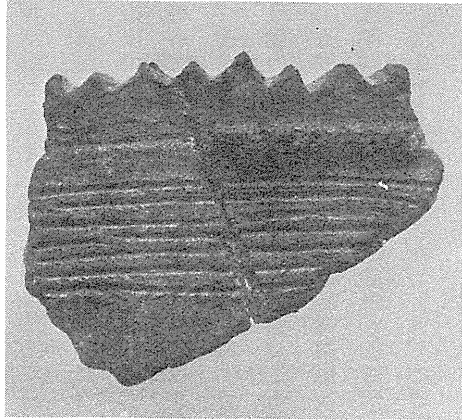


図54 山形状口縁部をもった土器
(上ノ島遺跡出土)

このように周辺の弥生文化は、尼崎市の庄下川流域に最古のものを見ることができ、これについて同じく低湿地である猪名川流域の田能において、第一様式の「中」と「新」の時期の遺構を見ることが出来る。

田能の場合は、猪名川沿いの微高地に、河道にそって幅四メートル・深さ一メートル以上の大溝を堀りめぐらせて、生活の場を築いていたことが分っている。大土木工事をやった上で集落の場をつくっているのである。

このほか、摂津の地域では、栗山（尼崎市）・宮之前（池田市）・勝部（豊中市）・安満（高槻市）などが学術調査のおこなわれ

た著名な弥生前期の遺跡地である。

弥生中期の生活と文化

弥生前期に河道沿いの低湿地にはじまった水稻農耕は、水量には恵まれていたが、排水路などの土木工事をおこなったとはいえず、冠水・滞水・流出土砂などによる自然とのたたかいを避けることができず、生産性が低くて決して水田耕作に好適の条件をもつものではなかった。しかし、農耕という、みずから積極的に自然に働きかける労働の形態は、それまでの採集経済の時代とは異なった社会条件を産み出した。これは、採集生活の時代にく

らべて生活の安定があつたからとされている。

弥生時代に入つての農耕生産への脱皮すなわち採集経済から生産経済への転進ということは、縄文時代と比較すると飛躍的な発展であり、原始時代の社会・経済・宗教・文化などあらゆる面での画期的な変革であつたことを意味している。そして、弥生時代に確立された稲作を中心とした生産体制は、これ以後の、農業国としての日本の社会の展開方向をすら決定するという重要な意義をもつていたと考えられる。

家屋を例にとつてみても、弥生時代にはじまつた茅葺屋根の形式と構造は、現代の民家の屋根の構造と同じであつたと推考されている。

弥生前期においては、土器を例にとつてみると遠賀川系列に属する画一的な形式の土器が、北九州から伊勢湾沿岸の地域に及んでいる。しかし、中期の段階になると、地方的な特色を示す土器様式が各地に発生して、遠賀川系土器の影響下からはなれて、各地域を中心に定着した独自の文化が発生したことを示している。

近畿地方では、櫛目文土器と称する、櫛目で画いた美しい文様によつて代表される土器形式が発生する。それは畿内第二様式といわれる土器のころからである。

近畿では大阪湾沿岸を中心に華麗な「櫛目文土器」の発展がみられ、「銅鐸」という青銅器に代表される日本独特の芸術品と文化圏が形成されていくのが弥生中期の時代相である。この時代に入ると、北九州の原初的な弥生文化を、すでにしのいでしまった高度の文化段階に達していたと考えてよい。

墓制においても、弥生前期には、まだ屈葬や拔齒という縄文的風俗の影響下にあつたのが、弥生中期以降にな

ると、木棺墓・伸展葬^{しんげん}・拔歯のない社会を出現させている。北九州およびその周辺の弥生墓地は、集落と区別された別地区に高い密度で墓域が設けられている。これに対して大阪湾沿岸の地域では、集落内の一面に特定身分と推定される人達だけの共同墓地を設けている。弥生中期の墓棺の構造からは、明確に身分制社会の成立していたことを推測することができるのである。

共同労働による水稻栽培という社会形態から産み出された集団は、強力な指導者のもとに団結し、生活の相対的な不安に伴って人口の増大、すなわち労働力の増大をも実現させていく。もはや、「ムラ」という新しい形態の集落が生み出されていくのである。芦屋の弥生文化は、この中期の時代から遺跡・遺物をのこし、生活の場であったことを示している。

弥生中期の周辺遺跡と社会のうごき

このようなことを反映して、弥生中期には、芦屋市の近辺にも弥生中期の遺跡が増大してくるのである。芦屋市の会下山^{えげのやま}・城山^{じょうやま}をはじめ、西方では神戸市の保久良神社^{ほくら}・伯母野山^{おぼの}・荒神山^{こうじん}など、東方では西宮市の五ヶ山^ご・川西市の加茂^{かも}・尼崎市の田能^{たのう}・武庫荘^{むこのやしろ}・栗山^{くりやま}・伊丹市の小坂田^{こさかた}・豊中市の勝部^{かつべ}・池田市の宮之前^{みやのまえ}・吹田市の垂水^{たるみ}などが近辺の著名な遺跡である。

学術調査された遺跡を中心に、弥生中期の遺跡分布図をつくってみると、この時期には山頂式高地性遺跡・丘陵上の遺跡・低湿地の遺跡が共存していることに気がつく。丘陵上の遺跡と低湿地の遺跡は、生産農民としての共通の立地条件をもっていて、農耕の便宜によって選ばれたにすぎないものである。

ところが、芦屋市会下山^{えげのやま}遺跡を代表とする山頂式高地性遺跡が発見されることは、この時代の社会の動きを示

す重大な意義を感じしめるのである。山頂式高地性遺跡は、ほとんどの場合、防塞的ともみられる山頂上に集落を形成し、「非生産的な生活址」をのこしている。単なる山の民とか、避災の民の集落ではなく、この時期に、このような集落を必要とした社会的・政治的必然性を考える必要があるといわれている。

そして、このような疑問点の解決のために学術的発掘調査をおこなって、山頂式高地性遺跡の実体を明らかにしたのが、芦屋市の会下山遺跡であり、大阪湾沿岸の高地性遺跡の標式として、兵庫県史跡の第一号に指定されている。

『後漢書東夷伝』をみると、「桓・靈の間、倭国大いに乱れ、更相攻伐して歴年主なし」とある。後漢の桓帝（二一代、在位一四七—一六七年）と靈帝（二二代・在位一六八—一八九年）の頃に日本が大乱の時代に入つて、年を経ても統一的な君主がいまいこと記している。二世紀後半のことで、弥生中期以降の時期にある。

有力な指導者を中心に形成されていった小地域の政治的集団が、隣接集団と争い、整理・統合されていく時期が訪れたのではないか。農耕社会を成立させてのち、統合政権樹立の胎動がはじまり、弱肉強食の乱戦の時代にはいったのではないか、という見方がされている。

近畿地方の中期の石製武器には質量ともに注目されるものがある。近畿地方に特異な分布を示す、青銅器を模した有樋式磨製石剣・鉄剣を模した磨製石剣・銅鏃を模した磨製石鏃にみられるように、青銅利器・鉄利器の発達も中期に著るしいのである。

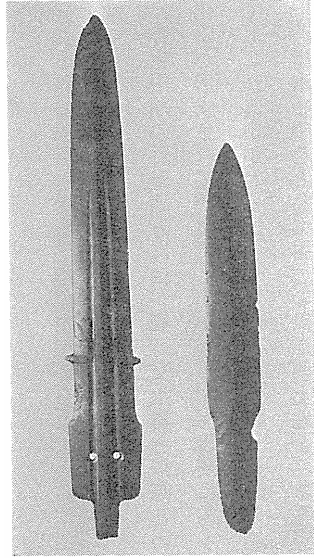


図55 有樋式石剣・鉄剣形石剣
(左 神戸市垂水 右 尼崎市長洲出土)

器が示す諸問題について周辺地域の出土事例を中心に考えて見よう。

《銅 鐔》

近畿の弥生文化を代表する青銅器は銅鐔どうてんである。そしてもともと多量に発見されているのが大阪湾沿岸の地域である。もちろん、芦屋市内からも出土している。しかし、銅鐔が鑄造された時期については、弥生前期説と中期説とがあつて、統一的な見解はまだできていないのが現状である。その用途についても、「振りならすもの」・「置きかざるもの」というように異説があり、終末期についても異論がある。しかし、この青銅器が、弥生時代を通じての支配階級の宝器であつたことには間違いはないと考えられている。

近畿地方では最も古い形式の銅鐔から、最も新しい形式のものまで出土しているが、その発見地域には若干の特色がみられる。古い形式のものは大阪湾沿岸の地域と大和の地域にみられ、これらと同範どうはんの銅鐔が周辺に散在

しかもこの時代、首長層のシンボルとされた銅鐔が大阪湾沿岸の何処かで大量に鑄造され、また田能はくどうでは白銅製の釧くしうや銅剣が鑄造されたことが知られている。弥生中期の大阪湾沿岸の遺跡と遺物は、「後漢書東夷伝」の記事とも無関係ではないとされている。

弥生時代の青銅器

弥生文化を特色づける青銅

しているので、大阪湾沿岸の何処かで铸造されていた可能性が強いとされている。

北九州を中心とする銅劍・銅鉞・銅戈という青銅器に比して、銅鐸には多量の銅と錫を必要とするし、日本独特の青銅製品でもあるので、この铸造のための技術者と原料を抱えた有力者が大阪湾沿岸の何処かに存在したと推定されているのである。青銅器は石器類と異なって、何処でも、誰にでも造れるものではないからである。

姫路市の名古山なこやまからは銅鐸の「铸型片」が出土しているが、銅鐸铸造の本処地ではなく、もつと大阪湾の東寄りの地域と考える人が多い。しかし、間もなく銅鐸の铸造地は別の地域に移っていく。三遠式と名付けられている形式の銅鐸は、この付近の铸造とはいえないものである。

弥生後期に入ると、この権威のシンボルとも考えられる銅鐸が地中に埋められることになる。発見される場所は、集落の中でもなく、宗教祭祀の場でもなく、偶然の機会にえらばれたと考えるほかない場所で、比較的浅い土中から発見される。単独で発見されるのもあれば、神戸市の桜ヶ丘や滋賀県の小篠原のように十余個が一緒に発見される場合もある。地中に埋められている理由についても、隠したとする説・必要時以外は埋めておいたとする説などがあつて定説はない。

弥生中期の近畿地方には、櫛目文土器と銅鐸という、当代の日本の文化を代表する程の文化財を標識とする文化圏が形成されていたにもかかわらず、後期に入ると、そのシンボルの銅鐸が姿を消し、さらに歴史時代に入ってもこれにかかわる伝承すら伝わらない。銅鐸の謎はまだ解決されていないのである。

芦屋市を中心として周辺の銅鐸出土地をみると、芦屋市では楠町堂だうのうえ之上から流水文銅鐸りゅうすいもんが一口出土している。

西方では、

神戸市灘区桜ヶ丘	一四口	神戸市東灘区渦森 <small>うずがもり</small>	一口
神戸市東灘区生駒	一口	神戸市東灘区森坂下町 <small>もり</small>	一口

があり、東方では

西宮市津門 <small>つと</small>	一口	伊丹市中村	一口
川西市栄根 <small>さかね</small>	一口	川西市満願寺	一口
箕面市如意谷	一口	豊中市岡町	二口
吹田市山田	一口	高槻市天神山	一口

があり、大体二―三キロ以内の間隔距離で発見されている。発見地の近辺には比較的規模の大きな弥生遺跡の存在が知られている。

《青銅利器》

この時代の青銅利器で、近辺から出土するものをみると、

神戸市灘区桜ヶ丘	銅戈 七	(銅鐸一四口と共存)
〃 東灘区保久良神社境内	銅戈 一	
三原郡西淡町・古津路 <small>こつろ</small>	銅劍一三	
三木市正法寺	銅劍 一	

東大阪市瓜生堂うりうじどう

銅利器片一

などがあげられ、ほかに銅鏃が周辺各地から発見されている。芦屋市会下山や大阪府の玉手山のように住居址内で発見された銅鏃と、田能のように包含層や散布地から発見されたものがある。なかでも芦屋市会下山から発見された「漢式三角鏃」は中国製の珍貴な例となっている。

《銅 鏡》

北九州の弥生墳墓からは鏡の発見例がみられる。近畿ではそのような例がみられない。わずかに朝鮮半島渡来の多鈕細文鏡たなつさいじんまやうが奈良県名柄なからと大阪府大県おおあがたから発見されているにすぎない。そのほかの鏡となると、弥生終末期の小形鏡が尼崎市下坂部しもさか（重圈素文鏡・径三・三センチ）と枚方市高塚山たかつかやま（重圈文鏡・径六・八センチ）で検出されているのと、加古川市西条さいじょうの弥生墳墓と兵庫県加古郡播磨町大中の住居址内で、内行花文鏡の破片が出土している例をみるだけである。

《銅 釧》

装飾品には腕輪くしわ（釧）がある。尼崎市の田能一七号棺からは、左腕に釧をはめたままの男性人骨が検出されている。この釧はタテ七・一センチ、ヨコ五・六センチの大きさで、ゴウホラ貝をタテ割りにして作った貝釧をそのまま白銅（銅分の多い青銅のことを考古学上では白銅製とよんでいる）におきかえた形のものである。素形すけいとなったゴウホラ貝製の貝釧は、神戸市熊野町の弥生中期の壺棺内から四〇個発見されている。

《銅劍鑄型》

青銅器に関連して、尼崎市の田能からは銅劍の鑄型が発見されている。砂岩製の破片であるが、劍の基端から茎にかけての部分が鮮明にのこされており、面は真黒く焼けている。この鑄型から復原される銅劍は、第二次仿製の第三類大形細身銅劍であり、兵庫県三原郡西淡町の古津路・大分県の浜・香川県の瓦谷出土の銅劍が同じ形式に属し近似する。この形式の銅劍の分布地域を調べてみると、瀬戸内沿岸に限られた特種な分布を示していることに気がつく。したがって、この時期には何等かの共通的文化圏が成立していたことが考えられている。そして、その時期が分っているのである。

この鑄型は砥石として再使用され、砥石としての用途も失って捨てられたもので、その時期は出土層位によって、畿内第三様式（古）の時代以前である。したがって、この形式の銅劍は第三様式（古）以前の時期に鑄造されたことは確実であり、銅劍の製作年代を推定する一基準にもなっているのである。

芦屋市出土の銅鐔

打出の親王寺には銅鐔が一口保管されている。寺伝では、元禄四年（一六九一）に阿保親王の八五〇回忌のため、親王陵墓の環湮を修理した際に発見されたものとされている。また、この環湮の修理中には、銅鐔以外に古鏡一〇枚と石製鈔が一緒に出土したと伝えられている。この所伝に何等かの事実相違があることが、既に旧版芦屋市史においても指摘されていたが、山口県文書館の毛利家文書の中にある記録によってその出土状況が判明することになった。

これは文政元年（一八一八）五月廿二日に、長州藩命をおびた村田清風が打出村をおとすれ、長州藩主毛利家の祖とされている阿保親王の陵墓について調査し、「阿保親王事蹟詮議」を復命している記録である。この記録

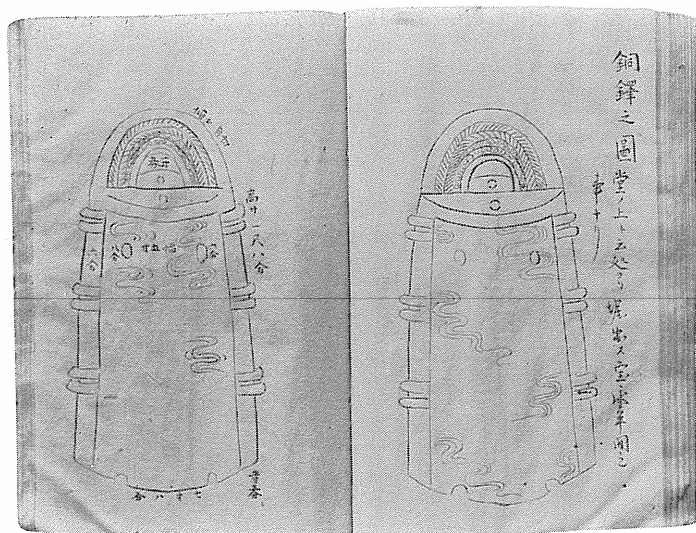


図56 銅鐸之図（「阿保親王事蹟詮議」所載）（山口県文書館所蔵毛利家文書）

の中に「兵庫阿保親王寺藏銅鐸之図」〔毛利家文庫記録目録（五の中・絵図（一））〕があり、「銅鐸・堂ノ上ト云処ヨリ掘出ス宝永年間之事ナリ」と記され、親王寺所藏銅鐸の両面の図と寸法が詳しく記入されている。これによって親王陵から西南五〇〇メートルを隔て「堂の上」という小字の地域（現在の楠町）から出土したものであつて、親王塚出土というのは誤伝であることが明白となつたわけである。

この銅鐸は全高四五・五センチ、鐸身の高さ三三・一センチ、鈕の高さ二二・四センチ、底面の長径二四・二センチ、同じく短径一六・六センチ、舞の長径一五・一センチ、同じく短径一一・二センチ、底部の厚さ三ミリ、重さは四・七キログラムである。舞部と底径と鐸身の高さの比率は、四・六・八を測る形式である。三木文雄氏の分類による「前期・二式」であり、佐原真氏の分類による「古い銅鐸・外縁付鈕式」にあたる。三木氏は銅鐸自体の文様と形式の変遷と各部分の比率などによる



図57 打出楠町堂の上出土銅鐸（B面）（親王寺所蔵）

分類をされており、佐原氏は鈕の形式の変遷を主として分類されている。何れの説をとっても、堂の上出土の銅鐸は最古の形式の次に出現する第二段階の古い形式の銅鐸なのである。

この銅鐸も質はよくない。形態はカブト型といわれる鈕をもち、外反りのする楕円形の鐸身で、両側の鱗部には、おのおの三か所に二連の突出した飾耳をもっている。つくりは厚手で鑄上りは余りよくない。表面は一部に青白色の部分がみとめられるが、大部分は青緑色を呈している。舞部は上からかぶせて張付けた形式のもので、内面の下部にある凸線は一本で、舌による磨耗度がひどいものである。鈕部の文様は、両面ともに一番外側に内向する鋸歯文・つぎに綾杉文が二列あり、つぎに鋸歯文が上段に、連続渦巻文が下段に配されて菱

環部にいたり、ついで連続渦文帯かもんがあり、最も内側の鈕口部に接する部分の文様は明らかでない。片面では連続渦文の中央部に、タテに双頭花様渦文一つが刻されている。

鐸身の文様は五条の線による流水文をえがき、中央部に連続渦文帯をおいている。また下段には流水文の下に

連続複線鋸歯文帯があり、その下に三条の凸線帯をもっている。

鱗部にも連続鋸歯文が配され、飾耳は二連になっている。鐸身上部の型持ちの孔は不整形の円形で、両面にあり、下底部の型持ちの孔（キリカミ）は楕円状だえんである。

この銅鐸は兵庫県城崎郡の気比出土の四号銅鐸と同じ形式で、類似の銅鐸には神戸市桜ヶ丘出土の三号鐸、兵庫県三原郡津井隆泉寺旧蔵の銅鐸（尼崎市本興寺蔵）、鳥取県本庄出土銅鐸などがある。

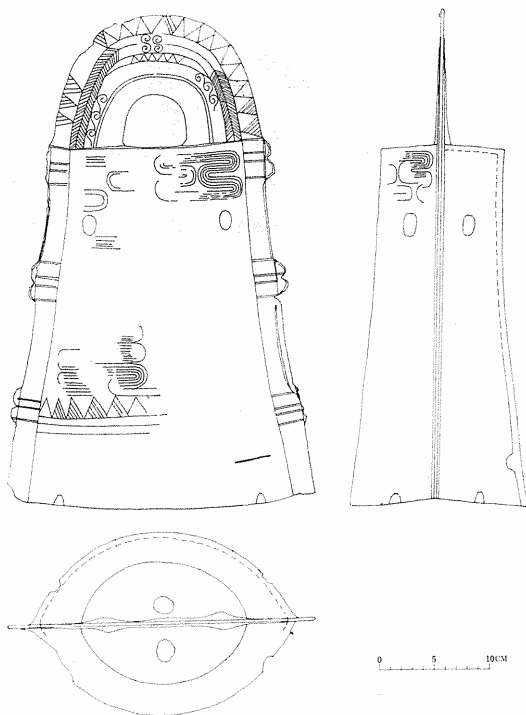


図58 打出楠町堂の上出土銅鐸実測図

芦屋市を中心とした大阪湾沿岸の地域は、桜ヶ丘出土の一四口を代表とするように、とくに銅鐸の発見例が多く、全国的にも最も密集して発見されている地域である。

銅鐸にみられる文様は、鋸歯文・綾杉文・流水文・連続渦文・双頭花様渦文など、阪神間の弥生前期―中期の土器に普遍的にみられる土器文様である。それだけに、近辺のどこかに銅鐸の鑄造所があり、それを管理していた有力者が存在した可能性が推測されている。

また、この銅鐸の所有者を近辺の遺跡から考えようとすると、弥生中期以来の山頂式高地性集落をのこし、首長住居をはじめ、非生産的な有力者の遺構をのこした「会下山集落」の人々であった可能性が強い。

弥生後期の文化と周辺の遺跡 芦屋市周辺の弥生遺跡を概観すると、前期から中期そして後期へと継続的な発展をとげた遺跡もあるが、後期になってはじめて検出される遺跡もある。これは、河川の搬出する土砂が堆積してできた沖積平野が、このころには地域によっては、湿潤地からしだいに水はけのよい中庸土壌の安定した耕地となってきたためと考えられている。

同時に、このような低地に大規模な集落が発生するようになるのは、増大してきた人口が、生産拡大への展開をはじめたからでもある。弥生後期の時代には大阪湾沿岸の低湿地は、ほとんどが弥生人の生活の場となっていたといえるぐらいに豊富に遺跡が発見されている。芦屋市とその近辺の著名な遺跡をあげておこう。

芦屋市Ⅱ会下山・城山・藤ヶ谷・打出岸造り・笠ヶ塚・三条南遺跡

神戸市ニ坂下山・森北町・本山町・北畑垣内・小路出口・金鳥山・荒神山・伯母野山遺跡

西宮市ニ越木岩・奥畑・上ヶ原・五ヶ山遺跡

川西市ニ加茂・寺畑遺跡

伊丹市ニ小坂田遺跡

尼崎市ニ水堂・南清水・下坂部・庄下川流域・藻川流域・猪名川流域・若王寺・田能遺跡

豊中市ニ穂積・原田・庄内・上津島・宮之前・新免・勝部・利倉遺跡

吹田市ニ垂水・円山遺跡

以上のように各地域に遺存している。

尼崎市の田能・若王寺・下坂部や豊中の勝部・池田市の宮之前などに大規模な発掘調査がおこなわれた結果、弥生中期から後期にかけての低湿地の集落の実体が、かなり明らかになっている。

これらの遺跡から検出される遺物の中で、中期から後期にかけて鉄器が普及するらしいことが分るが、中期には石器が依然として多い。しかし、後期になると石器の量は中期ほどは多くない。「銅鐸」を權威のシンボルとして所有していた人々から「鉄」を掌握した人々の時代に移行していったのではないかとという考え方も成立する。

「倭国大乱」と『後漢書』に記された内乱を通して、集団の政治的統合が進行し、三世紀のはじめには三〇余の国にまとめられたことが、『魏志倭人伝』に記されている。記事の内容はともかくとして、そのような変革の

過程において、旧来の社会体制は否定され、宗教的体制も新たなものへと移行していくのは当然のことである。大阪湾沿岸の低湿地に大集落が出現するようになるのも、生活環境の好転以外に社会情勢の変化が、条件として存在したのではなからうか。

近辺の宝塚市安倉からは、呉の赤鳥七年（二四四）銘の鏡が発見されているし、和泉市の黄金塚古墳からは、魏の景初三年（二三九）銘の鏡が出土している。三世紀の舶載銅鏡が大阪湾沿岸に存在するのである。後期の大遺跡からは、政治的・軍事的必要性からする積極的な発展があった可能性を考えることもできる。

《田能遺跡》

近畿の弥生集落の実体を田能遺跡を例にとってみておこう。田能遺跡は弥生前期以来、終末期にいたるまで、弥生全期にわたる集落址であるが、発掘調査は中期と後期の生活面についておこなった。何といても、近畿地方では最大の規模でおこなった発掘調査であるため、弥生文化の実体について、不明であった点を補う種々の資料を検出することになった。

まず、集落の規模であるが、東西約一一五メートル、南北約一四五メートルの地域に生活の場を設けており、西と南は河道に、北方は沼沢地帯に接した微高地で、東方に水田をもっていた可能性がある。

稲を中心に各種の穀物や種子類も出土しているが、島・魚・鹿・猪の骨や歯も多量に検出されるほか、鯨の骨まで出土しているので、農耕を主とはしながらも狩漁撈も同時に行なっていた生活を推定することができる。

また多量の碧玉製管玉が発見され、加工途中の原石まで出土しているので、「玉造り」も集落内で行なってい

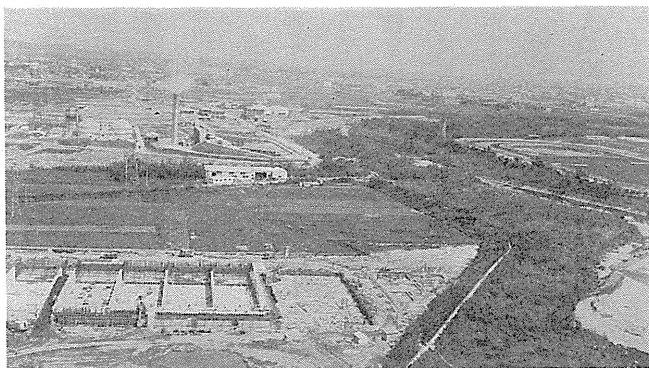


図59 田能遺跡全景（昭和41年撮影）

たと考えられている。硬玉こうぎよくの勾玉まがたまやガラス小玉も出土しているが、碧玉とあわせて、これらの原石がどのようにして、どこから移入されたものであるか、かなり広い交易圏の成立していたことを追求する必要を示している。

銅剣いわたの鑄型いがたや白銅製釧くわや銅鏃くわの出土からみて、青銅製品も鑄造されていたことが推測されている。

中期の円形堅穴式住居たてあなから、平地式住居あるいは高床式住居たかゆかに、住居構造が変化したことを示すように、堅穴住居址を破壊して、無数の柱穴群が検出されている。たとえば、二一〇〇平方メートルの範囲内で七六〇〇個のピット数を数えることができるほどで、このなかには物置用・ハキダメ用の土壇どじょうも含まれている。おそらく低湿地内の微高地に築かれた生活の場として、もつとも住みやすい工夫をこらした結果の遺構と考えられる。集落内の排水路的な規模の大きな溝も各所から検出されている。

また低湿地であるため木器類も比較的多く発見され、長さ三メートルに統一された種木材たねまきを主とする建築用材・弓・板材・鋏くわ・堅杵たてね・砧きねたなどのほか、桜の皮をまいた木釘も発見されている。

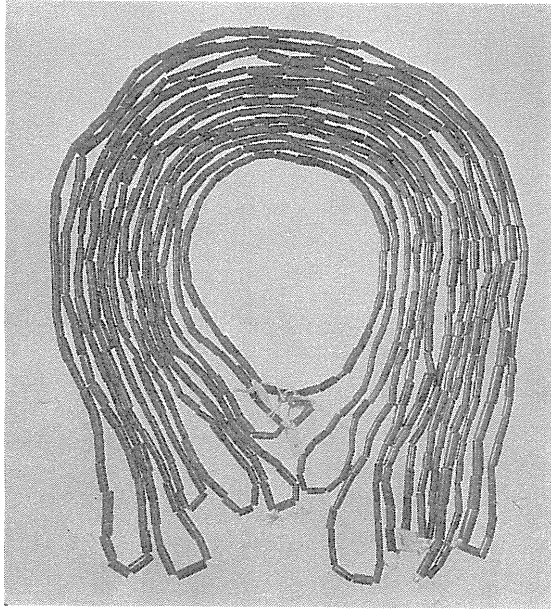


図60 田能第16号棺出土碧玉製管玉

石器類も弥生時代の全種類の石器が集成された形で検出されたが、最も多いのは石鏃と石庖丁と石剣及び石斧類であり、何れも使用痕を止めている。石剣はすべて折れ、刃こぼれがみられるし、石庖丁は度々使用されて砥ぎへった痕跡をとどめ、紐孔には紐ずれ痕をとどめている。多量の石包丁はすべて片刃で、紐の結び方に一定の規則性があることが確認されている。

低湿地であるために鉄器の遺存は少なく、小片若干であったが、鉄滓片も出土しているので、あるいは製鉄技術も備えていた可能性がある。

それは、約二キロ南の若王寺遺跡が、弥生後期から古墳時代初頭にかけての製鉄遺跡であるため、それらとの関連からも可能性のあることである。

さらに田能遺跡からは近畿ではじめての人骨を伴う弥生墓棺群が検出されている。近畿地方の弥生墓制については、北九州地域に比較すると、ほとんど資料に恵まれない状況にあった。これが田能の墓棺群の発見によって、近畿の弥生墓制を解明する手がかりが得られることになったのである。

成人の骨は何れも抜歯の風習がみられず、伸展葬を主としたものであり、乳幼児はすべて壺棺・甕棺に埋葬されていることが判明した。同時に、大規模な集落でありながら、墓地域内の墓棺数は少なく、支配的地位にあった家族だけが葬られた可能性の強いものであり、それらの中でも、特別の地域に葬られた一六号棺と一七号棺は、とくに大きく立派で、組合せた木棺内に水銀朱を塗布し、人骨にも朱を塗り、一六号棺は六三二個の管玉をもち、一七号棺は白銅製釧を身につけていた。おそらく支配者の墓であり、身分制社会の存在を示すものとされている。

そのほかに一辺約一〇メートルの方形周溝をもつ遺構が若干検出されている。まわりの溝は、幅・深さとも約一メートルで、近時各地で発見されている方形周溝墓と構造的には類似しているが同一のものではない。甕棺にしても、北九州のものは合せ口式のものであるが、田能のは覆い口式のもので、弥生式土器の甕を大形鉢形土器で覆った形式である。壺棺も壺を土器の大形片で蓋をするように覆っている。芦屋市会下山からも甕棺埋葬の土壙墓が検出されている。

墓棺には土壙を掘って、その上に縦長の蓋板をのせた形式のもの・刳り抜き形式の木棺・土壙上に二枚の棧をおいて蓋板をした形成・完全なる組合せ式箱式木棺など各種があつて、必ずしも一定の方式ではない。このような多様式にわたる墓棺の発見によつて、近畿の弥生墓制が明らかにされることになったのである。

しかし、弥生時代を通じて大封土をもつた盛土の古墳は出現していない。いまだそのような社会体制ではなかったのである。ここに弥生時代と古墳時代の相違がある。

また棺材は高野槨とみられ、槨を棺材として使用する風習が弥生時代にはじまっていることが考えられるようになった。これは、日本書紀の素戔鳴尊の神話（尻の毛を抜いて槨の本をつくり、これを棺打とせよといわれたという神話）にもあるように、奈良時代になっても、槨を棺打とすることがおこなわれていたことを考えると、このような記紀伝承の思想の発源が弥生時代にはじまるという一例を示したことになる。

このように低地における遺跡の代表例として、大阪湾沿岸の農耕社会の実態と、やがて成立する古代国家出現の胎動期の様相を知る手がかりとなっているのが田能遺跡なのである。（村上行弘「田能」学生社・「田能遺跡概報」尼崎市教育委員会）

田能遺跡を例にあげて周辺の弥生後期の遺跡を眺めたが、豊中市の勝部遺跡や池田市の宮之前遺跡・高槻市の安満遺跡・和泉市の池上・四ツ池遺跡など、大阪湾沿岸の各地に同様の遺跡や遺構が検出されるようになったのが現状である。したがって、まだまだ大阪湾沿岸には重大な資料を提供する大遺跡が眠っている可能性があるのである。

会下山遺跡

海岸近くの低湿地で田能遺跡の人々が生活の場を築いていたところ、芦屋市三条町会下山の、標高約二〇〇メートルの狭い山頂尾根部に生活の場をきづいた人々があった。山頂式高地性遺跡の標式とされている会下山遺跡をのこした人々である。（村上行弘・石野博信「会下山遺跡」昭和三十九年・芦屋市教育委員会参照）

会下山遺跡は芦屋市教育委員会が六か年余にわたる長い期間を費して学術的発掘調査を行った弥生集落址である。発掘調査によって判明した会下山遺跡の遺構は、住居址・祭祀址・ソトクド址・物置址・倉庫址・土壙墓・柵址・挨拶址・泉址など弥生集落の全貌を解明しうる手掛りが得られるものであった。

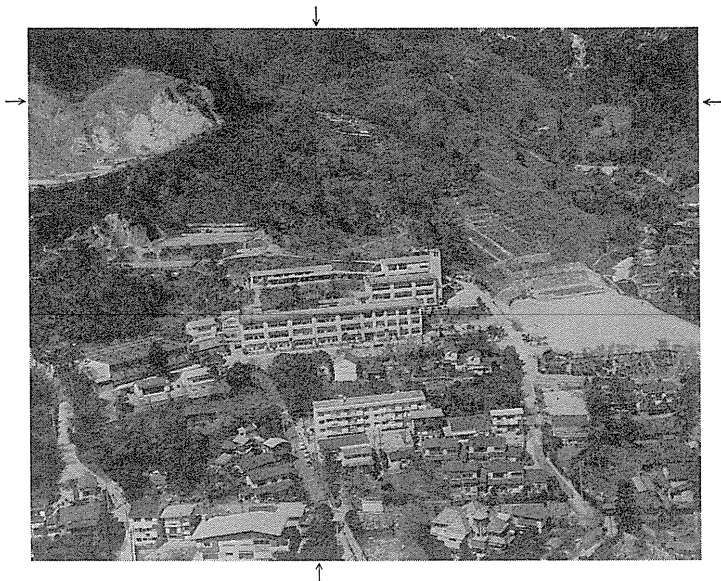


図61 会下山遺跡全形（→の交点が山頂尾根部の突端）

《会下山遺跡の遺構》

発掘調査により明らかにされた遺構はつぎのとおりである。

イ、S地区——最高所である標高二〇〇メートルの会下山山頂の平坦部中央にS地区祭祀址がある。この遺構は東西六・四メートル、南北六メートルの円形竪穴式住居址の形式をとり、四周に幅四〇センチ・深さ一〇センチの溝をめぐらし、東側に排水口の設備を設けている。

住居址の形式をとっているが、柱孔はなく、屋根をもつ構造物ではない。中央部は約二五センチ低くなっていて、この中央部一帯は真黒な木炭層を形成し、その中心部に径六〇センチ・深さ四五センチと径四〇センチ・深さ三〇センチの孔があり、この孔の形式はV字状で他の住居址にみられるような柱を置いた形式とは異なる。

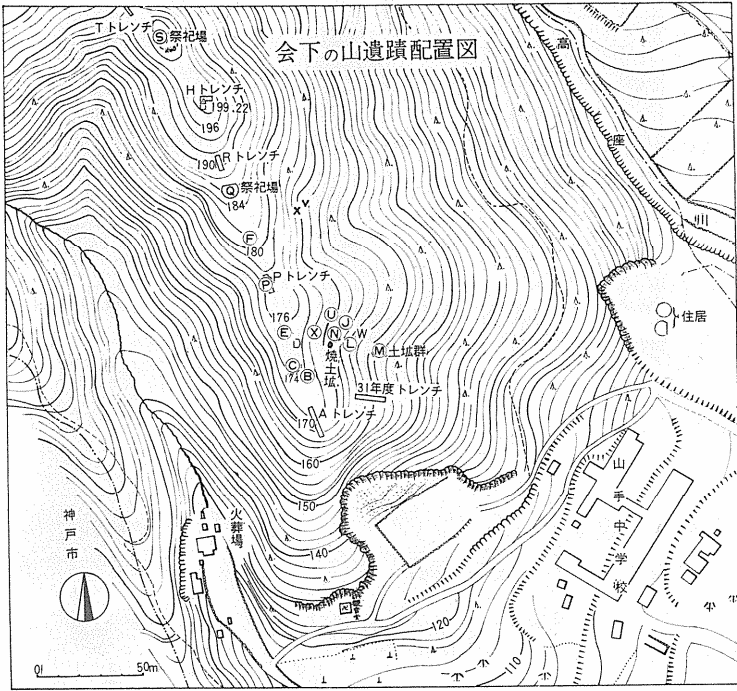


図62 会下山遺跡配置図

つていた。この孔内で径四〇センチの大形高坏の脚が検出され、孔の上には径三八センチの面取りをした川石が置かれ、この石の下方から上方をみると、六甲山塊の一峻峰の頂上に直面する位置にある。

床面に遺存した遺物は、大形高坏一、二個・石製投弾・壺・甌・石鏃などとともにサルボウ貝二〇個が厚い有機質腐蝕土中から発見された。会下山全山の調査においてサルボウ貝が発見されたのはこの地域だけであり、供物的な性格をもつものであり、有機質の木炭層もそのような性質をもつものの炭化層と考えられている。

□、Q地区——この頂上部の露天式遺



図63 S 地区 祭祀 址



図64 Q 地区 遺 構 発 掘 状 況

構の真下にQ地区祭祀
址がある。南に傾斜す
る尾根上の標高一九〇
メートルの地域に地山
（五―三〇センチの径）
が南北三・五メートル、
東西三メートルの間に
比較的密に集まってお
り、その地山をめぐる
ように外溝か曲折しな
がら全長五・五メート
ル、溝幅二〇―五〇セ
ンチでめぐり、溝内
には第五様式の土器が密
集していた。これら甕



図65 F 地 区 住 居 址

九・壺六・高坏一三を主とする土器具の中に球形土製品・軽石・小埴こがらも混っていた。そして、この外溝の下方の尾根の東西両側に小屋と石組が配置されていた。東側の小屋の床面は径一・五メートル×二メートルの規模で置土で床をつくり、幅一〇センチの小溝をめぐらせていたようである。(北辺では確認できたが他は置土であるため明白ではなかった)。北半部で確認できた柱孔が二個あるので、四本柱の小屋であった可能性がよい。この小屋の西側には石組がある。長径一・五メートル、短径一・二メートルの範囲内に人工的に配置されたと推定される花崗岩の石組(拳大の石から径七〇センチ大の石を含めた自然石で構成)があり、この石組地域からは男根状石製品・砥石・軽石・サヌカイト片・甕口縁部片・ガラス小玉が検出された。こ

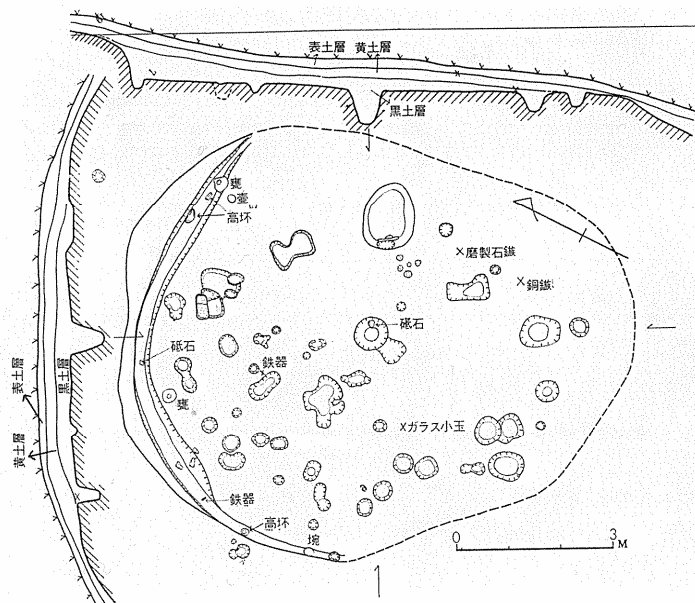


図66 F地区住居址実測図

の小屋と石組が、琉球にのこる「ウタキ（御嶽）」信仰の制と類似していると考えられている（琉球では聖林は御嶽^{うたき}とよばれ、このウタキは全ての村落に必ず一か所あって、集落の保護者であり支配者である神が住んでいると考えられている）。小屋はおそらく祭祀を司る人の座であったと考えられている。

ハ、F地区——この神聖な祭祀場の下に、F地区首長住居址がある。住居址は長径九・八メートル、短径八・二メートルで、狭い尾根上の傾斜面全面を拓き、北壁は地山を約七〇センチ削り、いわば半竪穴半平地式の構造である。度々再建がおこなわれたらしく、多数の住孔址がのこっていた。これらの柱孔と床面上の遺物を精細に調べることによって、F地区住居址は第四様式（中期末）の時期につくられ、第五様式（後

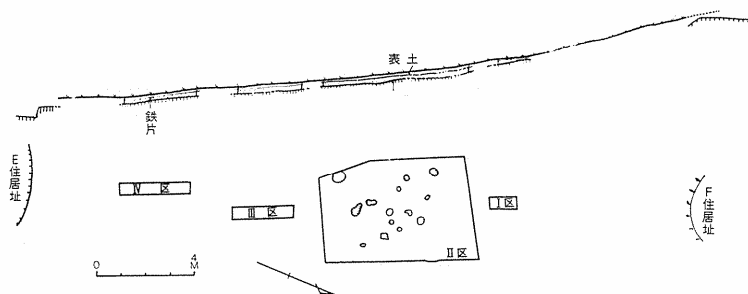


図67 P地区実測図—住居間の柱穴群—

斯)の時期には床面内に平石を置いたり、炉(長径一・三メートル、短径一・〇二メートル、深さ二〇センチ)を設けたりして整備され、この段階で、S地区・Q地区の祭祀場が設けられたことが判明した。

住居址の北壁周辺には最大幅四〇センチの周溝がまわり、甕・高坏・埵・砥石・壺などが落ちこんでいた。住居址内からは鋼鎌・磨製石鎌・鉄斧・キサゲ・ヤリガンナなどの工具類・鉄釘などのほか、打製石鎌やガラス小玉四個が検出された。住居址の位置・規模・遺物などの面より首長住居と認定されるものであった。

二、P地区——この首長住居の直下、標高一八〇メートルの地域で一四個のP地区柱穴址が検出された。それは弥生後期初頭の頃であり、司祭的首長住居及びその上に存在する祭祀場と一般住居を構築物で区分する柵址と推定されるものであった。

この柵址の下方の尾根上に一般住居のE地区住居址・C地区住居址がみられ、E地区から東にのびる尾根上にX・N・J・L地区住居址が検出され、J地区の北にU地区埃捨址・N地区の南に焼土壙が、L地区の東にM地区土壙墓が発見された。



図68 E 地区 住 居 址

ホ、E地区——E地区住居址は南北の尾根と東西の尾根の交点にあたる稜線上の標高一七三メートルの地域である。はじめは、径五・五メートルの円形翹穴式住居で、中央に中心柱をもち、まわりに四柱をもった五本柱の家屋で、南に入口をもっていたのが、のちに径六・五メートルの規模に拡大され、床面に張土はつちをして、四周に幅二〇センチ・深さ二〇センチの周溝をめぐらし、東側に排水する形式の住居に建替えられ、柱孔だけはほとんど移動させずに再使用されたようである。旧床面ゆかめんには第三様式（中期中頃）の遺物が若干みられるが、E地区住居址内の出土遺物は第五様式（後期）の壺・甕・鉢・高坏などの土器がほとんどであり、石鏃・石匕せきひ・砥石・石錐せきすい・石斧・燧石ひょういし・川石・鉄工具類・鉄鏃・鉄釘などが検出された。

へ、C地区——住居址は標高一七二メートルの南北尾根の南辺にあたる地域である。はじめは、一辺約七メートル

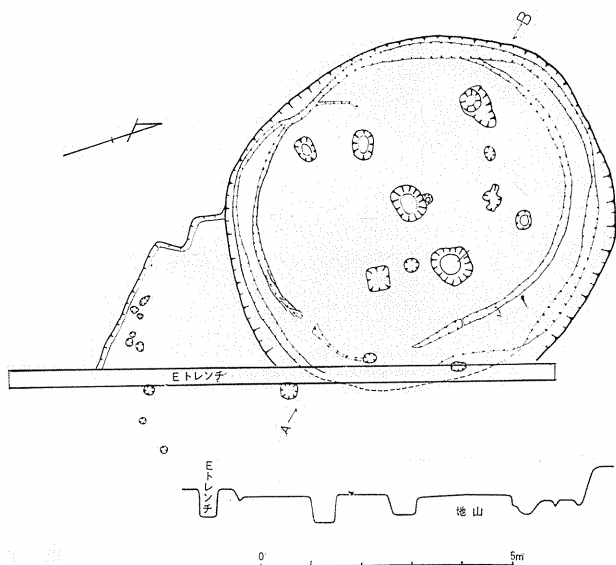


図69 E 住居址 実測 図

隅丸形状の住居が営まれていたらしい。住居址の北半部に隅丸形状住居にともなう幅二〇センチ・深さ二〇センチの周溝がのこされており、この溝は西側に設けられた排水溝につながっていた。

この隅丸形状の住居址には中央の床面に径一・三メートルを測る中央穴があり、そこから幅二五センチ・深さ二〇センチのV字溝が西側の排水溝に直線で通じていた。洲本市の下加茂住居などにみられる間仕切的な工作址と似ているが、同一のものではない。

この住居址を改造して、東西七・五メートル、南北八・五メートルの円形竪穴式住居をつくり、まわりに幅二五センチ・深さ二〇センチの溝をめぐるせ、竪穴の深さは



図70 C地区住居址（上方はE地区住居址）

二五センチを測るのが再建住居址である。この住居址は置上によって旧住居面を埋め、排水口は西北隅に設け、東南隅に幅一・二メートルの階段状の入口を設けている。中央に中心柱をもつ五本社の家屋であるが、火災で焼失したらしく、床面全面に焼面がみられ、焼けた柱が炭化して遺存していた。これによって四柱材の一本は径一七×一四センチ、床面より四〇センチ掘込んで埋めていたことが分った。

床面遺物には壺・高坏たかづき・小坩こつぼ・石七せきひ・石鎌せきやぐ・砥石といし・鉄器片などがあり、隅丸方形の住居が営まれたのは第三様式「新」の時代であり、円形竪穴式住居が営まれたのは第四様式以後と考えてよい。すなわち弥生中期末から後期にかけての頃の住居址と考えられている。

現在、会下山に復原されている住居址は、このC地区円形竪穴式住居址を東京大学名誉教授藤島亥次郎博士の指導をうけて再現してみせたものである。

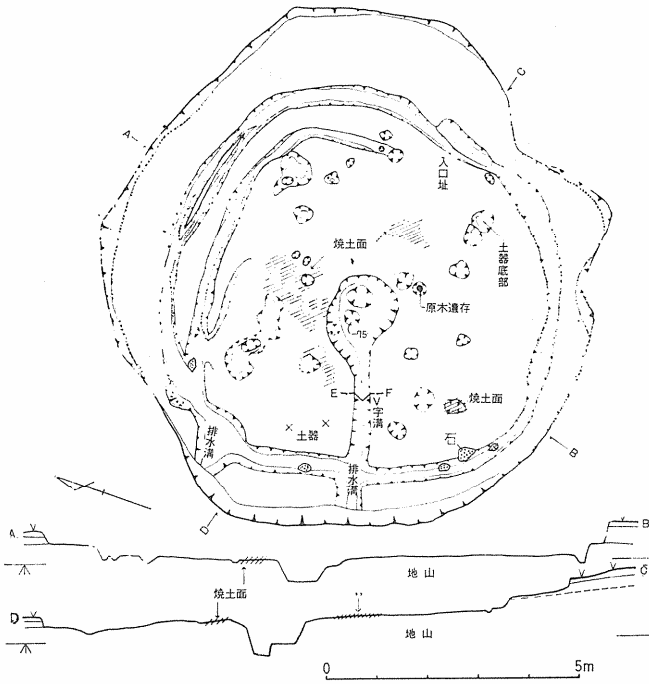


図71 C 地区 住居址 実測 図

ト、X地区——X地区住居址は、東西の尾根が南北の尾根に取付く最高所で、標高一七〇メートルの地域である。東へ傾斜する地形の制約をうけて、西側は深い堅穴・東側は平坦面という半堅穴半平地式の住居址で、堅穴部の周辺には幅三〇センチ・深さ一〇センチの溝がめぐり、床面は南北六・ニメートル、東西五メートルの楕円形^{だえん}である。

南北尾根と異なる点は西半部（堅穴側）にしか柱孔が存在しない構造の住居址であるということである。

また、この住居址も再使用されており、西側の翌穴の壁も再建された時の人工壁であって、この壁を除くと

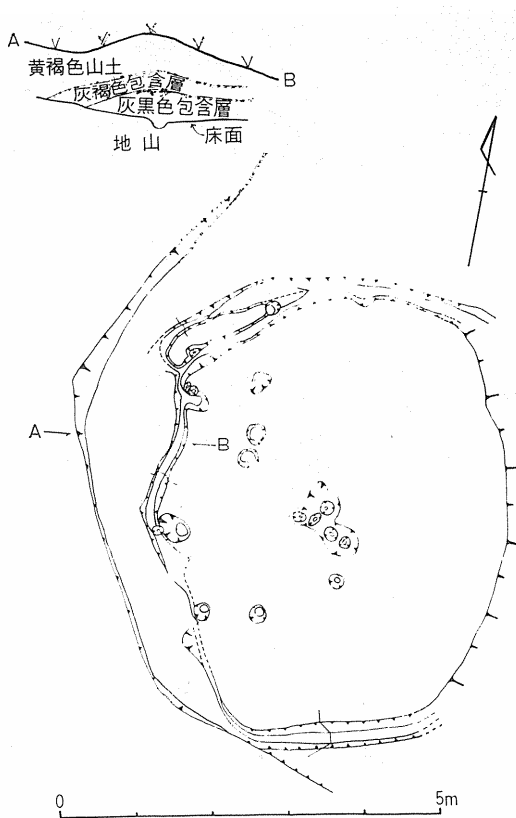


図72 X地区住居址実測図

旧住居址の溝が検出され
た。

東へ傾斜する東西尾根の
取付部に位置する関係上、
南北尾根の各住居址に比し
て、表土層が厚く、厚さ三
〇センチの住居址上の堆積
層の上に、厚さ五〇センチ
の遺物包含層があり、堆積
層内にも人工的な土壌が二
か所検出された。この土壌
が土壌墓であるかどうかは

明白ではない。

床面からはコバルト色のガラス小玉・燧石・石製投弾・木炭片・鉄ノミ・鉄鏟・鉄釘・石鏟・石錐・鉢形土器
・高坏・壺などの土器が発見された。

チ、N地区——N地区住居址はX住居址の東に当る。尾根上であるため構造は同じであるが、床面は南北五・六

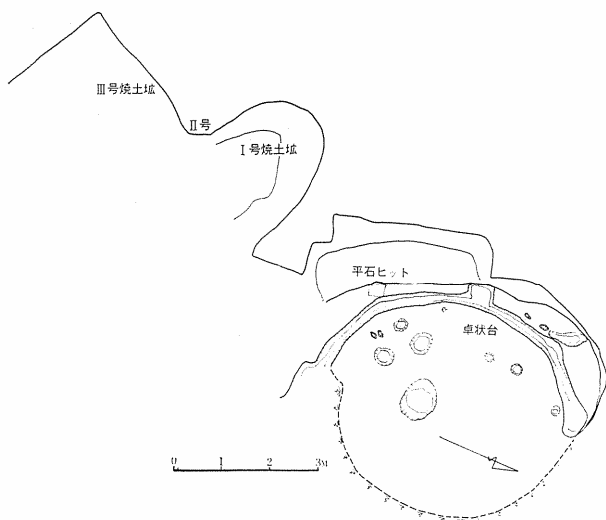


図73 N地区遺構実測図

メートル、東西四・六メートルで、たてあな 竪穴部の周辺には幅二六センチ・深さ一五センチの溝がめぐっている。柱孔は西半部に片よって遺存していた。

この住居の南に隣接して三基の焼土壙しほつてらう（ソトクド址）があり、住居址廃滅後は、西辺に平石ひらいしを伴なう大きな土☆が掘られたらしく、ここに多量の土器が発見された。

N地区住居址は第四様式の頃につくられ、第五様式の時代までのものであるが、X住居址に移転した可能性がよく考えられる。石ヒ・石鏃・石製投弾・燧石・ガラス小玉などのほか、破片を主とする土器類が床面から発見されている。

リ、L地区——L地区住居址は東西尾根の東南端部に設けられた半竪穴半平地式住居址



図74 L地区住居址

小玉が検出されている。

又、J地区——J地区住居址は標高一六三メートルの比較的広い地域である。南北一五メートル・東西七メートルの地域に厚い包含層があり、これは七層に分類された。また、北半部・西半部に異なった性格の遺構が検出されている。住居址遺構には南半部の長径七メートル、短径四・六メートルの半月状の半竪穴半平地式住居址があり、まわりには幅二〇センチ・深さ二〇センチの溝がめぐり、東の斜面に排水されていたようである。この住居址の下には、さらに七層にわたる住居遺構が認定され、度々盛土もりつちをしては再建されていたことが推測された。そ

で、標高一六五メートルの地点にあたり、床面は南北八メートル・東西七メートルをはかり、半円状の竪穴にそって幅二〇センチ・深さ一〇センチの溝がめぐっている。床面内には不整形な柱孔が残されており、北辺の溝上には土器・石器群とともに、F地区やN地区でみられた平石ひらいしが遺存していた。住居址内の遺物は小埴こつぼ・甕まが・高坏たかひらが床面から、埵まが・甕まが・高坏たかひら・柱状片刃石斧ちゆうじょうぺんかたせきが溝内から発見された。何れも平石ひらいしに関係あるごとくに平石の周辺に存在していた。床面の他の場所からは砥石・石製投弾・鉄鎌・ガラス

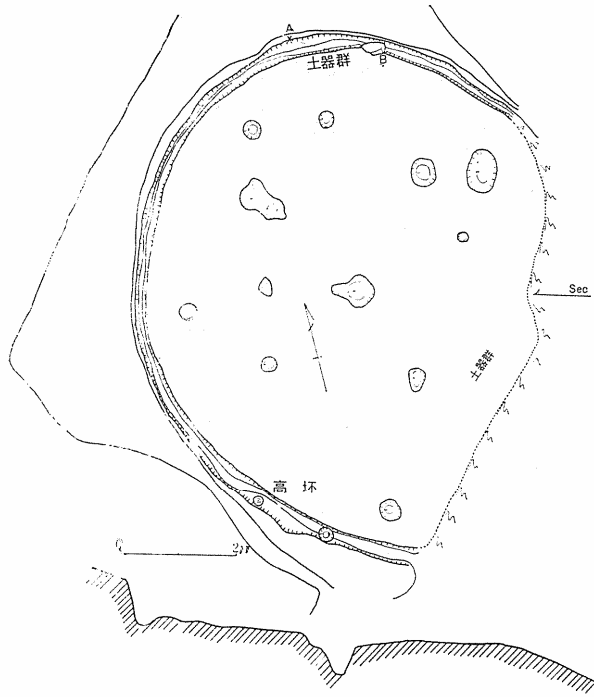


図75 L地区住居址実測図

して、J地区住居址が会下山では最も古い、第三様式の時期に建設されたもので、会下山集落の最初の生活の場であったことが判明している。

北半部には地山面に二・四メートル×一・二メートルの焼けた凹み^{くぼみ}がみられ、その中央部に大形の壺が一個おかれ、くぼみのまわりには三本の柱孔が残されていて、壺棺墓と考えられる状況であった。

西半部には二メートルの径内に円形で約二〇個の小孔址がみられ、その中央からは水が湧き出しているため、泉址と推定でき、周辺には立木^{たてき}の痕跡がみられた。この西側には盛土をした柱孔址が四個あり、何等かの建物とみら



図76 J 地区 住居址

れるが、一応倉庫址と推定されている。

泉址の西には幅六〇センチ・長さ四メートルの排水口が西方の谷にのび、途中で一メートル以上の規模となつて谷底まで通じていた。

J地区の遺物には第三様式「古」の土器をはじめ、石錘・石ノミ・石剣・砥石・石錐・軽石・石製投弾・石鏃・石ヒ・鉄鏃・ヤリガンナ・ガラス小玉など多量のものがみられた。

ル、U地区——これらの住居址のほかに、集落としての要素をもつ挨拶址や焼土壙も発見されており、土壙墓も遺存している。U地区は標高一六六メートルの南北尾根と東西尾根の交点の北側傾斜面で、幅七メートル、長さ七メートル以上の大きな穴が斜面に掘られ、

急傾斜して厚い遺物包含層を形成しながら谷間へと連なっている。おそらくハキダメと推定されるが、周辺の平坦部には真赤な焼土面もみられるので、煮炊的なことも近くであつたらしい。厚い有機質を含む包含層中からは、ガラス小玉・石鏃・燧石・軽石・種子片・甌の蓋・把手付土器・甌（蒸し器）・高坏・指紋のある土器など、

第三様式から第五様式にいたる土器を主とした遺物が多量に採取された。

ヲ、ソトクド址——集落共同のソトクドすなわち炊煮場・厨房址は、D地区とW地区で検出されている。N地区

南半では三基のソトクド址を検出したが、長径四メートル余、短径二・四メートル、深さ約七〇センチのものが主である。

N住居址の西壁部にも長径三・一メートル、短径一・六メートル、深さ三〇センチの長円形の土壇が検出され、平石を伴っているので、平石ピットと称しているが、構造的にはソトクド址と似ている。

W地区・D地区では灰分の多い焼土面が検出され、かなり厚い灰層を形成していた。

焼土壇内の土の分析では燐分が多いので、おそらく動物などの調理も行った結果とみられ、会下山の各所に共同炊事場のな施設があったことを推定することができる。土壇内では土器も焼けた状態で多量に検出されている。

ワ、M地区——M地区では四基の土壇墓が発見されている。長径二・八メートル、短径一メートル、深さ三五センチのもの、



図77 N地区焼土壇



図78 M地区1号土塚墓（土塚内の甕）

長径三メートル、短径一・二メートル、深さ六〇センチのものが完全な形で発見された。会下山の東西尾根の東端部、標高一六二メートルの地域である。集落の外縁部に墓域を設けた可能性が大きい。

一号土塚は甕とガラス小玉をもち、二号土☆は中央に石をおいて甕と高坏をもち、三号土塚は中央部に壺・甕・高坏をおいて、壺の上に石をおいており、四号土塚は鉢と器台をもつていた。人骨を遺存しないので、墓という断定は困難であるが、他の遺構や近辺の遺構と比較して、土塚墓と推定されるものである。

《会下山出土の遺物》

Ⅰ、土器——弥生式土器は中期の第三様式からはじまり、第五様式の終末期のものまで存在する。したがって、会下山集落の形成は弥生中期の時代にはじまり、弥生文化の終末期に転移することができる。

土器の種類は壺形土器・長頭壺形土器・無頸壺形土器・飯蛸壺形土器・脚台付壺形土器・脚台付無頸壺形土器・小形壺形土器・甕型土器・直口甕形土器・鉢形土器・鉢形土器・大形鉢形土器・高坏形土器・器台形土器・脚台付鉢形土

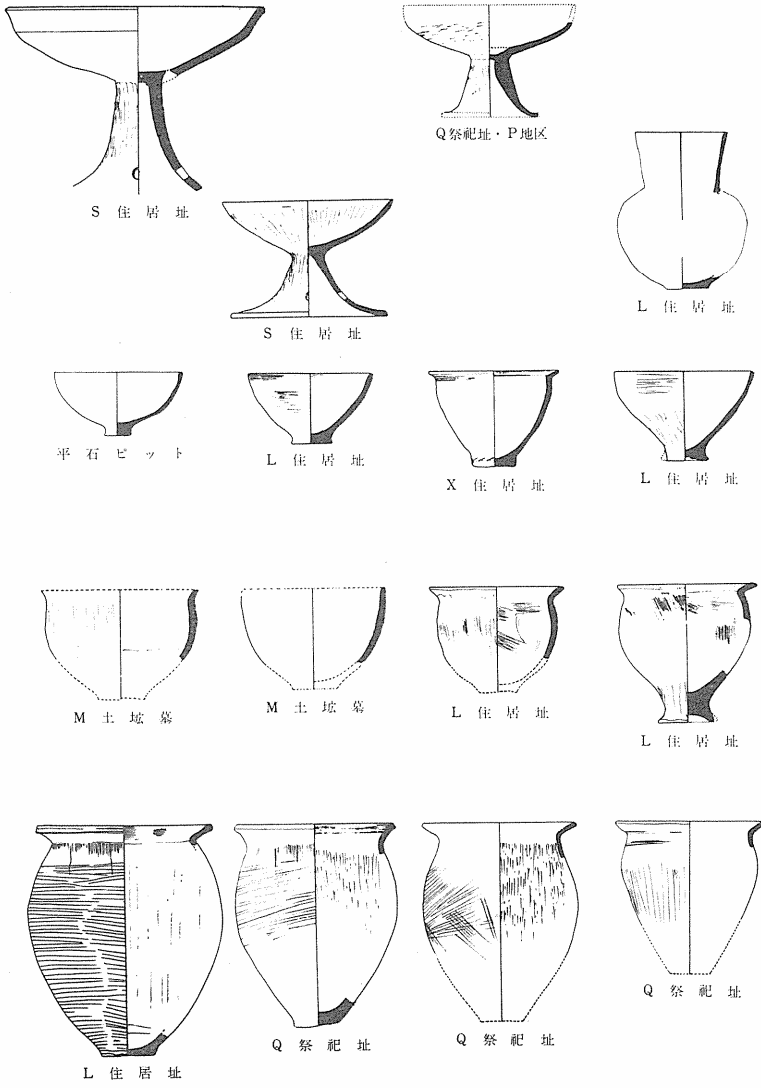


図79 会下山遺跡出土土器実測図(約7分の1)

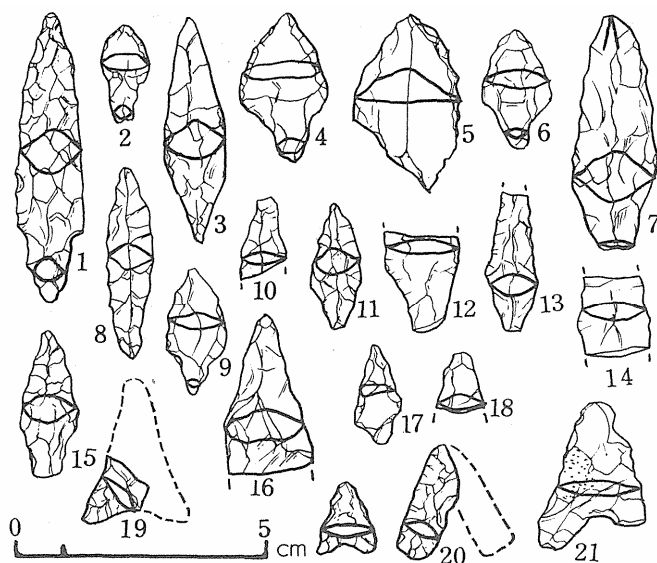


図80 石 鏃

器・甌こしき・把手とって付土器・埴形土器まらなどに大別される。

周辺の低地性遺跡と比較した場合、土器の質が比較的粗製であり、高地性遺跡での保存状況の実懸把握と会下山集落人の土器の器形と種類が集成された結果となり、周辺遺物との関係の上でも一基準を示すことになった。

□、石器——石器には柱状片刃石斧ちゆうじょうかたはせききという、尼崎市たのう なこうじの田能たのうや若王寺わかおうじからも検出されている阪神地方独特の形式のものをはじめ、磨製石剣ませいせきけんもある。磨製石剣には鉄剣型てつけんがたのものと銅剣型どうけんがたのものがあり、とくに銅剣型どうけんがたのものは近畿地方に特異な分布を示すもので注目される遺物であるが、会下山出土のものは断片であるため、何れの形式のものか判別できない。隣接地の市内岩園町からも鉄剣型石剣の破片が出土しているので、実用品としての

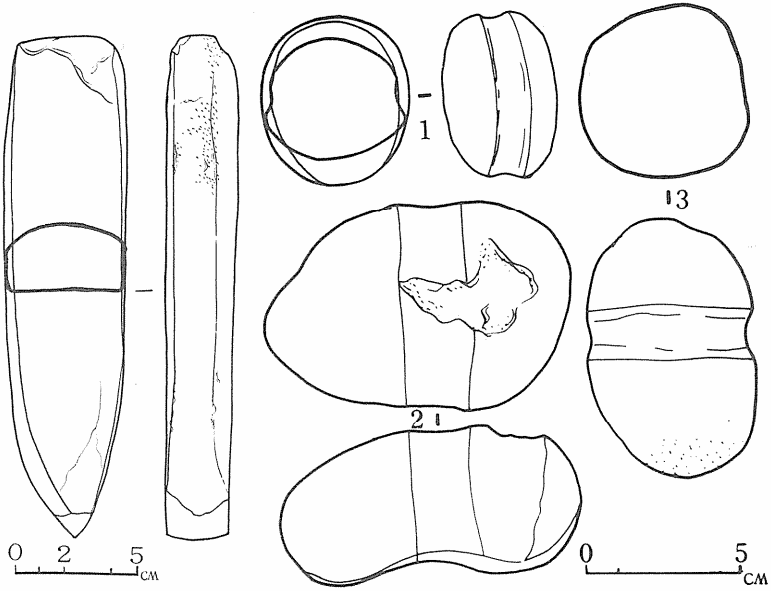


図82 柱状片刃石斧

図81 石 錘

石剣が製作されていたことは推測できる。

ついで比較的多くの刃器が検出されている。石鏃は有柄式・柳葉式・三角式の打製石鏃と有柄式大形の磨製石鏃がある。近辺での磨製石鏃の発見は、西宮市の上ヶ原と六軒である。石錐は使用痕をとどめており、砥石には小形の仕上げ砥・中間形の仕上げ砥・小形の荒砥・大形砥・自然礫利用の砥石の各種が検出されている。そのほかに石錘（円形に磨きあげた丸石の縦または横に帯状にえぐりをつけたもので、漁業用のおもりと考えられている）・石製投弾（丸く磨きあげた石で石弾子とも

いわれる)・丸礫(まどれき)(投弾の一種である)・敲石(たたきいし)・男根状石製品(おんどこんじょう)・女陰状石製品(めいゐんじょう)・軽石・燧石・河原石そして多量のサヌカイト片がある。材質からみると、石鏃・石錐・刃器・石剣はサヌカイト、石錘と石製投弾は花崗岩、石斧は緑泥片岩、砥石は砂岩・硬砂岩・花崗片麻岩・花崗岩が主になっている。そのほか縄文時代と認定される石鏃も若干ながら採取されている。

ハ、鉄器——鉄器は我が国の弥生遺跡の中では最も多く遺存している例となっている。低地性遺跡が湿地帯であるため銃器の遺存度が悪いのに比し、高地性遺跡であるため遺存度が良かったのである。

鉄ノミ・ヤリガンナ・キサゲ・鉄鏃・大形鉄鏃・釣針・鉄釘・鉄金具・小形鉄斧・鉄片など二〇余点が発見されている。用途は利器と工具と武器である。

なお、会下山出土の鉄斧の成分を分析した結果、次のような数字を得ている。分析は長谷川熊彦氏に依頼し、川崎製鉄株式会社神戸研究部でなされたものである。分析成績は

Fe-95.50, Fe₂O₃-1.20, SiO₂ 0.60

Ti-0.12, Mn-0.0154, Cu-0.0257,

C-3.75, P-0.079, S-0.069,

である。Cの含有量が非常に多いことは、この鉄器が鑄鉄(ちゅうてつ)であることを示しており、再調査しても鑄鉄の成分に変化がなく、顕微鏡検査をおこなった結果、セメントタイト(Fe₃C)の微細結晶よりなる白鉄鑄物であることが判明した。また、Cu(銅)・P(燐)・S(硫黄)の含有量が少なく、Ti(チタン)を少量含んでいること

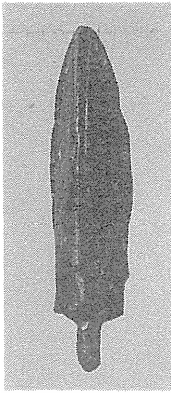


図84 漢式三角鏃(銅鏃)

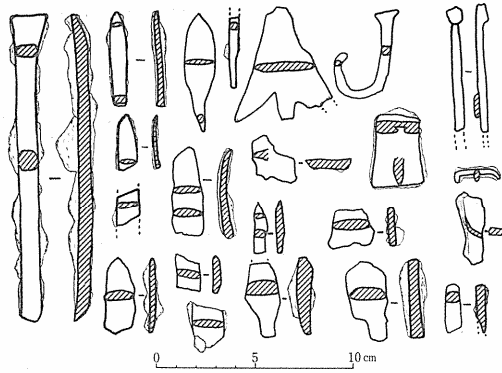


図83 鉄器

は、原料が「砂鉄」であったことを示している。このようにして、会下山出土の鉄器のうち、鉄斧に関する限り、砂鉄を原料とした铸件であることが判明している。

スイスのベルヌ県では、鉄を溶かすための熔鉱爐を、粘土で丘陵の中腹部にきずき、ファイゴを用いずに、何等かの方法で風を送っていた丘陵熔鉱爐が発見されている(佐賀真一博士教示)。会下山でも、製鉄遺構の検出は留意した調査目的の一つであったが、その遺構は見出せなかった。低地では尼崎市の若王寺と下坂部に大規模な製鉄遺跡があり、風を送ったファイゴも多量に検出されている。

二、青銅器——青銅器では、珍らしい漢式三角鏃(長さ四・四センチ)が発見されており、これは中国からの舶載品と推定されている。銅鏃は有茎式で、この形をうつした磨製石鏃も出土している。

木、ガラス小玉——ガラス小玉は弥生遺跡で度々検出されているが、会下山からも一四個検出されており、出土量は多い方である。色分けすると、コバルト・ブルーが六個とスカイ・ブルーが八個である。これは近辺の弥生遺跡のガラス小玉についても共通の特色

で、黄色やその他の色の玉は出土しないのである。

へ、その他の遺物——そのほか、靱痕もみせを付着した土器が四〇点ほど検出されており、靱痕は楕円形先円だえんけいせんえんのものと楕円形先尖だえんせんのものに分れるが、タテの長さ六―七ミリ、幅は三―四ミリのものが多いようである。

また会下山出土の土器には彩色を施したものがあつた。J地区とF地区の土器に多くみられ、土器の内側と外側に施したのものもあるが、内側だけに彩色をしたものが多い。J地区は会下山最古の生活の場であり、F地区は首長住居である。彩色に用いられた朱しゆはベニガラ（酸化第二鉄）である。その他に、古代人の指紋を明瞭に残した土器や、のちの窯印かまざしに当る＋・↑などの明確な刻印を底部に打つた土器、さらに土錘どすいの一種の球形土製品などがある。

F地区の表土層からは、面子めんしが四個出土しており、その内の二個は男女の性器を表現したものである。弥生時代のものと決定しうる出土状況ではないが、注目すべきもので、降つても古墳時代後期までの時期のものである。

会下山遺跡の意義 芦屋市周辺の弥生遺跡は全国的にみても豊富な地域である。これら各種多様な弥生遺跡の中で、会下山遺跡だけが異例の様相を呈しており、その主たる点は、純然たる山頂式高地性遺跡という非生産的な立地条件をもつてゐることである。

標高が高い地域にある遺跡は、近辺でも、瀬戸内沿岸の各地でも、その例をみることができる。しかし、斜面に生活の場をもつてゐるか、農耕地に近いという条件をもつものが多く、会下山のように純然たる山頂尾根部の狭い稜線りやうせん上のみ営まれた集落の例は少ない。外国ではニューギニアの高地族が、狭い山頂尾根上に限つて防塞ぼうさく

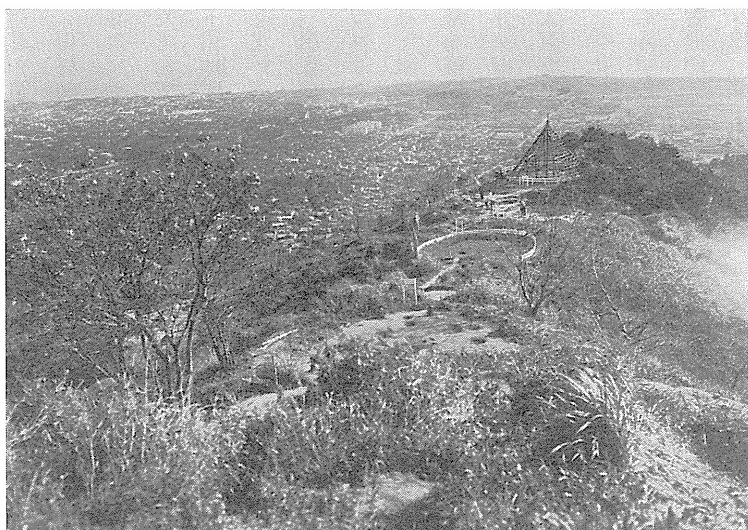


図85 下山からの眺望

的住居を営んでいるが、この状況と会下山集落の状態が類似している。

この点で、もう一度、このような山頂尾根部に集落を営まねばならなかった積極的理由を考えてみる必要がある。当然のことながら、軍事的要素・政治的要素・山村の要素・人災天災を問わず避災的要素などを考慮することになる。

眺望のよい交通上の要衝であることは、軍事的要塞として好適の条件であるが、集落内出土の遺物には特別に武器・武具が多いわけではなく、遺物の面での関連性は充分ではない。

政治的要素についてみると、この集落の出現した弥生中期から後期にかけての時期は、『後漢書』の記事にみえる「倭国大乱」の時代であったとしても、山頂尾根部に生活の場を築く必要はとくになく、周辺をみると、尼崎市田能や豊中市勝部のように低地の方に、とくに大集

落址の遺存がみられる。また山の斜面の方が尾根上よりも住居には適している。

山村の要素を考えても、焼畑農耕を主とした狩猟民を想定しようとする、会下山からは石庖丁が一片も発見されておらず、また土錘や石錘などのように漁具的な遺物が検出されている。津波や戦乱という災害から避難したとしても、周辺の低地遺跡にとくに異常がみとめられないので、これも理由としては貧弱になる。しかも、会下山は、中期から後期末までの期間にわたって、祭祀場や上墳墓や首長住居をはじめ、本格的な定着集落を形成しているので、仮住いのものではない。

出土例の少ない銅鏃・漢式三角鏃・鉄斧・鉄鏃・鉄ノミ・鉄金具・鉄釘・磨製石鏃・ヤリガンナ・キサゲ・ガラス小玉など優れた稀少価値をもつ遺物に注目してみる必要がある。村落構造の基準を示すほどにまとまった集落と祭祀場などの配置、付帯遺構などをながめると、司祭人しさいまたは非生産的色彩の強い首長層に率いられた集落址を推測させる面が強い。

一般的な高地性集落の特色も備えているが、山頂尾根部という限定された地域に集落を営み、その立地条件は大阪湾の全域を、播磨・淡路から摂津・河内・和泉・紀伊・山城までを眺望しうる条件をもっている。

弥生終末期になって、その必要がなくなったために、集落の人々は他の地域、おそらくは低地へ転移した筈である。しかも、人口は住居址から推定して三〇―四〇人ぐらいと考えてよく、田能のような、大集落ではない。古墳時代には必要でなくとも、弥生時代には必要に迫られて出現した山頂式高地性集落であることには違いない。

瀬戸内を經由して交流する弥生文化の文物は、船によつて移動するものである。西方の保久良神社が、「神武東征」の説話に水先案内人として出てくる椎根津彦命を祭神の一柱としていたりことや、会下山のC地区住居址が大陸系の形式をとっていること、芦屋の海岸を古米漢人浜と呼んでいること、さらに大陸より舶載された漢式三角鏃を出土していることなど、海洋人との関係を付会させる材料も存在している。

古墳時代に入っても、会下山山麓の丘陵・低地には、中期古墳・後期古墳が高い密度で遺存し、奈良時代寺院址の芦屋廃寺址まで存在している。弥生時代以来、近畿における文化圏の中心の位置を占めていたことは明白であり、単なる山の民とか農耕の民とか、沿岸漁民の集落といったものではないようである。

六甲山系の高地性遺跡という立地条件は、古代国家成立の胎動期における大阪湾沿岸の海上支配権と同等かの関係をもつ、首長層または司祭人の生活址ではなかったかと推定されているのである。

芦屋市内の弥生遺跡 芦屋市内で発掘調査をおこなった弥生遺跡は会下山遺跡だけであるが、現在までに判明している市内の概要を紹介すると次のようになる。

西良手遺物散布地

三条南町

磨製石斧出土

藤ヶ谷遺跡

東芦屋町

石鏃・磨製敲石・サヌカイト片・弥生式土器（形式は不明）

山芦屋遺跡

山芦屋町城山山麓

石斧・石ヒ・石鏃・弥生式土器（第三・第四・第五様式）

三条遺物散布地

三条町墓地

弥生武士器（第五様式）

笠ヶ塚遺物散布地

山手町

石鏃・弥生式土器（形式不明）

岩ヶ平遺物散布地

岩園町

石鏃・フリント・サヌカイト・土錘・弥生式土器片

岸造り遺跡

大原町

石鏃・弥生式土器（形式不明）

地造り遺物散布地

親王塚町・翠ヶ丘町

サヌカイト片

三条町南遺物散布地

三条町・山手中学校グラウンド西斜面

石鏃・石錐・サヌカイト片

城山遺跡

山芦屋町

弥生中期集落址土器・石器出土

このほか、山芦屋町・大原町・朝日ヶ丘町・西芦屋町・松ノ内町・岩園町から、最近になって点々と遺物の採取がなされているので、芦屋市内においては、ひろく生活の場が営まれていたことが推測されている。これらの遺跡のうち、ある程度の実体が分つているのは、打出岸造り遺跡と城山遺跡である。

《打出岸造り遺跡》

遺跡は地表下三五—一〇〇センチの間に弥生武士器片を散布する包含層があり、壺の完形品一・壺の底部一三（その内二個は条痕をもつ）・波状文をもつ壺の口縁部片二・甌（こ）の底部一（一孔式）・高坏完形品一・高坏脚部片三などが主要遺物であったらしい。

この包含層中には須恵器片一も混存しており、サヌカイト片は一片も検出されなかったが逆刺式の石鏃を一個採取したと記録されている（『紅野芳雄著』『考古小録』）。

遺物が発見された場所は、阿保親王墳から西方へ二〇〇メートル程のところ、西打出から宮川沿いに岩ヶ平に通ずる道路の西側といわれ、高さ二メートル余りの台地の東端を切下げて道路を造成する過程で発見されたらしい。

《城山遺跡》

城山遺跡しろやまは従来からも第三様式の土器類が採取される地域であるため、会下山遺跡の発掘調査と平行して、標高二五〇メートルの山頂平坦部にトレンチ（試掘溝）を掘って、予察調査をおこなった遺跡である。国有林であるので、営林署の係官の立合のもとに調査をおこなった。

この結果、表土下一メートルまでに、弥生中期の住居址床面や柱孔の遺構が存在すること、第三様式から第五様式に至る土器が包含散布されていることなどが分り、会下山と同じく山頂式高地性集落遺跡であることが認定された。全貌については将来の本格的な発掘調査を課題としておきたい。

第四節 古墳時代の芦屋

古墳時代の概観

陳寿ちんじゆが撰せんした三国志さんごくしのうちの魏志倭人伝ぎしわじんでんをみると、「倭人は帯方たいほう（後漢末の二一〇年前後に楽浪郡の南半を割いて設けられた郡）の東南大海の中にあり、山島に依りて国邑こくゆうを為す。旧百余国むじゆ、漢の時朝見ちやうけんする者あり、今、使訳通ずる所三十国」・「南、邪馬台国やまたいに至る、女王の都する所、水行十日陸行一月」・「其の国、本亦男子を以て王と為し、住まる

こと七・八十年、倭国乱れ、相攻伐すること歴年、乃ち共に一女子を立てて王と為す。名づけて卑弥呼と曰ふ。鬼道に事へ、能く衆を惑わす。」などの記事があり、三世紀前半の日本について、邪馬台国と女王卑弥呼のもとに三〇国の小国家があり、邪馬台国に至るまでの里程と各国の戸数・男女の服装・食物・住居・社会組織・信仰と宗教・産業・動物・武器などについて説明されている。

さらに、「景初三年（二三九）六月、倭の女王、太夫難升米等を遣わし、郡に詣り、天子に詣りて朝獻せんことを求む」・「卑弥呼以て死す、大いに冢を作る。径百余歩、徇葬する者、奴婢百余人。更に男王を立てしも国中服せず、更に相誅殺し、当時千余人を殺す。復た卑弥呼の宗女壹与年十三なるを立てて王と為し、國中遂に定まる」などの記事がみえている。芦屋では会下山の人々が集落を営んでいた時期のことである。

弥生時代の後期は、部族国家的なものが対立・分立をくりかえし、やがて大きく統合されていった時期であり、三世紀前半の日本の状況を記述した唯一の歴史書なのである。

邪馬台国の所在地については早くから学界に諸説があり畿内説・九州説などの論がいろいろの角度から論議されているが、いまだに定説と認められるものはない。しかし近時の考古学上の知見によって大規模な弥生遺跡と大規模な古墳が密度高く存在している地域の中に、そのような中心的な部族国家を想定することは可能なのである。この点から、最近では考古学の提供する資料をもとにして、畿内説と北九州説が改めて唱えられているが、なお決定的な決め手はないというのが現状である。

記事のなかに、「鬼道に事え、能く衆を惑わす」とあって、卑弥呼なる女王は司祭的性格の強い巫女的な存在

であったことが書かれており、また「大いに冢つかを作る」とあって、広大な墓所を築造したことが記されている。冢とは古墳のことであろうか。弥生時代の墳墓には、このような記事に概当する墓棺は存在しないのである。弥生時代は壺棺・甕棺・箱式棺・土壙・木棺・方形周溝墓などの形式の墳墓が営まれた段階にあったことが知られている。芦屋市の近辺では、尼崎市の田能や池田市の宮之前や京都府の乙訓寺おとくにら（長岡京址）でみられる方形周溝墓的なものが、弥生墳墓と古墳の過渡的な墓制と考える説が多い。

盛り土をして封土とし遺骸埋葬のための施設をもった墳墓が発生し、ついで高度な土木技術とぼう大な労働力をもつて大規模な高塚たかづか式古墳が営まれるようになるのは四世紀からであり五世紀を頂点として七世紀におよぶこの形態の墳墓すなわち古墳の盛行発展の時代は、まさに大和に統一政権がうまれ、動揺し、確立していく時期であり、各地に古墳を築造しうる強力な権力者が出現した時期である。

高句麗こうくりの好太王こうたおう（広開土王こうかいしおう）の碑文には、三九一年以来、度々の日本軍の朝鮮半島進出の記事がみえており、半島における日本の根拠地となった任那みやな日本府が、弁韓べんわんの地に設けられたのは三六九年のことである。天理市の東大寺山古墳からは後漢末の「中平（一八四年〜一八九年）」の年号を含む金象嵌銘をもつ太刀が発見されているし、天理市の石上神宮いそのかみに伝えられる七支刀ななつあざのたちには三六九年に百済王くだらが倭王のために造ったという銘文がしるされている。これらの点からも、四世紀の中頃までには大和朝廷が成立していたと考えられているのである。山の辺やまのへの道・三輪山みわやまを中心とした崇神陵を代表とする陵墓群（三輪王朝）、南河内の応神陵から和泉の仁徳陵に至る陵墓群（難波王朝）など、近畿に大和朝廷の存在したことを説明しうる遺跡が並んでいる。

宋書倭国伝の倭王武（雄略天皇）の上表文（四七八年）をみると、「昔より祖稱（父祖のこと）躬ら甲冑を撰き、山川を跋涉し、寧所に違あらず（やすんずるに暇がない）、東は毛人（蝦夷のこと）を征すること五十五国、西は衆夷（熊襲のこと）を服すること六十六国、渡りて海北（朝鮮半島のこと）を平ぐること九十五国」とあって、大和朝廷の成立過程と群小国家の統合を記し、中国の南朝に対して、使持節都督倭・百濟・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事・安東大將軍・倭国王という称号を希望し、朝鮮半島における優位権の保証を請願している。成立時の大和朝廷の姿勢を知る手掛りにはなる。

このような古代社会の支配者たちの勢力消長に応じて変化する古墳の規模・形態によって、三世紀末から七世紀にいたる時期を前期（三世紀末―四世紀後半頃）・中期（四世紀末―五世紀）・後期（六世紀以降）の三期に分けることができる。

前期の古墳は、円墳・前方後円墳という墳形をもち、竪穴式石室や棺槨をもち、宝器的性格をもつ鏡・剣・玉と武器・鉄工具類を副葬している古墳が多い。

中期の古墳は、広大な前方後円墳を出現させ、竪穴式の棺槨や石室をもち、形象埴輪や円筒埴輪で封土をかざり、石棺を用いるものもあり、鏡・剣・玉・武器・鉄工具類のほかに須恵器や土師器という当時の土器を副葬している。

後期の古墳には円墳・方型墳・横穴式土壙墳・竪穴式土壙墳など種々あるが、横穴式石室に封土を盛った円墳が多く、単独墳で巨大な石室をもつものや、群集墳を構成する地域など種々に分れる。木棺が普通であるが、家

形石棺のほか陶棺とうかんもつくられ、工芸的装身具類と馬具類の副葬品が目立ち、須恵器・土師器など土器の副葬量も多くなるのが普通で、火葬墳も出現するようになる。

前期の古墳と周辺の遺跡

前期の古墳は全国的にみても近畿に集中して遺存しているが、その数は多くなく、はじめからやたらに築造されたものではないことを示している。前期古墳というのは、おそらく日本の統一を實現させた大和朝廷との間に、何らかの結びつきをもつ首長的支配者の墳墓であることが推測され、被葬者と大和朝廷との間の密接な政治的関係を暗示している。おそらく、弥生後期以来の首長層が、統一国家の出現にあたって、その協力者としての地位を保証された結果の産物であろう。

政治的権力者であった前期古墳の被葬者たちは、一族の間では司祭者であり、軍事上の統率者でもあった。一族の長が司祭者であったことは弥生時代以来の伝統であるが、富と権力が飛躍的に拡大し、より軍事的性格を濃厚にしたものであった。それは宝器としての鏡・剣・玉のほかに、鉄刀・鉄剣・鉄鏃・弓矢など、弥生時代とは比較にならぬ程の、おびただしい鉄製武器が副葬されていることから推測される。

かれらは、国内が統一されていく過程において、みずから武器をとり、指揮をして、大和朝廷の統一事業に積極的に参加したことであろう。このようにして、古墳の発生は、畿内を中心とした統一政権の誕生を意味するとともに、その伝播と普及は、統一政権の地域的拡大の過程を示している。

前期古墳の形式は堅穴式石室をもつ円墳か前方後円墳を代表とする。その規模は、まちまちであるが、大和盆地の東部・北部には全長二〇〇メートルをこす前方後円墳が集中している。大陸の墓制をまねて徐々に規模を大

大きくしていったというよりは、はじめから日本独自の形式をもった前方後円墳という大規模な墳墓をつくり、それが勢力範囲の拡大とともに他地方に波及したと考えられている。

摂津の地域では、前期古墳は、弥生後期の集落があつた地域に比較的多いことから、弥生時代の首長層が、そのまま古墳時代の権力者へと成長していったことを推測することができる。

四世紀の築造と考えられている芦屋周辺の古墳には、

神戸市東灘区本山町・扁保曾塚古墳
池田市・茶臼山古墳

神戸市〃住吉町・求女塚古墳
尼崎市塚口・池田山古墳

神戸市〃御影町・処女塚古墳
尼崎市下坂部・伊居太古墳

宝塚市雲雀丘・万籟山古墳

などがある。万籟山古墳は堅穴式石室が遺存しているし、扁保曾塚からは、勾玉・管玉・石釧とともに四種の銅鏡が発掘されている。

芦屋市内には、この時期に概当すると考えられる明確な墳墓はのこされていない。阪神電車の路線敷設工事や阪神国道の敷設工事の際に、埴輪円筒が出土したという伝承がある程度で、打出の地域に、あるいはこの時期の古墳が存在した可能性が考えられる程度である。

四世紀以後に三輪王朝であれ難波王朝であれ、大和朝廷が成立したことは確実であり、その古代国家胎動期の舞台は大阪湾沿岸であつた可能性がつよく、この点では、芦屋市をはじめ阪神間の地域は、何等かの形で関与し

ていたことが推測されるので、遺跡はなくとも無関係ではなかったということは認定できることである。

中期の古墳と周辺の遺跡

五世紀にはいると、大和朝廷の安定期が出現したらしく、河内や和泉の平野には、全長四八メートル、後円部径二四五メートル、後円部の高さ三四・六メートル、前方部幅三〇五メートル、さらにまわりを三重の埴ほがめぐるとい世界一の規模をもつ仁徳天皇陵をはじめ、全長四〇〇メートルをこす大古墳がみられるようになる。古墳の遺存例も前期より多くなり、いままで前期古墳の存在しなかった地域にも分布がみられるようになる。

中期古墳の大きさからは、その地域の共同体の大きさと首長層の権力の度合を推察することも可能である。中期の時代には、中央の有力者・地方の実力者を問わず、大和朝廷との関係にに応じて、大規模な前方後円墳が数多く築造された結果、古墳時代の盛期を画することになった。

古墳の規模や副葬品からみた場合、四世紀から五世紀の時代は大和朝廷の權威の絶頂期が出現したことを推測することができる。

中期古墳には堅穴式石室を省略して、直接に木棺をおさめ、この木棺を粘土で包んだ粘土槨と、木棺のかわりに長持形石棺や箱式石棺を用いたものも普及している。古墳の周囲の封土内には埴輪円筒を幾重にもめぐらせて土どめや装飾としたものもあるし、封土の中央部に家・鬘さしほ・衣笠きぬがさなどを形どった形象埴輪を中心に、盛装した男女・巫女・楽人・動物などの埴輪をならべ、まるで葬列か大嘗祭おこなめまつりの儀式を再現させているようにもみえる配列を示すものもある。棺内には盛装した遺体を中心に、生前の富と権力を示すにふさわしい愛好品の数々と祭器が収

められているのが普通であるが、鉄製品が増えている。鉄製武器と鉄製品の増加は極めて顕著で、当時の日本国内の産出量だけでは需要をまかないきれなかったかも知れないほどである。南朝鮮への進出は、鉄資源の獲得と先進技術の導入を目的としていたと考えられている。半島における優位性の確立によって、阿直岐・王仁・阿知使主・弓月君などの帰化人が渡来し、その特殊技術と学問で大和朝廷に奉仕したことは古事記・日本書紀の記事の示すところでもある。

熊本県船山古墳の太刀銘に見る紀年は四三八年と推定されているが、多遅比瑞齒別尊（反正天皇）の時につけられたことを記しており、文字が使用される時代に入っていたことを示している。

太占・みそぎ・祓・盟神探湯などを主とする呪術的風習や、祈年祭・神嘗祭などの農耕儀礼も生れ、農業神や祖先神の崇拜が行なわれるようになる時代である。芦屋市内に遺存する古墳はこの時期以後のものである。

芦屋市近辺のこの時代の古墳は、神戸市の五色塚古墳（全長二〇メートル）を代表とする。河内・和泉には及ばないが、この地方では最大のもので、多量の葺石でおおい埴輪円筒をめぐらせた壮大な前方後円墳である。

尼崎市には水堂古墳がある。全長約六〇メートルと推定される小規模なものであるが、発掘調査が行われた中期古墳として阪神間では唯一のものであるので、明らかにせられたその内容と構造を記しておこう。

水堂古墳は弥生後期の住居址の上に営まれた南面する前方後円墳で、棺台には粘土床を用い、朱（水銀朱）を敷き、その上に割竹形のヒノキ材を削りぬいた木棺身をおいて砂質土で固定し、朱塗りの棺蓋を粘土で固定し、棺身・棺蓋の両端を止板で閉じて粘土を捲くという工法で築成され、粘土槨の下は砂質土で排水にあてていた。

棺内出土の遺物では、鉄槍てつそう（柄の部分は中空で長さ七〇センチ）・短劍一・直刀二・短刀二がそれぞれ柄の木質部および包んであった布地をのこし、柄は漆塗りであった痕跡をとどめていた。さらに、柄部の木質をのこした鉄鑿たがね・袋部に柄の木質をのこした鍛造の鉄斧・ヤリガンナを主とする一〇余点の鉄工具類があり、胡籙ころうも発見された。胡籙は騎馬の者が腰にさげて矢を入れる道具であり、布製の矢筒には鉄鑿が充満しており、この胡籙の大きさは、長さ五〇センチ・径一五センチであった。このほか、径二三センチの麻布にまいた舶載鏡が発見された。遺体の頭部直上におかれ、三角縁神獸鏡とよばれる形式で三神四獸のまわりに銘文帯があり「吾作明竟甚大巧上有□有□□為青竜日出明竟」としてある。現在では同範鏡はみつかっていない。櫛は竹製で漆塗りであった。さらに、尼崎市には埴輪円筒を伴う南清水の大塚山古墳（前方後円墳）、組合せ式箱式石棺を追葬した御園古墳などがあり、伊丹市には御願塚ごがづか（前方後円墳）などがある。

一方、この時代には尼崎市若王寺や下坂部には大集落址が存在しており、若王寺は製鉄を行った大集落で、東西五〇メートル・南北一五〇メートルの規模で集落遺構が密集していた。住居は平地式と高床式で、各種の井戸もあり、多量の鉄器と鉄滓及びブイゴが作業場から検出されている。

下坂部は祭祀場をもつ遺跡で、弥生時代の倉庫の扉を利用して枠を設けた泉や滑石製の勾玉まがたまなどのほか、径一メートル余の須恵器の大水甕も出土している。

芦屋市内の中期古墳 芦屋市内には、この時代になって墳形を保つ古墳が遺存する。打出春日町の金津山古墳と打出翠ヶ丘町の親王塚古墳などである。

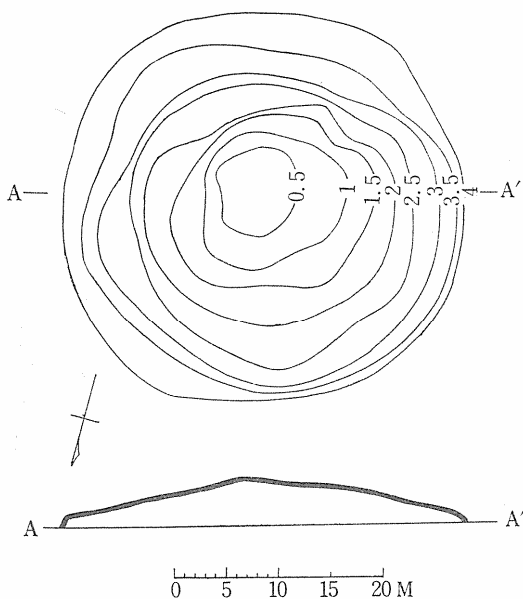


図86 金津山実測図

《金津山古墳》

金津山古墳は打出春日町一五三番地に所在する平地の墳丘である。現状では、径四四メートル、高さ四・一メートルの円墳の形状であるが、墳丘上に立ってみると、かなりの変動をうけた地形で、東面する前方後円墳であった可能性も考えられる墳形である。旧中国街道の北に接した位置にあり、今日では阪神電車打出駅から東北へ一〇〇メートルという市街地であるため、徐々に原形が変えられた可能性がたよい。撰津名所図会（寛政八年・一七九六）をみると、絵図に打出浜・阿保親王墳・親王寺・金津山の光景がえがかれ、金津山は本街道の北に接して松樹の繋る墳丘としてえがかれており、そのまわりには小径がめぐらされている。あるいは周漚のあった跡かも知れないのである。本街道に近い関係もあって、江戸時代にも旧跡として認識されていたことだけは明らかである。本文の記事をみると「金津山 打出村の西端に一堆の冢丘あり、これをいふ。土人口称伝、むかし阿保親王此地に殿舎ありし時、黄金千枚、金瓦万



図87 金津山古墳（北方より・昭和29年写）

枚を此の家の中に埋め置きて、此の里人飢渴に及ぶ時、これを掘出して五穀に交易して飢を凌ぐべしとなり。此所の牧童今に歌諷う。

其言に云、朝日さす入日かがやく此の下にこがね千枚瓦万枚

按ずるに親王の御領にして別荘も此地にありしか、此の辺の字に御所ノ内・堂ノ上といふ所あり」と記されている。

このように黄金を埋蔵するといふ説話は、古墳について語り伝えられる類例の多い説話の一つであり、近くの宝塚古墳や猪名寺などにも同じような伝承が伝えられ、猪名寺の場合は歌まですべて金津山とほとんど違わぬ伝承記録がある。

金津山古墳はこの共通の説話を阿保親王（平城天皇の皇子・在原業平の父）に結びつけたもので、親王寺の縁起にも同じことが記されているが、もとより事実を伝えたものとは認定しがたい。当古墳が金塚とか黄金塚とか通称されているのも、この伝説によるものと考えられる。墳丘上には明治初年までは厳島神社の石祠があつたらしいが、現在は天神社内に移されている。

現状は市街地中央という場所がら、周囲の開発や住宅建築によつ

て周辺部は密集する住宅地となり、四四メートルの墳丘部だけが辛うじて遺存している状況である。

しかし発掘品や出土品についての伝承は全くなく、表面観察の結果でも、葺石や埴輪の存在は認められない。古墳としての積極的な資料は何も検出されていないことも付記しておきたい。現在の荒廃した外形からだけで本墳の性格を判断することはさけるべきであり、後日の発掘調査によって正確な内容と遺構と時代を明らかにすべきものである。



図88 阿保親王墓実測図（宮内庁書陵部提供）

《親王塚古墳》

親王塚古墳は打出翠ヶ丘町にあり「阿保親王墓」として宮内庁書陵部に管理されている。摂津地域の地誌では最も古く、かつ、すぐれた書とされている摂津志（並河誠所・享保十九年・一七三四）をみると、「阿保親王墓 征ニ打出村」四畔有二家六こと記されている。この記事をうけて書かれたと思われる摂津名所図絵には、阿保親王墓の条に「側に小家六つあり」と記している。この記事によって、享保の頃には、阿保親王墓と称される古墳のほかに、周辺には六基の古墳があったことが認定されるが、現在は阿保親王墓だけが

遺存しているにすぎない。山口県文書館の保管する毛利文庫記録目録五の中の、絵図五には、「兵庫阿保親王御廟所図」・「兵庫阿保親王御墓所図」・「兵庫打出村阿保親王御墓之図」・「兵庫打出村絵図」・「兵庫打出村坪割図」などの絵図があり、そのほか「阿保親王御廟詮議」・「阿保親王事取集」・「在原系譜引書」・「阿保親王竹園伝記」などの記録が保存されている。これは毛別家が阿保親王の後嗣であるというところから、特別に江戸時代を通じて親王墓を保護してきたためである。藩政改革で有名な村田清風も藩命をうけて調査にきており、その所見は「阿保親王事蹟詮議」として「村田清風全集」にも録されている。

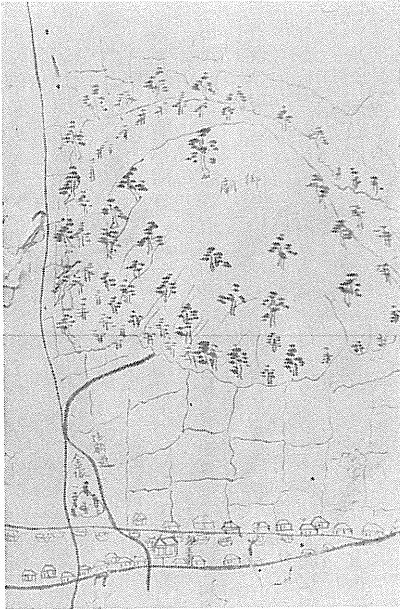


図89 阿保親王墓の図（「阿保親王事蹟詮議」所載）（山口県文書館所蔵毛利家文書）

この毛利家文書をみると、阿保親王墳の周りには周湟がめぐらされ、見方によっては西面する前方後円墳のような絵にもみられ、親王墓の東方に「四ツ墓」と称して、四基の古墳がえがかれている。したがって、幕末の頃にも、四基の古墳が遺存していたことを知ることができ、地図の上にも場所を想定することも可能である。

現状は阿保親王墓として、陵墓にふさわしい外観を呈しているが、宮内庁書陵部の実測図によると、周囲三五メートル、方形を呈した区画内に、径三六メートル、高さ三メートルの円

墳状に測量されている。伝承では墳丘のすそから埴輪円筒を採取した者がある由であり、中期の古墳と認定して差支えがないと考えられている。

《親王塚出土遺物》

親王塚古墳の南方一キロ、打出南宮町に阿保親王の菩提寺として建立されたと伝える親王寺があり、元祿四年（一六九一）阿保親王八五〇回忌にあたり毛利綱元が墓域を改修した際に発見されたと伝える鏡四面と石製帶飾具五個が保存されている。

しかし、毛利家文書によつて考証すると、鏡は七面が親王塚から発見され、石帶五個は御廟の傍の四つの塚の内の一つから発見されたことが知られ、その発見は宝永年間（一七〇四～一七一）のことであることが明らかである。したがつて、鏡と石帶は全く別のものであり、むしろ遺物からみれば、この石帶を出土した塚が、時代的には阿保親王墓と関連するものであらうと考えられている。

毛利家文書には七面の鏡を出土したと記され、そのうち三面の図もえがかれているが、現在親王寺に存するのは左記の完形品二面と破片二面である。

イ、三角縁神獸鏡 一面

径二一・三センチ、縁の高さ九ミリ、面には一・五センチの反りがある。全体に白緑色を呈しているが、一部に群青色の鍔がみられ、朱が付着している。鏡の背面の内区に面かれた図様は、六個の縝形座乳をおき、その間に神像と獸像を交互に配し、そのうちの一つは怪獸のかわりに亀の上に山形状の博山爐をおくもので、通

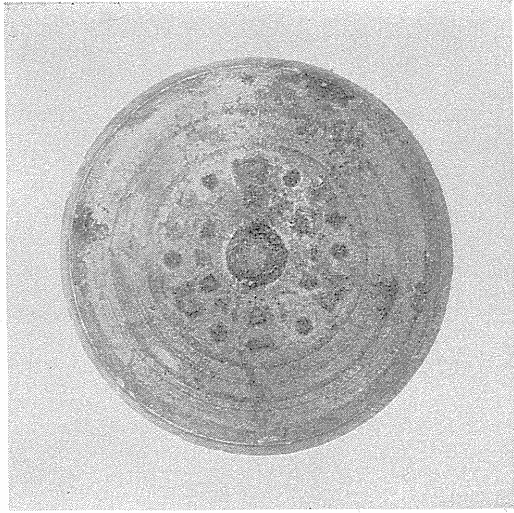


図90 親王塚出土 三角縁神獸鏡（親王寺所蔵）

常、三神二獸博山爐鏡と呼ばれているものである。銘文帯にあたるには複線波文をえがき、三角縁に至るまでの間に、櫛齒文・鋸齒文・複線波文・鋸齒文帯が配されている。

口、三角縁神獸鏡 残闕間二片 一面分

外区と周縁の一部を残している約半円分の残片が保存されている。推定径は二一・八センチ、三角縁の高さは一センチである。内区を欠いているので図様形式は分らないが、残存部分からみて、三角縁神獸鏡の一部と推定されている。

ハ、鏡残闕 一片 一面分

わずかに周縁の一部をのこすのみであるが、三角縁に接する外端の鋸齒文帯が内向であるので、それが外向する口とは異なっている。推定径は二二・一センチ、三角縁の高さは九ミリをはかる。

二、内行花文鏡 一面 親王寺蔵

内区の部分が破砕して、一部欠失しているため、紐を含か一部が分離している。径一六・三センチで、縁は平縁である。鉛黒色を呈した良質の白銅鏡で、背面の図形は八葉の内行花文である。一時は、親王塚出土の遺物

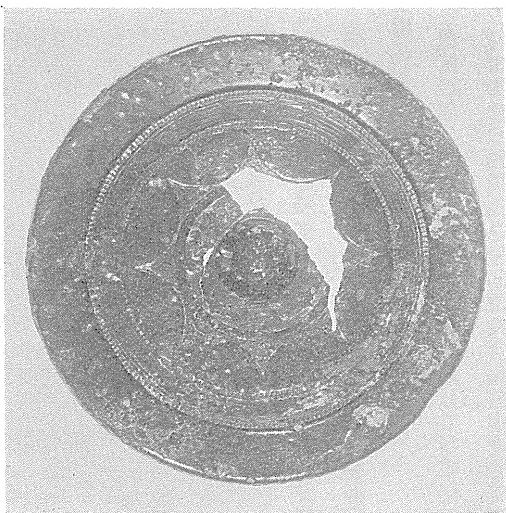


図91 親王塚出土 内行花文鏡（親王寺所蔵）

とは異なるものであると考えられたことがあるが、毛利家の記録に記載されている内行花文鏡の図と合致するので、やはり親王塚出土の鏡の内の一面と認定されることになったものである。

毛利家文書の鏡の図のうちに記されている「陳孝然作竟」という銘のある鏡は親王寺に伝わらず、摂津菟原郡住吉の吉田家の蔵品となり、いまは所蔵者をかえている。

魚帯文四神二獸博山爐鏡 一面（巻頭図版第15）

径二一・四センチ、縁の高さ一・一センチ、三ミリの面反りをもっており、背面の図様形式は円銃座をめぐって

四魚をおき、内区に八個の円座乳と、その間に一つおきに四神と怪獣二と山形状の博山爐の図形を配し、空間を唐草文と鳳凰文とて埋めている。そして乳の外側の博山爐をはさむ二神像の間に「陳孝然作竟」と五字の銘文を鑄出している。銘帯にあたるところは復線波文とその両側に珠文をおく帯をめぐらせ、その外側に櫛齒文・鋸齒文・波文などの帯をめぐらせている。いわゆる魚帯文四神二獸博山爐鏡といわれるもので、三角縁の内側に鋸齒文をあらわしているのが特色である。白銅質であるが、一部白緑色を呈し、群青と緑の錆がみら

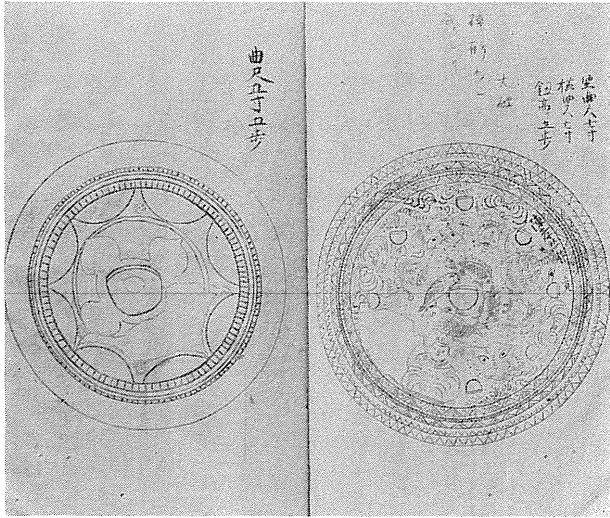


図92 内行花文鏡と三角縁神獸鏡の図（「阿保親王事蹟詮議」所載）（山口県文書館所蔵毛利家文書）

れ、朱を付着させている。鑄上りは鮮明で、背文図形も整美な形を示している。

この鏡には付箋がつけられていて、「六朝八乳四神鑑・撰津菟原郡打出村阿保親王傍得之」とあり、毛利家文書の記事と一致する。吉田家が家蔵の古器物類の図録を「聆濤閣帖」と名付けて刊行した際、本鏡の拓影をおさめたがその傍書に「撰津菟原郡打出村鑿土所得鏡十枚之内」とあるのは注意すべきで、宝永年間の発掘の際には一〇面の鏡が採取されたことになる。その後毛利家が調査した文政年間には七面の鏡が親王寺に保存されていたということであろうか。一〇面の鏡があったとすれば、他の五面が目下行方不明ということになる。

これらの遺物から、中期古墳に多い鏡であることが分るとともに、打出近辺が古墳時代の前・中期における首長層の所在地域と推定されるわけである。

《その他の遺跡》

親王塚周辺には、群集墳に近い状況で古墳が築造されていたらしい。現在では、その痕跡もないが、後期古墳の形式ではなさそうなので、一応伝承にもとづいて記録しておく。

イ、うの塚 打出桶町三番地

阪神国道と国鉄線路の間にあり、現在は翠ヶ丘小学校の敷地となっている。もと円墳であつたらしいが、校舎建築のために一部を破壊されて旧形を失った。

ロ、こしがいつか 筭塚 打出桶町八番地

うの塚の西五〇〇メートルの地にある。いまは個人の庭園の一部となっている。南北に長い楕円形の墳丘の形をのこしており、南北二七メートル、東西一三メートル、高さ二メートルの規模でのこされている。もとは三〇メートル以上の径をもつ円墳であつたものが、東西から漸次に封土を削りとられて一部をのこしているにすぎなくなつたものらしい。筭塚の名は、阿保親王が所持されていた筭を埋めたという伝説によるもので、墳丘上には「筭塚」の二字を刻した石碑が建てられている。

ハ、鞍塚 打出小槌町三九番地

金津山古墳の西北二五〇メートルに所在する。現在は墳址の地に不動尊をまつる小堂が建てられている。墳丘は全く形跡をとどめず、小字名にその名を止めるにすぎない。阿保親王の鞍を埋めたという伝説にもとづいて名付けられた墳名である。

二、宮塚 宮塚町五六番地

鞍塚の西方約三〇〇メートルの地である。ここも小字に墳丘の存在したことを伝えているのみであるが、かつては、円形の墳丘があり、墳丘上には一本の梅檀せんだんの木が檀えられていたといわれている。

ホ、牛廻し塚 打出楠町四七番地

金津山古墳の北約三〇〇メートルである。山の神ともいわれ、墳丘上に石祠があつて、むかしは端午の節句の日に、農家はその家の耕牛を飾つて、この祠ほこに詣で、牛廻人に託して、牛をひいて祠を三周してもらう風習があつたのでこの名がおこつたと伝えている。尼崎市の武庫荘遺跡も小字を牛廻しといい、同じ伝説を伝えている。阪神間に共通の信仰があつたらしい。

へ、大藪小藪塚 打出南宮町一番地

金津山古墳の西三〇〇メートルにあたる。大藪小藪と称する女竹の密生した墳址があつたといわれ、阪神電車の線路敷設の際に取りこわされて、現在は伝承を伝えるのみである。

ト、打出天神社北古墳址 打出小槌町

田地の平坦部に存在したといわれ、円筒埴輪が出土したことが伝えられている。

以上の古諸墳址は、地名や伝承によつて遺跡の位置を知り得る程度のものであつて、遺構はほとんど残されておらず、また破壊された際の、遺物の出土に関する伝承もない共通点をもっている。したがつて原形はもとより元来古墳であつたかどうかということも明らかでない。しかし、横穴式石室の場合であると、石材の一部がのこされ、それによつて人々の認知するところとなる筈であるが、そのようなことについての伝承もなく、また位置が

金津山や親王塚と同じ地域に集中されていることから、同時期の古墳と推定することが可能と思われるのである。

後期の古墳と周辺の遺跡

六世紀にはいると、全国各地に小規模な古墳が数多く、また群集して出現するようになる。ほとんどが円墳の形式をとっているが、上円下方墳や方形墳も存在する。内部構造は入口部の羨道と奥室の玄室をもつ石組の横穴式石室が主であり、若干ながら粘土槨や土壙や横穴形式のものも存在している。遺体を収める棺は木棺が主であるが、家形石棺を用いたり、石室内部を装飾したりする例もみられる。なかには横穴式石室と埴輪をそなえた前方後円墳も存在し、多種多様の形式がみられる時期でもある。

この時代には氏姓制度によって統制された強力な中央集権の官僚組織ができており、さらに帰化人たちのもたらした農業技術・養蚕・機織・鍛冶・酒造・陶器造・建築・造船・絵画などの工芸技術や、仏教・儒教などの宗教、また文字の使用などによって、いちじるしく社会が進展していたのである。

後期古墳には日常生活用具とともに儀式用器物も副葬されている。文字の伝来などとともに精神生活の上においても進歩がみられ、死後の世界というものについても何等かの信仰が発生していたのかも知れない。古事記に出てくる黄泉の国におけるイザナギ・イザナミノミコトの神話伝承は、横穴式石室のことを語ったものとも考えられているのである。

後期古墳からは工芸的装身具にすぐれたものが発見される。明らかに大陸・朝鮮半島渡来と考えられる金銀製の装飾品・服飾品には豪華なものがあって、特権階級の豪華の一端を知ることができる。

また馬具関係の遺物が多いことも特色の一つである。大陸では古くから車馬が交通上の必需品として発達して

いるが、日本では地形の制約をうけたためか、水上交通路が主となっていて、車馬の利用はおくれていたようである。これが、後期の時代になって乗馬の風が盛行することになったらしい。

住居も家屋文鏡や家形埴輪や風土記などから推測すると、一般には弥生時代以来の堅穴式住居が用いられていたらしいが、支配者層は大規模な構造の堅穴式・平地式・高床式の住居をつくり、時には二階建ての家屋もつくられていたらしい。尼崎市の若王寺遺跡なごうじなどでも明らかに礎板そばんをもった掘立柱の高床式住居が大規模に営まれていた形跡がのこされている。

民家の構造は弥生時代以来ほとんど変化がみられないが、農業神や祖先神の崇拜がはじまると、伊勢神宮や出雲大社や大神神社おみや住吉大社などのような神社建築も出現したらしく、片袖式の横穴式石室などは、その平面構造は出雲大社の平面構造と類似している。当時の宮殿建築の様式と関連部あるのかも知れない。

後期古墳には規模の大きな古墳を中心に、小規模な古墳が群集して群集墳を形成し、一定の墓地域を出現させている地区と、旧来どおりの独立墳を出現させている地区とがある。平地には独立墳が多く、山麓線・丘陵上に群集墳が多いようである。

有力な豪族の支配圏を単位として、一族の墓群が形成されていることには間違いないが、前期・中期古墳のように、古墳築造に制約をうけた時代ではなく、いわば古墳築造によって權威の象徴とした時代から、權威の象徴よりも後代の先祖代々の墓地的觀念へと変化を生じてきた時代でもあったらしい。權威は氏姓制度の社会によって、朝廷から保障されていたのである。これが、家父長的個人墓や家族墓的性格の強い群集墳を生み出したよう

で、披葬者の個々の富と権力と階級の差が、古墳の規模や副葬品に明瞭にみられるのである。土師氏はじを代表とする特殊な古墳築造技術者の手によらなくても、各地域で特色ある古墳を出現させるようになる。

仏教思想が普及してくる六世紀後半に入ると、火葬墳を出現させたり、七世紀に入って古墳築造の風潮が下火となってくると、従来の古墳に追葬をおこなうようになり、新しい古墳の築造はなくなっていく。このようにして古墳時代は終末をつけることになる。ただし、この時期においても、飛鳥あすかの石舞台古墳いしがたいのように巨大な石室墳を築造することはあったのである。阪神間の後期古墳は芦屋市内に典型的な遺構をのこしている。

摂津の地域だけを取上げても、数十から二〇〇基におよぶ群集墳を遺存する地域が各地にみられるが、近辺の代表的な後期古墳を記しておこう。

西方では神戸市東灘区本山町を中心として、坂下町に及ぶ岡本古墳群があり、東方では西宮市の上ヶ原地区・五ヶ山地区・苦楽園地区の古墳群、宝塚市から川西市にいたる二〇〇基余の長尾山―雲雀丘古墳群、豊中市の宮山地区・太古塚地区・野畑地区の群集墳などが著名なものである。

しかし、最も典型的な後期群集墳を遺存しているのは芦屋市内なのである。八十塚古墳群・三条古墳群・朝日ヶ丘古墳群・剣谷古墳群・城山古墳群などがそれである。

一方、独立墳で、みるべきものも若干ある。芦屋市内の芦屋神社境内古墳・宝塚市の中山寺境内古墳・川西市の火打古墳、そして近辺では最大の独立墳である池田市の五所神社境内にある鉢塚古墳などがそれである。

芦屋市内の後期古墳

前述のとおり芦屋市内には後期古墳を特色づける群集墳の典型的な遺構が存する。こ

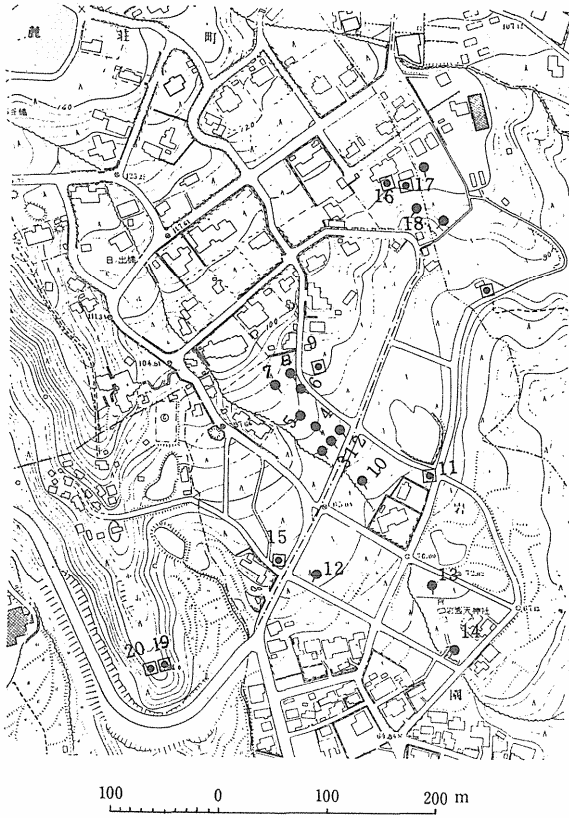


図93 八十塚古墳群・朝日ヶ丘古墳群位置図

● 古墳 □ 破損が大きい古墳

- | | | |
|----|---------|-----|
| 1 | 八十塚古墳群 | A号墳 |
| 2 | 〃 | B号墳 |
| 3 | 〃 | C号墳 |
| 4 | 〃 | D号墳 |
| 5 | 〃 | E号墳 |
| 19 | 朝日ヶ丘古墳群 | 1号墳 |
| 20 | 〃 | 2号墳 |

れらについて詳述しよう。

《八十塚古墳群》 芦屋市の六麓荘町と岩園町にわたる八十塚古墳群は、古墳時代後期の群集墳所在地として、阪神地方では早くより知られた遺跡である。この古墳群は六甲山塊の南面する丘陵上の標高六〇—一〇〇メートル

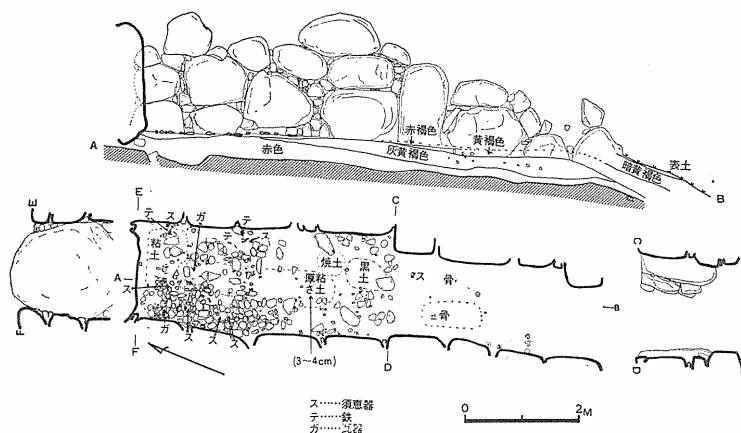


図94 八十塚古墳群A号墳実測図

の地域に散在し、西撰の平野を一望する見晴しのよい立地条件をもっている。

既に享保年間の撰津志に「打出村西、岩平山中有教冢、呼曰「八十冢」と記され、また、撰津名所図絵にも「八十塚、打出村の西岩平の山中にあり、数の多きより名とす」と記されていて、識者の間では墳墓の地ということが知られていたため、比較的よく遺存し得た古墳群である。

しかし、現存する古墳に関する限りでは、永い年月の間に封土を失って石室を露出したもの、地震その他の理由で石室の崩壊したもの、近世初頭の大坂城築城などで採石の厄にあつたものなど、完全な形で原形を保っているものは少ない。昭和のはじめには数一〇基の古墳が遺存していたといわれるが、現在では約二〇基の古墳が遺存しているにすぎない。

現在までにその内の四基について発掘調査が行なわれている。(芦屋市文化財報 告書第4・5集)

イ、八十塚古墳群 A号墳 墳墓の構築法は、まず、地山の赤

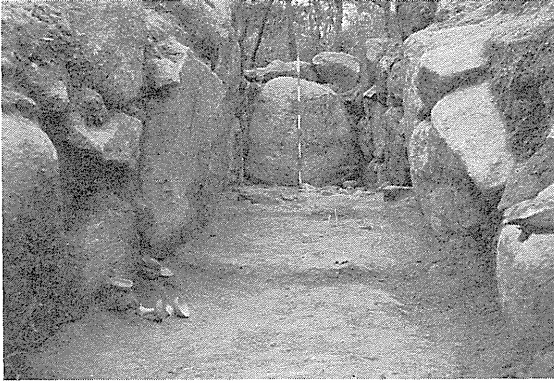


図95 八十塚古墳群 A号墳

褐色粘土質土層を平らに削り、その上に奥壁から順次に側壁を築き、根石ねいしの下には栗石も使用し、側壁の石の間には小割石をつめて持送ったようである。石室は幅一・七メートル、高さ二メートルの一枚石でできた奥壁を中心に、幅一・八メートル、長さ四・五メートルの玄室、幅一・五メートル、長さ三・七メートルの羨道をもった両袖式の横穴式石室墳で、側壁も奥壁に準じた大石が多く、大部分は自然石である。天井石がくずれ石室内に落込んでいたので完形ではないが、元来は、径一七―一八メートル、高さ三―四メートルの封土をもった円墳であったと推定され調査に当たって崩落した天井石をのぞき内部の状況をみると、玄室内には奥壁から赤土を敷きつめて一応平らな平面をつくり、赤土の足りない部分は灰黄褐色土と黄褐色土を順次に積んで平坦とし、この面に陶棺とうかん（須恵質）を主体とする埋葬がおこなわれたようである。埋葬された陶棺は二基であったと推定されている。

ところが、B号墳の築造された頃に、陶棺墓を片付けて、玄室内一面に敷石をおこない、さらに棺台の部分には薄く粘土をおいた木棺葬がおこなわれ、それも三体が追葬された可能性がよい。なぜならば、石敷の上の粘土層の所在と散布する鉄釘の状況によって奥壁に接して東西方向に一か所、玄室中央部に南北方向に一か所、羨道中央部

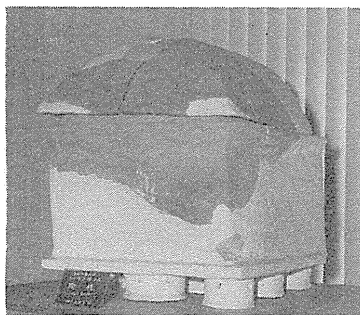


図96 陶棺（部分復原）
八十塚古墳群A号墳出土。

に南北方向に一か所を推定することができるからである。

とくに羨道中央部から袖部にかけての遺物はもつとも新しく、骨片も多く散布していた。このように追葬があることが、A号墳の内容上の特徴であるが、このような形式の追葬墳は六甲山系をはじめ、摂津の後期古墳の通例である。

第一次埋葬の痕跡を止める最下層出土の遺物には、陶棺と須恵器器台と甕・高坏・台行壺がある。とくに、陶棺は復原してみると、棺身は推定一七〇センチの長さ、五〇センチの高さで、外側の幅五九センチ、内側の幅四八センチ、厚さ二センチを測り、棺蓋は高さ二四センチ、外側の幅五七センチ、内側の幅四九センチ、厚さ一・五センチで、棺蓋の両端部に横八センチ、縦七センチの円形の孔があり、この孔に径一〇センチ、厚さ一・五センチの窓蓋がはめられている。脚は三列で一列に八個と推定されている。陶棺の質は須恵質のもろい焼成で、表面には刷毛目整形を、内面には叩き目痕をのこしている。二基分の破片が検出されている。

陶棺の発見例は近辺では豊中市・川西市・吹田市・大阪市・三田市にあるが、阪神間では唯一の例となっている。第二次埋葬と推定されている玄室中央部の粘土帯には、鉄釘・焼土・人骨・銀環・刀子・鉄剣・須恵器坏が発見された。

第三次埋葬の羨道部および袖部の遺物には瓦器の坏・鼎と人骨・銀環・鉄釘・刀子および・須恵器の高坏・埴

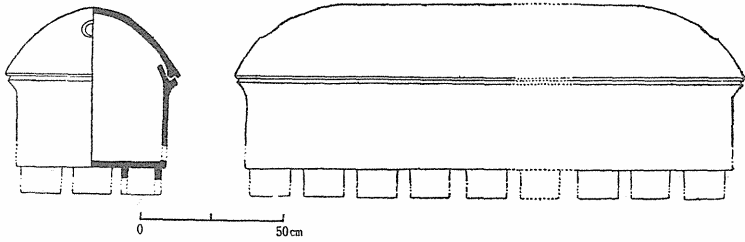


図97 八十塚A号墳出土陶棺復原図

・ 坏の蓋があり、銀環はすべて銅芯銀張りのものである。
A号墳検出の遺物は六世紀から七世紀にかけての時期のものとして認定されている。

□、八十塚古墳群 B号墳 B号墳はA号墳の東に接してつくられている。元来のA号墳の封土を削って造られたらしく、径約一五メートル、高さ三メートル以上の円墳であったと推定されている。

現状は石室の側石・天井石をことごとく抜きとられ、奥壁の一部と奥壁近くの東側の側石の一石が遺存するだけである。玄室・羨道部の痕跡も判然とせず、ほぼ全壊に等しい荒廃ぶりである。

八十塚古墳群は元来起伏の多い丘陵部に築造された構穴式石室墳であるため、南面する旧石室の土層を東西に切断して、土層面より遺構を追求してみた。この結果、東から西に緩傾斜する地山があり、この地山の赤土層を削平して石室を構築したことが判明した。

側壁部には根石として若干の栗石を入れ、その上に側石を積んだらしく、掘形が明瞭にのこされている。また、床面には石敷の部分があったかも知れず、部分的に砕石片が遺存していた。所見では側石の間を埋めた割石片と考えられている。

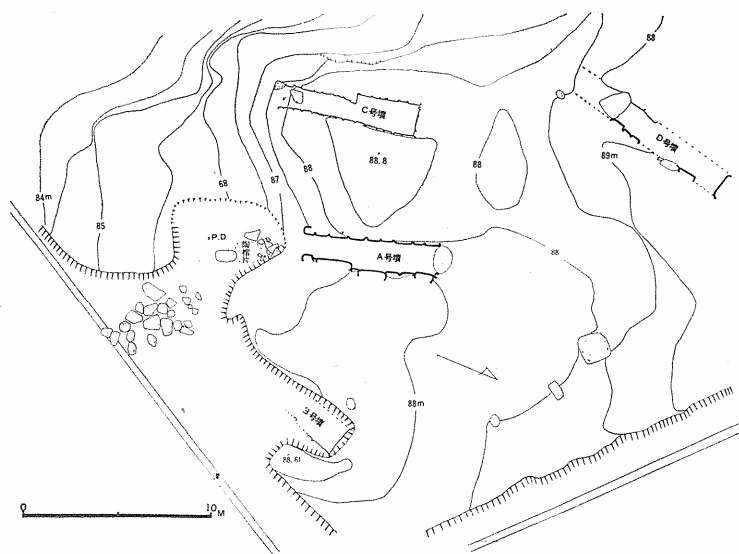


図98 八十塚古墳群遺構位置図

る。土層からは、まず石室を構築して、その上に何種類もの土を盛上げて封土を築いたことが明瞭に観察できる。石室は入口の南半部が切断されているので正確な規模は分らないが、奥壁の残石からみても、小口の石を積重ねており、A号墳のような大石を用いたものではなく、小石の割石を積上げた小規模の形式のものと推定されている。

現状から復原されるB号墳の規模は、玄室奥壁幅一・八メートル、現存石室の南北の長さは五・一メートルで、玄室の床面だけは一応遺存しており、羨道部に近いところで、約四五センチ平方の粘土敷があつて、その上に平石がおかれているので、地山の上に粘土をおいた粘土床の部分も存在したことが考えられる。部分的に中央部の南北方向に石敷様の残石がみられたが、排水溝の蓋石というようなものはなかった。

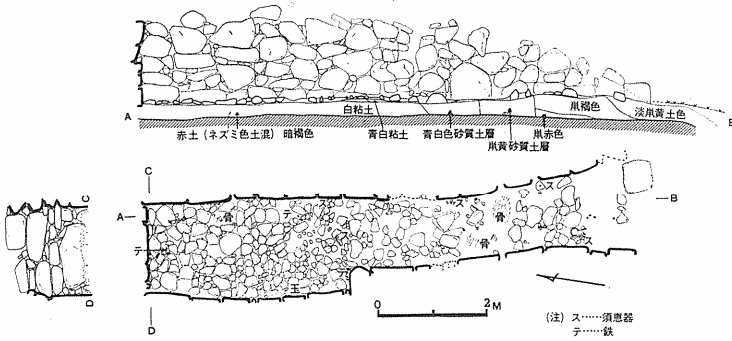


図99 八十塚古墳群 C号墳実測図

奥壁に近く、東に偏して、ガラス小玉五個が遺存し、この面上で、中央部に須恵器片・鉄釘・銅片が散布し、一遺体を埋葬した木棺内蔵墳であったことがわかった。

出土遺物は須恵器の坏身・坏蓋・高坏・提瓶・器台と、土師器片・銅芯銀巻の銀環・鉄釘・刀子などであった。また封土中からは、弥生時代のサヌカイト製打製石鏃と滑石製紡錘車が検出されている。B号墳遺物の主体は七世紀前半と認定されている。

ハ、八十塚古墳群 C号墳 C号墳は遺存状況は最も良好な古墳であるが、また、この地域のA、B、C、D号墳の中では最後に築造された可能性が大きい。

現状の封土の規模は、南北二〇メートル、東西は東に接するA号墳とかみあっているので約一二メートルの径をもち、封土の遺存は五メートルの高さをもっている。

C号墳は羨道部では一部天井石も遺存していたが、玄室部はすでに落下しており、石室側壁石のみが比較的旧状を保持して遺存していた。石室は小口の割石で築かれ、側壁や奥壁の間隙には小割石を挿入

し、断面では家形になるような形式で持送った構造であつたと推定されている。A号墳に比して著るしく小さな割石が使用されている点が特色である。

床面は大きさの不揃いな割石によつて石敷の床がつくられており、見事な石敷床が遺存している。右片袖の長い羨道部をもち、羨道は南方に開き、人口部には閉塞石の痕跡も残されていた。石室の現状規模は、全長九メートル、玄室の長さ三・七メートル、羨道の長さ五・三メートルと、羨道の方が玄室よりも長いのが特色である。

玄室奥壁部の幅は一・六メートル、玄室中央部の幅は一・八メートル、袖部の幅は一・六五メートルで、羨道部の幅は一・二メートル、羨道入口部は外反りしてそとむ広くなり、この部分の幅は一・七メートルを測るものであつた。床面の石敷は扁平な石ではなく、一〇―一五センチの厚さをもつ割石による石敷である。奥壁・側壁とも七段に積んだ持送り式の構造であつたと推定され、部分的には六段目までの石組みが遺存していた。これによつて、石室内部の高さは約二メートルであつたと推定されている。

石室の構築法は、まず赤土の地山を南北に扁平にならし、傾斜している南辺には四種類の土で盛土をして平坦面をつくり、その上に石室を築営し、玄室・羨道内に石敷きの床をつくりあげている。

遺物の出土状況は、奥壁部に人骨片・歯・飯環・鉄器があり、玄室袖部に接して、鉄器・銀環・須惠器・ガラス小玉があり、また羨道中央部に人骨・須惠器・銀環・土師器が検出された。このように人骨と各一對の銀環（耳飾り）からみて、三体の遺体が収められていたことが推定され、先ず奥壁部、ついで袖部、そして羨道部という順に追葬がおこなわれたことが判明した。

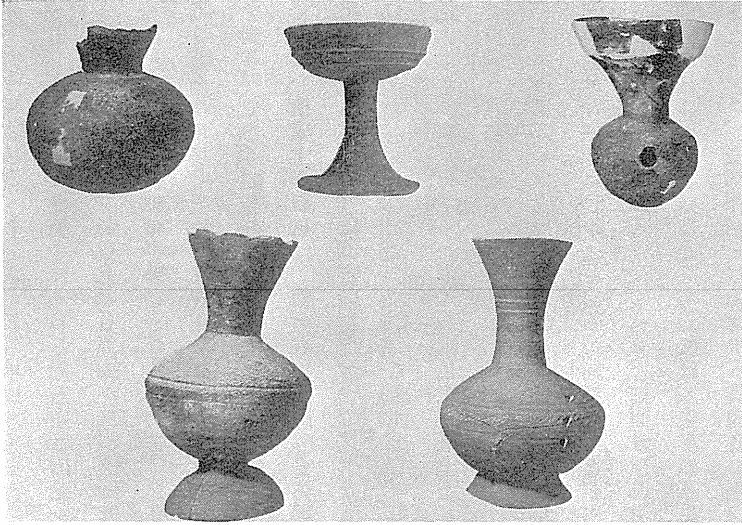


図100 八十塚古墳群出土須恵器
上段(左)壺(中)高坏(右)罍 下段 台付壺

群集墳においては、先祖代々とか一族とかいった墓地的性格がつよくみられる場合があり、追葬や合葬の例は珍しいことではないが、C号墳では、以前の遺体を片付けることなく、次々と追葬した例として珍しい事例となっている。

C号墳出土の遺物は、銀環（銅芯銀卷耳飾り）六、鉄釘・鉄刀・土師器はじきおよび須恵器の台付長頸壺・小埴つぼ・はぞう・坏の身と蓋・高坏・壺などが主要なものであり、何れも七世紀前半と認定されている。

二、八十塚古墳群 D号墳 D号墳は未調査の古墳である。封土の規模はA号墳に類似している。石室は羨道部の天井石が一部遺存している以外は、すべて天井石は落下しており、内部構造は明瞭ではない。外見上からの所見では、南面する横穴式石室墳で、両袖式の羨道部もあり、石室全長は約九メートル、玄室の幅は一・四メートルと推定されている。

ホ、八十塚古墳群 E号墳 E号墳は八十塚古墳群の中で、A、B、C、D号墳の上方部に位置し、標高約九〇メートルの地域に構築されている。石室は南北を主軸とする左片袖の横穴式石室で、南に開口している。

玄室は奥壁の中段から上の石が抜かれ、両側壁も中央部付近は相当の石抜きがなされているが、玄室の長さ三・五メートル、奥壁部の幅一・五メートル、玄室中央部の幅一・七メートル、羨道部の長さ三・四メートル、袖部の幅一メートル、羨道の中央部の幅一・四メートル、羨道部の高さ一・五メートル、玄室内の高さ二メートルを測り、やや外開きの羨道が南に開口している。

石室を構成する石材は、他の古墳と同じく花崗岩の割石を用いており、側壁の第一役目には比較的大型の石を用いているが、上方にいくにしたがつて、やや小型となり、積み方も乱雑となっている。

構築法は、地山面を平坦に削って床面とし、奥壁部より順次側壁を築き、羨道中央部から開口部にかけては、地山面が傾斜しているために黄褐色土を盛土としておき、地山床面と同一の高さにしている。側壁は内部に向けて持送り式の構造である。

玄室中央部から羨道部にかけて人骨片が散布し、銅環（鉄芯銅巻きの耳飾り）二と鉄釘、須恵器の坏の身と蓋・高坏・平瓶・器台および滑石製紡錘車ぼうがいしやなどが出土している。

紡錘車は截頭円錐形につくられ、側面及び底部には、それぞれ二本の線と一本の線に画された区画に鋸歯文の刻線が施こされている底部周辺には、整形の際に規準線としたと考えられる沈線が部分的にみられ、頂部の径一・九センチ、底部径四・ニセンチ、貫通孔の径〇・六センチ、厚さ一・九四センチを測るものである。この形式

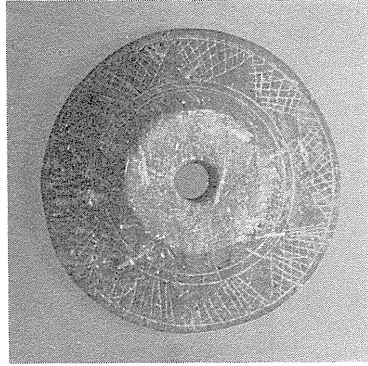


図101 E号墳出土の紡錘車

の紡錘車は近近では、尼崎市の若王寺遺跡から出土している。

遺物からみて、E号墳は六世紀中期から後半にかけての築造であることが認定せられ、A号墳の陶棺埋葬の時期と併行する時代の古墳であると推定されている。

八十塚古墳群出土の鉄器のうち、鉄刀子類の分析結果を紹介しておく。

Fe-64. 51, Fe_2O_3 -84. 71, SiO_2 -0. 35, Ti-0. 11, Mn-0. 003,
Cu-0. 00095, C-0. 37, P-0. 009, S-0. 073

「鍛造」された鋼が長年月のあいだに腐蝕現象を呈した一般的な成績量であり、「砂鉄」を原料として製錬されたものと認定されている。分析は長谷川熊彦氏に依頼し、川崎製鉄株式会社神戸研究部でおこなわれた。

へ、八十塚地区出土遺物 八十塚古墳群が過去において大量に破壊されたことを裏付けるように、地元にはかなり多量の出土遺物が保存されている。そのうちでも岩ヶ平の朝比奈貞雄氏の保存されている遺物がもつともままとまっており出土地域も明らかかなものである。

主要な遺物には須恵器の罎・提瓶・直口壺・高坏・坏の身と蓋・器台や銀環（銅芯銀巻き）・各種鉄器類などがある。何れも六世紀後半から七世紀中頃までと認定されており、時期的には八十塚A、B、C、E号墳と同時期であり、八十塚古墳群の成立した時期と一致している。

以上が発掘調査その他によって知り得た八十塚古墳群の内容の概観である。分布調査をおこなってみると、未調査の古墳を含めて、八十塚古墳群は数基づつの古墳がグループをなして存在している可能性がある。

それぞれの石室の構造は異なっているが、同一グループの古墳群は入口の方向が同一方向を向いている場合が多い。通常は四―六基がグループを構成しているのではなからうか。

芦屋郷についての文献に恵まれないため、推測の域を出ないのであるが、これらの小グループの古墳群が、一房戸とか一郷戸単位に設けられた墓域を示すものではなかったか、という考え方もある。

《朝日ヶ丘古墳群》遺跡地は朝日ヶ丘町の標高九一メートルをはかる朝日ヶ丘丘陵の山頂部及び南面する斜面一帯である。地形的には、東・西・南の丘陵および低地一帯を一望しうる高所である。周辺の群集墳と比較すると、地形的には狭い山頂尾根突端を中心としていて、前期古墳にみられる立地条件とよく似ているのが特色である。

この付近は近世の初頭、羽柴秀吉や徳川幕府の手で、大坂城築城がなされた際に、石垣用石材の切出しの地として、石工たちが採石をした地域であり、その際に大多数の古墳が破壊された可能性もある。現在も巨石が濃密に遺存していて、「くさび」の打込まれた石や「石ノミ」(第五章第二節参照)のものも発見されている。

現存している朝日ヶ丘古墳群は数基にすぎないが、ほとんど全壊の状況で、発掘調査によって、わずかに痕跡を知り得たのは二基であった。

この辛うじて遺存した二基の古墳すら、いずれも天井石は失われ、石室側壁も根石だけしか遺存しないという

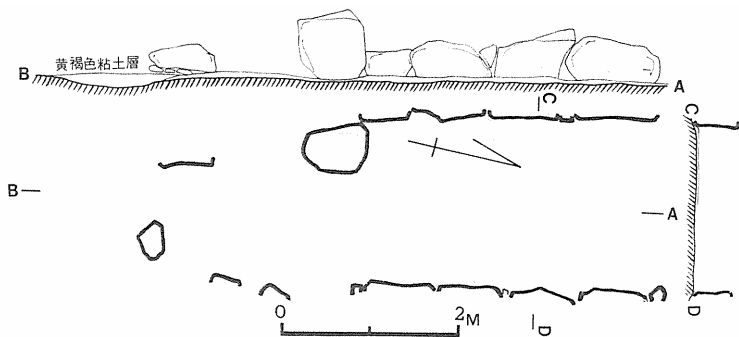


図102 朝日ヶ丘古墳群 1号墳実測図

荒廃ぶりであったが、片袖式の南面する横穴式石室墳の原形を推定することは可能であった。（吉屋市文化財調査報告 第四集）

1、朝日ヶ丘一号墳 一号墳は朝日ヶ丘丘陵の山頂突端部に築かれた南面する右片袖式の横穴式石室墳である。奥壁および側壁は遺存せず、側壁の根石のみが若干遺存して古墳であったことが推測される状況であった。

石室の規模は、南北の全長六・一メートル、玄室内の全長三・四メートル、玄室幅一・九メートル、羨道幅一・三メートルである。

厚さ二〇センチの堆積土の直下に、厚さ二センチの粘土床があり、この下は灰黄色地山となっている。

石室の構築には、先ず地山を掘込んで石室の縄張りをおこない、奥壁から順次石積みを行ったらしく、このため地山面の縄張りとは積石の大きさが狂いが生じたためか、袖部のところで、玄室側壁石が一石はみ出してしまっており、袖部の根石が一石はやく構成されている。この点、袖部と奥壁部より積石をはじめたとしても、かなり計画性のない構築法の痕跡をとどめている。

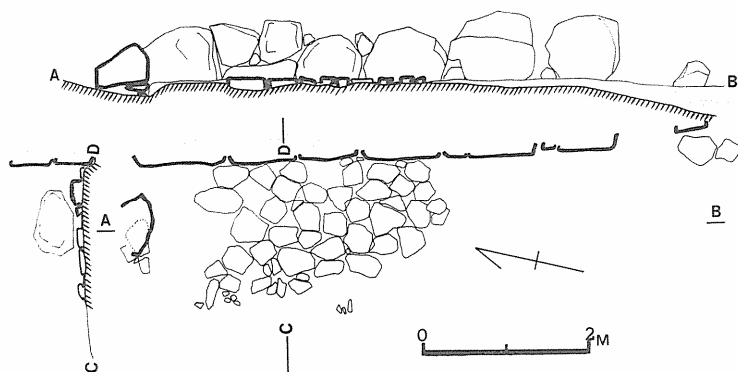


図103 朝日ヶ丘古墳群 2号墳実測図

出土遺物は断片的であるが、玄室内床面に遺存しており、鉄釘片若干が玄室内中央より西に偏して発見されるので、木棺葬墳であったことが推測され、ブルーのガラス小玉・土師器片・須恵器の高坏・鉄刀なども遺存していた。遺物からみて六世紀末の古墳と認定されている。

□、朝日ヶ丘二号墳 一号墳の西側に並列する形で構築された南面する構穴式石室墳である。西側の側石を失い、東側の側石の根石の一部と奥壁の一部を遺存している。

堆積土の直下に、径一〇—三〇センチにわたる扁平な割石を敷いた石敷床面が一部遺存していた。相併列して二基の同形式の横穴式石室墳が丘陵突端部の狭い尾根上ぎりぎりに造られながら、一は粘土床、一は石敷床と異なった床面構造をもっている。

石室の規模は全長約七メートル、玄室の全長約三・六メートル、玄室幅一・七メートル、羨道幅一メートルと推定されている。

遺物は天井石や側壁石が抜かれた際に、ほとんど失なわれたと考えられるが、一部残存していた石敷部で遺物を断片的に検出することが

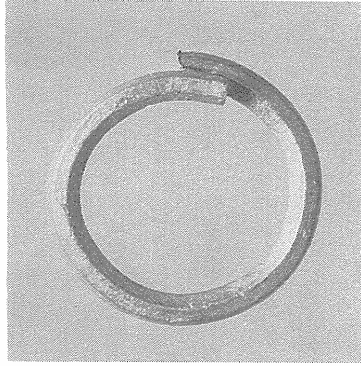


図104 2号墳出土の純金製耳飾

できた。

遺物には、純金製六角円形の耳飾りがあり、これは垂飾付耳飾りの環と考えられ、関連して垂飾品と考えられる銀針と銀製飾具や銅片も検出されている。鉄鉾釘も出土して、木棺葬墳であったことが推測されている。土器は土師器片・須恵器の高坏・器台・坏などであり、人骨片も微量ながら遺存していた。遺物の主体は六世紀後半と認定されているが、七世紀前半に比定されるものもあるので、追葬があったことを推測することができる。築造の時期は一号墳と同じく六世紀後半と認定されてい

る。

朝日ヶ丘古墳群出土の鉄器を長谷川熊彦氏に依頼して、日本鋼管株式会社技術研究所分析研究室において分析検査をおこなった。報告をうけた朝日ヶ丘古墳出土の鉄鉾釘の成分と考証結果は次のようである。

C-0.51, Si-0.53, Mn-0, P-0.021, S-0.132, Cu-0.275, Ti-0
Mn (マンガン)、Ti (チタン) の成分ゼロというのは微量未定量のことである。

さらに顕微鏡検査の結果では微細な「鍛造」組織層と腐蝕による水酸化鉄多量がみられる。Si (珪素) は鉍滓の含量のためであり、C (炭素)・Cu (銅) が割合に多いことは、この鉄釘の原料が砂鉄ではなく、「磁鉄鉱」であったことを推測させる由である。炭素の多いことは刃物用素材で、大陸から輸入された可能性が強いとされ

ている。

八、朝日ヶ丘地区出土遺物 朝日ヶ丘周辺の県営鉄筋住宅の建設工事中にも、朝日ヶ丘古墳群の若干が破壊されたが、採取されている提瓶・坏の身と蓋などは、何れも六世紀後半と認定されており、朝日ヶ丘古墳群は六世紀後半に築造され、以後にも追葬がおこなわれた古墳群であることを示している。

《劔谷古墳群》劔谷古墳群は、標高一五三メートルをはかる六麓荘地区に存在する。当地域に四〇年来居住している西川繁吉氏の話によると、昭和十二年の頃でも、付近には七〇―八〇基の群集墳が遺存していたらしい。

その後の造成工事で、六麓荘高級住宅地の出現とともに大半が破壊され、その際に出土した多量の遺物の内、主要なものは旧閑院宮家に保管されている由である。

残存している古墳は、十月頃になると狐が子供を産みにきて、三―四月頃になると、子供をつれて何処かへ消えていく由で、狐の住家となっていたらしい。発掘調査を行ったのは一号墳一基である。

一号墳は南面する横穴式石室墳で、玄室は約二分の一、天井石は約三分の一が遺存していた。封土は既に失なわれ、天井石が露出しており、羨道部は昭和十一年以来の六麓荘地区開発工事で道路と溝となって破壊されていた。調査の結果、一号墳は東から西へ傾斜する地山の上に盛土をして石室を構築しており、石室の側壁は小形の割石を六段に積んで持送っており、石の間隙には割石の小片をつめ込んでいた。奥壁も一枚石ではなく、大石と割石の積込みで、規模としては小規模なものに属する。

床面は石敷で、割石と丸い自然石の混在するものであるが、密な石敷を構成している。石敷の直上には真黒な

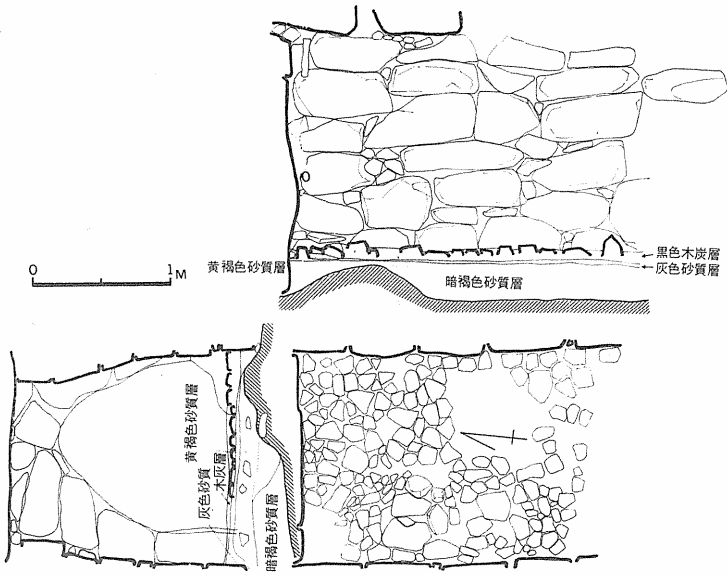


図105 劔谷1号墳実測図

木炭層が残されていた。

玄室床面の幅は一・五メートル、天井部の幅は八七センチ、高さ約一・七メートルで、玄室遺存部の長さは二・四メートルであった。石敷床面の中央部より南に鉄釘九片が検出され、木棺葬墳と推定されている。

検出された遺物は須恵器杯の身と蓋・土師器の皿などで、七世紀中頃の典型的な形式のものである。当古墳築造の年代も、この時期と推定されている。

地形的には、劔谷古墳群の直下で、南面して傾斜する山塊が分岐して三丘陵を形成しているが、それぞれ、苦楽園地区・老松町地区・八十塚地区の群集墳を構成している。いわば地形的には最高所にあつて、最も新しい時期に築かれたのが劔谷一号墳である。



図106 三条町古墳出土竈形土器

また、劔谷地区から出土した遺物が若干、地元で保管されているが、すべて一号墳出土の遺物と同形式の土器が主で、七世紀中頃と認定されている。

《三条古墳群》 三条町にも多数の古墳が遺存し、群集墳を構成していたと伝えられるが、邸宅造成などのため姿を消して、現在では二基が確認されているだけである。

しかし、この二基は未調査であり内容は不明である。したがって昭和三年五月に三条寺ノ内の西村磯右衛門氏所有地に存在した二基の古墳の出土遺物で三条古墳群の一端を紹介することにする。

一基からは竈形土器かまがた（完形品・土師器）・須恵器の台付壺ま・壺二・高坏七・坏四・提瓶一・はぞう一および鉄鏃若干が出土している。

また他の一基からは須恵器の台付壺二・高坏三・坏一八・はぞう一とガラス小玉類・雲珠うず五・鉄鏃一〇余本を出土している。いずれも現在は京都大学文学部博物館に保管されている。

これらのほかに涼塚・岩窟塚などと名付けられた古墳が最近まで存在したが、これも現在では痕跡をのこしていない。さらに西山町の芦屋廃寺の故地からも、明治四十一年に神戸史談会員の手によって、石棺蓋・須恵器・鉄器が発掘されたことがあるが、具体的な内容と遺物は不明である。

市内に現存する三条古墳群関係の遺物は、須磨喜三郎氏寄贈の台行長頸壺（朝顔型に開く口縁部をもち、頸部が細く、胴肩部が張り出し、安定した脚をもつ）と、山本伊右衛門氏蔵の台付壺が判明している。これらの遺物からみて、三条古墳群は古墳時代後期の終末期に属する遺物を出土していることが分り、ほぼ、その築造年代を推定することが可能である。



図107 西山町の甕棺出土状況

とくに城山南麓古墳と同じ形式の甕形土器を出土していることは注目すべきことで、近時、帰化人関係の有力者の墳墓と推定される地域から甕形土器の出土が報ぜられていることも参考にしておきたい。

《三条遺跡》 三条遺跡は三条町二四〇の地域で、造成工事中に検出された。表土下約一・五メートルの深さで、約二〇メートルにわたって遺物包含層があり、弥生式土器・土師器・須恵器・土釜類が出土している。

遺物の主要なものは、須恵器高坏・坏の身と蓋・円筒埴輪片・器台・土釜などであるが、弥生後期以来の集落址であった可能性が強く、遺物の主体は五世紀後半から六世紀前半にかけてのもので占められており、ついで、七世紀中頃のもの、八世紀末から九世紀にかけての遺物まで検出されているので、かなり長い期間にわたる山麓線の集落址



図108 城山古墳（芦屋名所絵葉書所載）

と推定されている。

西山町の芦屋廃寺址の発掘調査に際しても、寺院が構築される以前は、弥生後期から古墳時代全期にわたって集落が存在したことが認定されている。この集落の人は漁業も生活の手段としていたことが判明している。また埋葬形態としては、小児用に土師器の甕を二つ合せた、合せ口式の甕棺を用いたことが判明している。

このように三条遺跡・西山町遺跡を中心とした地域の人々と三条古墳群との間には密接な関係があったのではないかと推測されている。

《城山古墳群》 城山の南麓にも群集墳が存在した。昭和のはじめ頃までは、なお教基の古墳が存在したことが知られており、芦屋の名所としてそのうちの一基から、大正八年に清家植直氏が竈形土器（完形品・土絵葉書までつくられたこともあったほどである）。

師器）を発掘して学界の注目をひいたことがある。三条古墳群出土の竈形土器と同一形式であり、特異な分布を示す土器であるが、芦屋の地域から、高座川を境として、東と西の両方から発見されていることは、高座川沿いに同一系統の氏族が居住したことを推測させるものである。現在は一基の調査結果が判明している。

《旭塚古墳》 山芦屋町二三に所在し、昭和三十六年に京都大学の考古学教室で調査を行なった古墳である。両袖

式の横穴式石室墳で、天井石全部と側壁の一部は既に失われていた。羨道は南に開口し、羨道入口部から化粧石が両側にまわる円墳である。

近辺では、西宮市の苦楽園古墳が正南面する横穴式石室墳であるが、一封土内に並列する二石室をもち、両石室を張石によって結び、羨道入口の両側にも化粧石をめぐらせている例を示しており、構造的にはよく似ている。

調査の結果は概要報告によるとつぎのとおりである。「石室はゆるやか

な傾斜地に直接に石を据えて構築されたもので、奥壁だけが地山を少し掘りくぼめて据えられている。石室の平面は、ほぼ南向きの入口をもつ両袖式で、全長一メートル、玄室の長さ四メートル、幅一・八メートル、羨道の幅が一・六メートルで、袖がわずかに認められる程度である。ほぼ同じ幅で羨道の入口まで続いており、床面は入口に向かってわずかに下降している。現存の高さは、奥壁が一・六メートル、東西両壁が二・二メートル、羨道の玄室に近いところで一・六メートルある。石はこの地方に多い花崗岩であり、大部分が大きな石で、なかには長さ二メートル、幅一・五メートルに及ぶものも使われている。このような巨石を用いて構築された石室は、この付近では珍らしい。玄室には奥壁にそって幅いっぱいには平らな大石が敷いてあった。玄室の一部と羨道の一部には、粘土まじりの土で

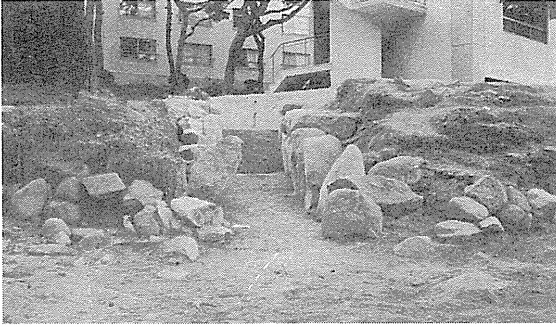


図109 旭塚古墳

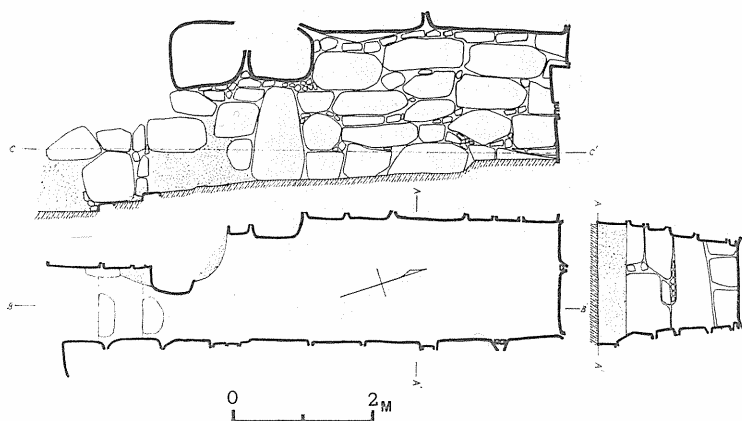


図110 芦屋神社境内古墳実測図

つくられた固い床面が認められた。玄室の中央部には、ベニガラを含み砂の部分があつて、中から骨片が検出された。この砂は、もとの床面の上下にわたっており、またその中に、須恵器の破片が混在していた点から、第二次あるいはそれ以後の埋葬にともなうものと考えられる。残存していた遺物は、須恵器の高坏三個・蓋二個・破片若干と鉄鎌一本とで、いずれも原位置とは認めがたいものである。石室の入口の両側で葺石が発見された。据の部分には、普通にみられるより大きな石が使用されている。据の部分が直線的であることから判断すると、この古墳はもともと方形であったかも知れない。古墳の東北西の各方面がすでに破壊されていたので、もとの墳形をたどることはできなかった。

本墳は城山古墳群唯一の調査された遺構である。

《その他の遺跡・遺物》 市域内にはなお教基の後期古墳の存在が知られている。

イ、駒塚 親王塚の北約三〇〇メートルの翠ヶ丘町二一番地には横穴式石室をもつ円墳があつて、駒塚または馬塚とよばれていた

が明治の末ごろに取りこわされたらしい。出土遺物には勾玉・切子玉・管玉・小玉・金環などがあり、現在は西宮市の辰馬悦蔵氏が保存されている。出土遺物からみると、西宮市上ヶ原の関西学院大学構内古墳出土の遺物類と類似している。

この駒塚の南にも四ツ塚とよばれる四基の横穴式石室墳が存在したと伝えられている。翠ヶ丘古墳群ともいえる小群集墳が存在した可能性もある。

口、芦屋神社境内古墳 東芦屋町二六、芦屋神社境内にも構穴式石室をもつ円墳がほぼ完存しており、「あしやの里」(島之夫著)によれば、周辺にはなお数基の横穴式石室をもつ円墳が存在したことが記されている。

ハ、その他の遺跡 また、西芦屋町と三条南町の境からは、多量に須恵器が検出されている。遺跡の実体は不明であるが、一応、寺田遺跡と名付けられ、集落址の可能性が考えられている。

さらに市内で古墳時代の遺物が散布する地域には、翠ヶ丘町・三条町山手中学グラウンド西斜面・山芦屋町・東山町・東芦屋町・西山町・朝日ヶ丘町・芦有道路芦屋ゲートの南・松ノ内町・船戸町・大原町・岩園町などがあり、遺跡の性格については将来の調査をまちたい。

考古学上からみた芦屋

芦屋市における人類の足跡は無土器時代にすでに認められ、ついで、日本列島成立後の最初の明確な文化である縄文文化の早期末から前期初頭の時代にさかのぼることができる。摂津はもとより近畿地方において、最も早く人類の生活の場となっていた地域である。

それは、おそらく獣を追って放浪する狩猟民の生活の場であったと考えられており、遺構や遺物をのこしながら

らも、東日本に多くみられる貝塚を残していないのが特色である。

南面する六甲山系の流出堆積土は非常に厚く、余程の偶然でない限り、縄文遺跡は発見されにくい状況で、地下深く埋没していることにもよるが、朝日ヶ丘に代表される縄文人の生活の場は、その後どのような方面へ移動したかについては全く分らない。

近辺からは散見される状況で縄文文化の遺物が発見されているが、土器を伴なう生活の場の検出はおこなわれていない。芦屋市域では、縄文文化の開始とともに生活の場がつくられながら、それ以後数千年の長い期間、全く生活痕跡をのこさず、紀元前後の弥生中期の時代に入って、はじめて会下山・城山を代表とする山頂式高地性集落を出現させることになる。

弥生中期に突如として狭い山頂尾根部に集落を築いた会下山集落の住人たちは、瀬戸内海という海洋と関係のある要塞的集落・司祭者的集落を形成し、打出楠町堂の上出土の銅鐸を保持したと考えられる。

弥生後期まで山頂生活を営んだ会下山住民は、古墳時代に入ると、会下山を去っていった。山頂集落を必要としない社会に移行したらしい。しかし、移転していったその生活の場が何処であったかは明瞭ではない。

金津山や親王塚を代表とする中期古墳が遺存しているので、低地の打出の地域に、首長的性格をもった人が居住した可能性がよい。しかし、西山町遺跡にみられるように、山麓線には弥生後期以来、漁業をおこなった平地住民があつたことも参考として理解しておきたい。

そして古墳時代の後期になると、劔谷・八十塚・朝日ヶ丘・城山・三条などの地域に群集墳を出現させてい

る。これらの古墳群は二―九基の小グループの集合体でもあるので、房戸や郷戸と同じ組織の社会集団が存在したことを推測する人もあり、これほどの群集墳をのこした人々の生活の場は芦屋市内の何処かに存在したと考える人もある。しかし、現状では集落跡的なものは僅かに三条遺跡・西山町遺跡・寺田遺跡をあげうる程度である。

三条町や城山の古墳から発見されている土師質の竈形土器は、いわゆる帰化人の居住した地域で発見例の多い遺物である。朝日ヶ丘古墳出土の鉄器や純金製耳飾りも朝鮮半島より渡来したものである可能性がよい。弥生時代の会下山出土の漢式三角鏃も舶載品である。芦屋の浜を漢人浜からひとほまとよんでいるが、その伝承は案外に古いものであるかも知れないのである。

市内からは縄文文化期以来の多量の遺物が発見されている。その中でも土器類が最も多いが、弥生・須恵器を取上げてみても、それらの土器が何処で焼かれ、何処で生産されたかについては明らかではない。須恵器の窯跡は東方の宝塚市平井・山本、豊中市桜井谷・長興寺を経て吹田市内だけでも数十基をかぞえ、高槻市の成合なりあひにまで分布している。これらの須恵器窯と芦屋市内出土の須恵器との直接的な関係は未だ不明である。

石器類は自家生産されたと考えられているが、鉄器類や青銅器その他の金属については明瞭ではない。生産面での追求が今後とも必要な課題となっている。

芦屋の開発者は縄文以来、すなわち、日本歴史の出発とともに存在したわけであり、その子孫が、次の古代社会を形成していったはずである。そして、会下山遺跡・親王塚古墳などに代表されるように、それぞれの時期に

において、阪神地方では注目される有力な指導者が住んだ地域ということが出来る。